昼と夜の殺意

TOKUMA NOVELS 長篇青春ミステリー

赤川次郎



長篇青春ミステリー

昼と夜の殺意

赤川次郎



徳間書店

TOKUMA NOVELS

昼と夜の殺意——目次

確実な鼓動 9
二つの星 23
静かな叫び 39
秘密 54
約束 68
うわさ 82
出会い 98
オーディション 113

孤独の詩（うた） 128
容疑 140
白い時間 151
見知らぬ男の影 163
ネガの顔 177
幸福な破局 196
その日…… 214

本文挿画・水田秀穂

確実な鼓動

1

舞台裏というのは、覗くものではない。その舞台が華やかであればあるほど、覗いてはならないのだ。

それは比喩でも何でもないのだ。本当に、舞台の裏や、袖のごみごみしていることといったら！——ただでさえ苛々している出演者の神経を、そのごたごたがますます逆なでする。

「ちょっと、静かにしてよ！」

突然、ガラスを釘で引っかくような声を投げつけられて、韻子は、反射的に、

「すみません」

と言っていた。

それから、自分が何をやっていたのかしら、と考えた。——ああ、これか。

膝に、立てるようにして持っていたヴァイオリンの弦を、左手の指が、無意識に叩いていたのだ。弾いているわけではないから、微かな音をたてているだけなのだが、それでも、順番を前に、緊張し切っているコンクールの参加者には、耳障りなのだろう。

韻子は、ヴァイオリンを、膝の上に横にして置いた。

韻子を怒鳴りつけた娘は、軽く目をつぶって頭を振ると、

「ごめんなさい」

と静かな声になって言った。「ためなの。自信ないからピリピリして……。あなた、落ち着いてるわね」

「そうでもないけど……割合に慣れてるの」

と韻子は、微笑んだ。

「私、武田百合。あなたは？」
「水城韻子」
相手の娘は目をちょっと見開いて、
「水城？　じゃ、〝あの〟水城？」
と訊いた。
それから、あわてて、
「ほら、水城姉妹って……。今、ピアノ弾いてるのが――」
「姉よ、私の」
「そうなの。落ち着いてるわけだ」
武田百合という少女は、まじまじと韻子を眺めた。
韻子は、目をそらして、舞台の方へと顔を向けた。
長く垂れた幕の隙間から、姉、澄音の後姿が見えている。いつものように、左右へ体を波打つように動かしながら、スタインウェイのピアノから、音楽を叩き出していく。
袖には、順番を待つ二人の奏者が待機していることになっていた。今は、澄音の次に演奏する、ピアノ部門の最終奏者、武田百合と、続いて本選の始まるヴァイオリン部門の第一奏者、韻子の二人が、折りたたみ式の椅子に、向い合って座っているのだった。
武田百合の方は、淡いピンクのドレスで、いかにも高価そうなレースがふんだんに使ってあったが、韻子は、白のあっさりしたドレスだった。姉の、燃えるような赤のドレスとは対照的だ。
「――あなたのお姉さん、凄いわねえ」
と、武田百合が言った。「あがるってことないんでしょ、あなた方は」
「そうね」
韻子は長い髪を軽くかき上げて、肩をすくめた。十九歳の娘にしては、大人びた仕草だった。
水城澄音の演奏が終った。
拍手がホールに溢れんばかりだった。それまでの演奏者に比べ、一段と拍手の音が大きい。

「——いやだな、私があんなに巧い人の後なんて」
と、武田百合は顔をしかめた。
「しっかりね」
と韻子は言った。
「ありがとう」
武田百合は立ち上って、名前を呼ばれるのを待った。
澄音が戻って来る。別に、頬を紅潮させるでもなく、至って平静な様子だった。
入れ違いに、武田百合が、名前を呼ばれてステージに進み出て行った。
袖に戻って来た姉へ、
「ご苦労様」
と、韻子は声をかけた。
「何だ、次なの？」
澄音は足を止めて、初めて妹に気付いた、という様子で言った。
「うん。くじでトップになったの」
「そう。何もトップにならないよりはいいかもしれないわ」
澄音はそう言って、軽く笑った。
水城澄音、二十三歳。ちょっとふっくらした顔立ちで幼く見える妹とは対照的に、少し細面の、切れ長の目が、大人の女を感じさせた。スラリとしてはいるが、そう長身ではない。しかし、どこにいても、人の目をひきつける雰囲気を備えていた。
「お母さんは？」
と澄音は歩きかけて訊いた。
「もう来てると思うけど」
「でしょうね。——娘の晴れ姿を見るのが生きがいなんだから。まあ、頑張って」
「うん」
韻子は、澄音が歩き出すのを見送った。澄音は、ちょうど武田百合が奏き始めたのを聞いて振り返ると、
「ひどい音」

と呟いた。

姉が行ってしまうと、韻子はまたヴァイオリンを膝に立てて持った。——左手の、親指を除く四本の指が、弦の上で軽やかに踊った。

姉が出て行ったので、入れかわりにヴァイオリンの次の奏者がやって来て、向いの空いた椅子に座った。初めて見る顔だった。韻子と同じくらいの年齢の娘で、どうやらコンクールというものはこれが初めてらしく、顔は青ざめて、ほとんど引きつらんばかりである。

韻子は、何だかおかしいような気分で、それを眺めていた。——あがった、という記憶は、韻子にはない。姉の澄音も、もちろんそうだろう。

子供の頃から、二人は舞台の上で遊んでいたようなものだった。

「メトロノームを見なさい」

と、母はいつも言ったものだ。「あなたたちも、いつもああいう風でなくちゃだめよ。自分の心臓を、常に冷静にしておかなくちゃね」

2

子供の頃から数えて、ステージに立つのはこれで何回目だろう、と韻子は思った。

最初のステージなどは記憶にない。それほど昔のことだった。

たぶん、四歳になるかどうか、という頃であったろう。

演奏家になるには、実力を養うのはもちろんだが、その実力を、ステージで発揮できなくては意味がない。だから、子供には、できるだけひんぱんに、舞台に上らせる。

これが母の主義だった。——姉の澄音は、生来、人の前に出るのが好きな少女だったから、喜んでステージに立つ。しかし、韻子の方は、姉と対照的に、一人

でいるのが好きだった。
それだからこそ、慣れなくちゃ、と母は口ぐせのように言っていた。澄音も、面白がって妹を引張り出した……。
もちろん、今は韻子も、舞台へ出ることで別に緊張はしない。それが却って、物足りないくらいである。新鮮な感動も、気分の高揚も、何もない。——一体何が楽しくてこんなことをやってるんだろう、とときどき、韻子は思うことがあった。
——拍手の音で、韻子はふと我に返った。
武田百合が戻って来る。
「ああ、ひどい」
額は玉のような汗だ。
「ご苦労さま」
「三回もミス・タッチしちゃった。もうおしまいだわ」
「大丈夫よ」
「あなたのお姉さんの後じゃ目立つしね」
と、武田百合は、気を取り直すように笑って、「さて、ともかく終った、と」
「待ってるんでしょ？」
「発表？　私、帰るわ。どうせ分ってるもの。——でも、母がねえ」
「お母さんがみえてるの？」
「いい加減、自分の娘に才能がないことを分ってくれてもいいと思うんだけど、これでまたお目玉くらって、特訓、特訓よ」
二人は顔を見合わせて笑った。お互い似た者同士、といった苦笑だ。
「じゃ、またその内に」
と武田百合は手を振って、袖から楽屋への階段を降りて行った。
——次のヴァイオリン部門が始まるまで、少し間がある。

韻子は、向いに座った次の奏者の少女を眺めていた。緊張のせいで、ひっきりなしに唇をなめたり、上を見たり下を見たり、忙しい。

膝が、それと分るほど震えている。

こういう人は、演奏家には向いていないだろう、と韻子は思った。教育者にはいいかもしれないけど。

足音に顔を上げると、武田百合が戻って来たのだった。

「どうしたの？」

「ねえ、あなたに会いたいって人が……」

「私に？」

「そう。栗崎さんって人よ」

韻子は思わず腰を浮かした。

「知ってる人？」

と、武田百合が言った。

「ええ……」

韻子は立ち上ったものの、その場から動けなかった。いつ、名前を呼ばれて出て行かなくてはならないか分らないのだ。

「——何か言っときましょうか」

武田百合が言った。

「いえ、行くわ」

韻子は思い切って、ヴァイオリンと弓を椅子に置くと、階段を駆け降りた。

薄暗い廊下に、人影があった。

「——栗崎さん」

と、韻子が呼ぶと、その青年が振り返る。

「やあ、悪いね」

と、栗崎が言った。

「いいの。でもどうしたの？　びっくりしたわ」

「邪魔するつもりじゃなかったんだ」

「次が出番なの」

「うん、知ってる」

背広にネクタイという、ごく当り前のビジネスマン

スタイルだが、どことなく、坊っちゃんらしい雰囲気を漂わせている。
「何か――ご用？」
韻子は、軽く上目づかいに、栗崎を見ながら訊いた。
「これから出張なんだ。急にね」
「まあ、大変ね」
「だから、君の演奏を聞いて行けないんだ……」
「そんなことといいのよ」
韻子は微笑んだ。「どこへ行くの？」
「北海道だ。一週間で帰る」
「そう。――じゃ、急ぐんでしょ？」
「車、待たせてある」
二人は、何となく黙った。――どちらも急いでいて、時間がなかった。しかし、言葉が出て来ないのだ。
武田百合が駆け降りて来た。
「ねえ！　呼んでるわよ！」
韻子がハッと顔を上げた。
「行かなきゃ」
「頑張って」
と、栗崎が言った。
「ありがとう」
韻子は、武田百合の方へ、肯いて見せて、階段の方へ駆け出した。
「韻子さん」
と、栗崎が呼んだ。
「え？」
階段へ足をかけたまま、韻子が振り返る。
栗崎がいきなり走り寄ると、韻子を抱きしめた。韻子は、何も考える間もなく、彼の唇で、唇を塞がれていた。
突風のように、それは韻子を圧倒した。――栗崎が、韻子から離れる。
「それじゃ――」
栗崎は廊下を駆けて行った。韻子が呆然とそれを見

送る。
「早く出て！」
と、武田百合が言った。
韻子は我に返ると、階段を駆け上り、袖を走り抜けながら、椅子の上のヴァイオリンと弓をつかんでいた。

3

栗崎が、ホールのロビーを小走りに抜けて、表に待たせたタクシーの方へ向かって行くと、
「栗崎さん」
と、声がした。
足を止めて振り向く。澄音が立っていた。
「やあ、今日は」
栗崎は、ちょっと目をそらしながら、言った。
「韻子のところへ行ったの？」
「いや……ちょっと寄ってみたんだ」
「――私の演奏、聞いてくれた？」
澄音は、ゆっくりと歩きながら言った。
「急に出張になってね」
と、栗崎は、ちょっと表の方へ目を向ける。
「そう。――急ぐの？」
「車を待たせてるもんだから……」
「最近はさっぱり、うちへ来て下さらないのね」
澄音は、ロビーに置かれた椅子に腰をかけた。「――ここへ座ったら？」
「そうしていられないんだ。急がないと飛行機が出る」
「韻子には会ったの？」
栗崎は、軽くため息をついた。
「今、会って来たよ」
「母が不思議がってるわ。――韻子が最近帰りが遅い、って」
栗崎は、じっと澄音を見つめた。澄音は立ち上がる



17. 確実な鼓動

と、栗崎に真っ直ぐ、向い合って立った。
「私とはもう会いたくないの？」
「ねえ、待ってくれ。今、こんな所で話ができるようなことじゃないだろう」
「逃げないで」
「逃げてるんじゃない。仕事なんだよ」
「分かったわ」
澄音は言って、両手をギュッと握り合わせた。「じゃ、帰ったら、はっきり話をつけるから」
「そうするよ」
栗崎は、口の中で、それじゃ、と呟いて、小走りに、ロビーから出て行った。
澄音は、ガラス戸越しに、走り去るタクシーを見送っていた。
「――聞かないんですか？」
振り向くと、澄音の後輩の一人が立っている。
「もう終った？」
「まだです。でも、いいですよ、妹さん」
「そう」
澄音はまた椅子に腰をおろした。「終わったら呼んで」
「はい」
後輩は、ちょっと戸惑ったように言って、そっと中へ戻って行った。重い扉が開くと、韻子の奏くヴァイオリンの音が、洩れ出て来る。
武田百合がロビーへ出て来た。澄音を見ると、ちょっと会釈した。
「私の後に奏いた人ね」
と、澄音は言った。「あなた、もうピアノやめたら？」
武田百合は面食らって、澄音を見つめた。
「ピアノをやめろって……。どうしてですか？」
「時間のむだよ。才能ないわ、あなたには」
武田百合は、さっと青ざめた。しかし、黙って、

軽く頭を下げただけで、そのまま歩いて行った。
澄音は、軽く声をたてて笑った。
拍手が聞こえる。韻子の演奏が終ったらしい。
何人かの人が、ロビーへ出て来た。
「今の、良かったね」
「あの妹の方でしょ？」
といった声が耳に入る。
少しして、韻子がやって来た。
「お姉さん、ここにいたの」
と汗を拭いて、「ああ、疲れちゃった！」
「評判いいわよ」
「聞いてくれた？」
「ここで休んでたの」
「そう。後でテープ聞いてね」
「いいわよ」
澄音は天井を見上げた。「——栗崎さんに会ったわ」
「そう。私もさっき——」
韻子はちょっとあわてたように言った。
「出張ですってね」
「北海道だって。いいわね、この時期は」
「行ってみる？」
「まさか」
と、韻子は笑った。
「私、行こうかな」
と、澄音は立ち上って、腰を伸ばした。
「どこへ？——」
「北海道よ。栗崎さんにも会えるし」
「だって、あちらはお仕事よ」
「夜中まで仕事してるわけじゃないでしょ。こっちは昼間見物してるからいいわ」
韻子は、少し間を置いて、言った。
「本当に行くの？」
澄音は軽く笑って、
「冗談よ。レッスン休ませてくれやしないわ、お母さ

んが」
と言うと、スカートの裾をひるがえして、歩いて行ってしまった。
韻子は、何となく不安げに、その後姿を見ていたが、
「韻子……凄かったわよ！」
と、友人が二、三人駆け寄って来ると、一緒になって、笑顔を見せた。
——澄音はホールの中へ入った。
次の奏者が、ヴァイオリンの音を合せている。
母が座っている隣の席へ、澄音は腰をかけた。
「どこにいたの？」
と母が言った。
「ロビー。疲れちゃってね」
「あれぐらいで」
と、母はちょっと顔をしかめた。「でも悪くなかったわ」
「韻子は？」
「まあまあね。出が遅れたけど」
「栗崎さんと会ってたのよ」
澄音の言葉に、母はちょっとけげんな顔をした。
「栗崎さんがみえたの？」
と、母が言った。
水城貞子、五十歳。——見たところは、四十代もせいぜい半ばでしかない。
一見したところ、昔の教師という印象を与える。ピンと背筋が伸びていて、視線も、さまようことがない。きつい面立ちには、固い意志の力が漲っている。気品はあるが、あくまで冷たく、近寄りがたい女性だった。
「知ってれば、挨拶したのに。言ってくれればいいじゃないの」
と貞子は澄音に言った。
「急いでらしたようよ、それに会いたかったのは韻子だけだったらしいし」

「韻子に？——あなた、何か知ってるの？」
「お母さんが知らないだけよ」
と澄音が低く笑った。
「まさか——」
と言いかけた貞子は、顔見知りの婦人と目が合って、
「まあ、どうも」
と会釈した。
「相変らずすばらしいですわね、お嬢さん方は」
「いいえ、一向に」
「この後、娘も出ますの」
「楽しみに聞かせていただきますわ」
と貞子はにこやかに微笑みながら、言った。
「よくやるわね——」
と澄音が呟くように言った。「あそこの子はもうだめでしょ」
「大きな声で言わないの」
と貞子は言った。「あの家はお金かけてる割に子供が練習しないのよ」
「今度落ちたら考えるでしょ」
澄音は欠伸をした。「発表まで聞いて行く？」
「もちろんよ」
貞子は口をつぐんだ。次の奏者が、やっと仕度を終えたのである。
演奏中には口をきいたり出入りしたりしない。このマナーは、貞子が二人の娘に厳しく教え込んで来た。どんなに聞くに堪えない演奏でも、黙って聞き通すのが礼儀というものである。
——一方、韻子は、やっと、ロビーで一人になってホッとしていた。
もちろん友人たちに囲まれているのは楽しいが、それでも長くなると疲れてしまうのである。一人で、ぼんやりしているときが最高だ、と思った。
さっき一緒だった武田百合が、帰り仕度で出て来た。
「あら、もう帰るの」

と顔子が言った。
「うん、結果は分ってるものね」
と言って、「あなたのお姉さんに、才能ないからピアノやめろって言われちゃった」
「まあ。そんなこと言ったの？——ごめんなさい。気にしないで。いつもああなのよ」
「分ってるわ。でも、あなたたち、姉妹でもずいぶん違うのねえ」
顔子は、ちょっと曖昧に微笑んだ。

二つの星

1

「母は、ピアニスト志望だったのよ」
と、韻子は言った。「でも、両親がうるさくて、習わせてもらえず、一人で家を飛び出して、あるピアニストの弟子になったの」
「ずいぶん思い切ったことをしたのね」
武田百合が言った。
二人は、ホールを出て、その筋向いにあった小さな喫茶店に入っていた。韻子は舞台用のドレスのままだったが、あまり異和感はなかった。大体が目立たない娘なのである。
「――それで、どうなったの？」
「結局母はピアニストにはなれなくて……。腕の病気になってしまったのよ」
「気の毒ね」
「家へ帰らざるを得なかったわけね。母のように気の強い人には、屈辱だったわけでしょう。――それで、お金持と結婚し、子供を音楽家に育て上げることに夢をかけた、というわけ」
「それでなのね」
「何が？」
「名前よ。――澄音さんと韻子さん。何だか生れたときから音楽家って感じじゃない」
「母の願いがこめられている、ってわけよ」
韻子は、ちょっと笑った。
「どうして楽器は姉妹で別々なの？」
「姉の方が才能はあるの。小さい頃から器用だったし。

上達も早くて。——でも、私は無器用で、いつも叱られてばかり。姉との間に、あんまり差がつくと私がやる気を失うんじゃないかって母が気をつかって、ヴァイオリンをやらせたの」

「そういうことか」

武田百合はカップをゆっくりと回転させながら肯いた。「大変ねえ、親ごさんが熱心だと」

「母の気持は良く分るんだけどね」

と、韻子は言って、表へ目を向けた。

ホールが見える。——あそこでも、もう何回か奏いた。

自分の青春は、コンクリートの箱の中で、終ってしまったような気がする。

「でも偉いわね」

と武田百合が言った。「私は年中反抗して来たわ。一体誰のために、こんなことやってるんだ、って言いたかった」

私だって、と韻子は思った。しかし、母の気持を考えると、それを口にはできなかったのだ。

「姉は、母の夢を実現すると思うわ、きっと」

と、韻子は言った。

「あなたは、あんまり人と競うというタイプじゃないみたいね」

「そうなのよ」

と韻子は笑った。「つい、お先にどうぞ、って言っちゃうの」

二人は一緒になって笑った。

武田百合は腕時計を見て、

「もう帰らなきゃ」

と立ち上った。「ヴァイオリン、優勝できるといいわね」

「ありがとう」

「あの男の人は、婚約者？」

「え？——違うわよ」

韻子は、ちょっと赤くなった。
喫茶店を出て、韻子はホールへ戻った。
まだ演奏が続いている。途中から入るわけにもいかず、ロビーの椅子に腰をおろしていた。
栗崎の、いきなりのキスが、今になって胸をときめかせる。——こんな風に鈍いからだめなのかしらと思った。
拍手の音がして、何人かの客が出て来た。中へ入ろうか、と立ち止ると、母が出て来るのが見えた。
「どこにいたの？」
と貞子はとがめるように言った。「ちゃんと他の人の演奏を聞いておかなきゃ、だめじゃないの」
「ごめんなさい。ちょっとお友だちと——」
「栗崎さんがみえたんですって？」
韻子は、ちょっとためらってから、
「ええ」
と肯いた。
「澄音が言ってたけど、あなた、栗崎さんとお付合いしてるの？」
何もこんな所で、と韻子は思った。知っている顔がいくらもいるのだ。
「二、三度食事しただけよ」
と韻子は言った。
「それだけ？」
「ええ」
貞子は、探るように韻子を見ていたが、やがて肩をすくめて、
「それは構わないけど、あんまり深みにはまらないようにね」
「どういう意味？」
「栗崎さんはお仕事でいつ異動があるか分らない方でしょ。音楽家の夫にはふさわしくないわ」
「そんなこと——考えてもいなかったわ、私……」
韻子は頬を赤らめて言った。

「それならいいの。あなたは世間知らずなんだから、用心してちょうだい」
母の言い方には、問答無用というところがある。
韻子は、
「気を付けるわ」
とだけ言った。
「私、上尾先生にご挨拶して来るから。あなた、入っていなさい」
貞子は、人の間を縫って、さっさと歩いて行ってしまった。韻子は、軽くため息をついて、中へ入った。
そろそろ最終奏者である。姉の姿を見つけて、隣の席に座る。
「お姉さん、お母さんに何て言ったの？」
「何の話？」
澄音は、パンフレットを見ながら訊き返した。
韻子は、
「何でもないわ」
と言って、座席に体をゆだねた。
——母や姉は、どこまで知っているのだろうか？栗崎に結婚を申し込まれていることを、察しているだろうか？
いや、そんなことはない。もし知っていれば、母が黙っているはずはなかった。
「もうこの人で終りね」
と澄音が言った。「あなたも二位ぐらいにはなれるかもしれないわ」
結局、コンクールの結果は、大方の予想通りで、ピアノ部門は澄音がもう一人の男性と共に一位。ヴァイオリンでは韻子が二位になった。
——会場を出ると、もう外は暗くなりかけている。
貞子と姉妹は、車で赤坂に出た。小さいが、静かなレストランで夕食をとることにしたのである。
貞子は、食事が一段落すると、デザートの来るまでの間に、二人の娘をまじまじと見ていた。

「――何のお話？」
と澄音が言った。「何か言いたいことがありそうよ」
「これからのことよ」
と貞子は言った。「いつまでも、ああして国内のコンクールで勝っていても、仕方ないわ。これからは外へ出て行くことを考えなくちゃ」
「どういう意味？」
と韻子が訊く。
「留学よ。――上尾先生とよくご相談したの。今はウィーンやニューヨークより、ベルリン辺りの方がいいだろうというお話だったのよ」
「ベルリン……」
韻子は思わず呟いた。
「いいじゃないの」
澄音がのんびりと言った。「一度行ってみたかったし」
韻子は、少し間を置いて言った。
「私も行くの？」
「当り前よ。もちろん、すぐにというわけじゃないけど、機会があり次第ね。上尾先生の知っていらっしゃる方が面倒はみて下さるそうだし」
貞子は微笑んだ。「あちらでデビューすれば帰ってからも扱いが違うわ」
「でも――大変じゃないの」
と韻子が言った。「そうなったら、一か月やそこらじゃ済まないでしょう」
「二、三年は帰らないつもりでいなきゃ」
と貞子は事もなげに言った。
「二、三年も？」
と韻子は驚いたが、澄音の方は、多少話を聞いていたのか、至って平静である。
「日本の中だけの演奏家で終るつもり？」
「でも、そんなにまでして――」
「行きたくないの？」

韻子は詰まった。——そう問いつめられると、答えられない。

「何かわけがあるんでしょ」

澄音が愉快そうに言った。「ねえ、韻子」

「私は……」

韻子は言いかけて、やめた。言ったところで、気持を動かす母ではない。

「異存ないわね」

と貞子は言った。「早速、上尾先生に明日にでもお会いしてお願いしておくから」

韻子は、黙ってデザートを食べた。——栗崎が何と言うだろう？

行きたくない！　行きたくない！　韻子は心の中で叫んでいたが、それがどうしても言葉になって出て来ないのだった。

「ヨーロッパはいいでしょうね」

と、澄音が言った。

2

「もしもし」

韻子は、低い声で言った。「あの——栗崎さんのお部屋をお願いしたいんですけど」

「お待ち下さい」

ホテルの交換手が、電話をつなぐのが、もどかしいほど遅い。

韻子は、家の廊下で、母や姉が来ないかと、ハラハラしながら、受話器を握りしめていた。

部屋を呼び出す音がした。——しかし、誰も出ない。

いないのかしら？

電話は鳴り続ける。——早く出て！　早く！

スリッパの音がした。韻子は受話器を急いで置いた。

「あら韻子、どこへかけてたの？」

と澄音が風呂上りの、バスタオルを体に巻いたスタ

イルでやって来る。
「別に。お友だちの所よ」
韻子は自分の部屋へと戻りかけた。
「隠すことないじゃないの」
と、澄音は笑った。「栗崎さんにかけたんでしょ」
「違うわ」
「お母さんが聞いたら怒るわよ」
韻子が、
「やめてよ、お願い！」
と言った。
「分ってるわよ。——ねえ韻子」
澄音は、妹を部屋の中へ押しやるようにしながら、
「あなた、栗崎さんとはどうなってるの？」
と訊いた。
韻子は、ベッドに腰かけた。
「どうって……別に」
「結婚の約束は？」
「——申し込まれてはいるの」
「やっぱりね」
澄音は肯いて、「それで、どうするつもり？」
「分らないの」
「そうやって、はっきりしないからいけないのよ」
「だって……お母さんに言われたら、いやとはいえないし」
「あなたはドイツへ勉強に行くより、栗崎さんと一緒になりたいんでしょ？」
韻子は姉の顔を見つめた。
「——じゃ、そうすれば？」
と澄音は言った。
「簡単に言うけど……」
「やっちゃえばいいのよ。明日、札幌へ行きなさいよ」
「明日？」
「そして栗崎さんと事実上、夫婦になっちゃえばいい

のよ。そしたら、お母さんも諦めるわ」
「そんなこと……できないわ」
と韻子が呟くように言った。
「待ってて」
澄音は一旦部屋を出ると、すぐに戻って来た。「航空券よ。明日行けば分るようになってるわ」
韻子は、呆気に取られて、姉を見ていた。
「どうしたの、お姉さん、この券？」
と、韻子は、手の中の航空券を見て、言った。
「いらないの？　だったら返してよ」
と、澄音が手を出す。
韻子は、思わず券を持った手を引込めた。澄音がクスッと笑う。
「素直にもらっときゃいいじゃないの」
「お姉さんが使うつもりだったの？」
「この間もらったのよ。だから明日使おうかと思って、頼んどいたの。でも、結婚の約束までしてるのなら、手を引くわ」
バスタオル一枚の澄音は、「寒くなっちゃった。——じゃ、明日、お母さんにばれないように、うまくやんなさいよ」
と言って、韻子の部屋を出て行った。
韻子は、しばらくポカンとしていた。手の中の券を、まるでその内、木の葉に変るんじゃないか、というように眺めていた。
姉が、こんな風に気を遣ってくれたのは、初めてだったのだ。戸惑うのも、当然であった。
しかし、気性の激しい女性によくあるように、澄音は至って気まぐれで、時として、急に親切になる。だからいつも真意が分らなくて困ってしまうのだが。
けれども、この手の中の紙片は、間違いないものらしい。——韻子は、もらっておこう、と思った。
だが、これを使うかどうか。それはそう簡単に決心のつくものではなかった。

栗崎の所へ行く。二人で一緒に泊れば、どうなるか。——いや、実際はどうにもならなくても、他人の目にどう映るかは、分り切っている。

それは同時に、母の手から飛び立つことでもあった。そこまでの踏ん切りをつけるのは、容易ではない。

母の受けるショックは、いかばかりだろうか。姉の方に大きく期待をかけているといっても、韻子のことも、まだ諦めているわけではない。

韻子は、栗崎を愛してはいたが、そのために、こんな方法で、家を捨てたくはなかった。ともかく、いきなり家を出てしまうのは、母に対してむごい仕打だ、と思ったのだ。

散々迷って、韻子は、居間へ降りて行った。父、水城章造は、今、仕事でアメリカにいる。

母は一人で、何やら、アルバムを開いていた。

「——お母さん」

と声をかけると、貞子が急いでアルバムを閉じる。

「韻子、まだ起きていたの？」

そう言われて、韻子は、初めて、もう十二時を回っていることに気が付いた。

「ちょっとお話があるの」

「座ったら？」

韻子は、立ったまま、言った。

「栗崎さんに結婚を申し込まれてるの」

貞子は、呆れたように、

「あなた、いくつだと思ってるの？」

「すぐに、というんじゃないのよ。ただ——約束してほしいって……」

「断っちゃいなさい」

貞子は即座に言った。「私がお断りしてあげるわ」

母に、いきなり断ってやると言われてしまっては、韻子も次の言葉が出て来ない。

そのまま、黙っていた。貞子は、

「どうしたの？　心配することないわ。私がうまくお

断りしておいてあげるから」
「でも――」
韻子は、言いかけて、言葉を切った。母がアルバムを開き始めたからだ。
「ほら、韻子。見てごらんなさい。――私の舞台姿よ。何度も立てなかったけど、今もとても懐しいわ」
韻子は、ちょっと微笑んだ。貞子はゆっくりとページをめくりながら、
「いつか、私もヨーロッパのホールで、奏いてみたかったわ」
と言った。「あなたなら、それができるのよ」
「お母さん」
と、韻子は言った。「私……栗崎さんのこと、好きなのよ」
貞子が韻子を見た。韻子は、つい目を伏せた。悪いことをしているわけでもないのに、つい、そんな気にさせられてしまうのだ。
「好きになるのは、病気か事故のようなものよ」
と、貞子は言った。「避けようがないわ。仕方のないことですよ」
韻子は、神経質に両手をねじり合せた。
「でもね、韻子、恋だの愛だのは、終れば、それで済むけれど、結婚というのはそういうわけにいかないのよ」
「ええ、それは……」
「分ってるなら、まだ早すぎるってことも分るでしょう。そんなことを決めて、自分の人生を棒に振るつもり？」
「私、別に今すぐどうこうっていうわけじゃないの。ただ――」
「お付合いはやめておきなさい」
韻子は母を見た。
「どうして？」
「ずっと先に、なんて言っていても、若い内は気持を

抑え切れるものじゃないわ。いつの間にかのめり込んで、どうにもならなくなるのよ。だったら別れた方がいいわ」

韻子は目を伏せた。

母の反応は、予測がついたものの、なまじヒステリックに怒鳴られる方が、韻子としても言い返す勇気が出たのかもしれない。

だが、母はあくまでいつもの調子を崩さない。——韻子は、まるでレッスンを受けているときのような気持だった。

「分ったわね」

と貞子は言った。「男なんて一人じゃないのよ」

話は終った。

韻子は、

「おやすみなさい」

と呟くように言って、居間を出て行った。

自分の部屋へ戻ると、韻子は椅子に座って、しばらく動かなかった。

一人になると、様々な想いが渦を巻く。しかし、いざ母の前に出ると、何も言えなくなってしまうのだ。

韻子は、立ち上がると、むやみに、部屋の中を歩き回った。

3

翌日になると、もう貞子は、ドイツ行きの話を頼むために、上尾の所へと出かけて行った。

韻子は、ほとんどまんじりともせずに一夜を過し、起きて来ると、もう母は出かけた後だった。

「——お姉さん、出かけるの？」

と、韻子は訊いた。

澄音が、いやに大人びた——というのは、いつも人目につく派手な服を着ているからだが——地味なスーツを着ているのを見たからである。

「そう。ちょっと先生に用事があってね」
「帰りは？」
「たぶん遅くなるわね。じゃ、もう出ないと」
澄音はハンドバッグを手に、玄関の方へ行きかけて、振り向き、「あなた、どうするの？」
と、訊いた。
韻子は一瞬迷ってから、
「行くわ」
と言った。
「頑張って」
澄音は軽くウインクして見せると、出かけて行った。
——韻子は、しばらくその場にぼんやりと突っ立っていたが、やがて、思い切ったように、二階へと駆け上って行った。
「どうもお世話になりまして」
栗崎はホテルの前で、仕事の顧客と別れた。車が遠去かって行くのを、一礼して見送ると、急に肩の力が抜けるのが分る。
これで、札幌での仕事は終りである。後は、明日の飛行機で帰るばかりだ。
ホテルへ入ると、部屋へ戻ってすぐ眠るのも惜しくて、ロビーを横切り、バーへと足を向けた。
夜、どこかへくり出す元気は、とてもなかったが、疲れてはいても、そう簡単に寝つけない。こういうときは、少しアルコールを入れるに限るのである。
夜の九時を少し回っていた。バーはまだこれから混むのだろう。空席があちこちにあった。
水割りを取って、ゆっくりと流し込んでいると、不意に、目の前に誰かが座った。
「——今晩は」
栗崎は目を丸くした。
「——澄音さん！　どうしてこんなところに？」
「私は、いつも神出鬼没でしょ」

澄音はニッコリ笑った。
「びっくりしたな、それにしても」
栗崎は、思わず笑っていた。
仕事が終った後の解放感が、栗崎の頬をゆるませた。
「今夜はもうお仕事はないんでしょ？」
「一応ね」
「じゃ、つき合って」
「どこへ？」
「どこでもいいわよ」
澄音は、オン・ザ・ロックが来ると、一気に飲み干した。

韻子は、その日の午後三時頃には、ホテルに着いていた。
もちろん栗崎の部屋は知っていたが、別にシングルルームを取って、一旦そこに落ち着いた。
こんなことをして、いいのだろうか。窓から札幌の市街を眺めて、韻子は自分に問いかけた。ルームサービスで取ったコーヒーをゆっくりと飲みながら、今頃母がもう、このことに気付いているかしら、と考えた。
姉の澄音は、男性に対しても、至ってオープンに付き合っている。韻子の知っている限りでも、今までに、恋人と呼べる男性が三人はいたし、他に、ちょっとした遊び相手なら、いくらでもいるだろう。
男性と二人で旅へ出るぐらいのことは年中だった。母も、その点はあまり問題にしていない。澄音が、男のことで思い悩んだりする性格でないことを、よく承知しているのだろう。
「子供ができないように気をつけて」
と、母が澄音に言っているのを、時々韻子は耳にしていた。
だが、その辺も、澄音は抜かりがない。男にのめり込むこともないし、相手が夢中になりそうだとなれば、巧みに突き放す。

韻子から見ると、姉が「愛」というものをどう考えているのか、理解できない。姉のやり方に反撥を覚えることも再三だったが、最近はもう気にならない。気にしないように努めている、と言うべきだろう。

韻子には、そんな風にゲームのような恋を楽しむ余裕はないのだ。韻子にとって、栗崎との恋は、ほとんど初めての経験である。

だから、不安もあった。しかし、栗崎は誠実な男性である。

もうここまで来てしまったんだもの、後は成り行きに任せるしかない、と韻子は自分へ言い聞かせた。

母が追っかけて来るだろうか？　そんなことはあるまい。韻子の姿が見えなくても、まさかこんな所へ来ているとは、思いもしないだろうから。

——時間がのろのろと過ぎて行った。

夜になって、栗崎の部屋へ電話してみたが、誰も出ない。仕事で遅くなっているのだろうか。

韻子は、ぼんやりと、ベッドに寝転がって、待った。緊張と、慣れない一人旅のせいか、いつしか眠っていた。ふと目を覚まし、びっくりして起き上る。

時計を見ると、もう十一時を回っている。——いくら何でも、栗崎も部屋へ帰っているだろう。

韻子は電話へ手を伸ばしたが、ためらった。もし、疲れて眠っていたら？

電話の音で起こされるのは、あまり愉快なものではない。

韻子は、キーを手に、部屋を出た。栗崎の部屋は、二階上である。

静かな廊下を歩いて行くと、どこからか、女の声が洩れて来る。それが何の声かぐらいは、韻子にも分った。顔を赤らめると、韻子はエレベーターへと急いだ。

エレベーターを降り、栗崎の部屋へと向う。

このホテルに入ってすぐ、部屋を見に行ったので、場所は分っていた。

ドアの前で足を止め、ノックしようとしてためらった。眠っているだろうか？

耳を澄ますと、戸棚がガタンと音をたてるのが耳に入った。まだ起きているのだ。

胸がときめいた。顔を見たらびっくりするだろう。

ノックすると、中でスリッパの音がした。ドアが開く。

栗崎は、韻子を見て、しばらく物も言えない様子だった。

「ごめんなさい、びっくりした？」

と韻子は微笑みながら言った。

栗崎はワイシャツの胸を少しはだけて、髪が乱れている。

「眠ってたの？」

「いや——そうじゃないんだけど。あの——君は——」

栗崎が、やっと我に返った様子で、「どうして……」と呟くように言った。

「突然、ごめんなさい。私、お話があって——」

韻子の言葉は、女の声で遮られた。

「あら、やっと来たの」

韻子は、耳を疑った。あの声は……。

栗崎を押しのけるようにして、部屋の中へ入る。ベッドから裸の腕を伸ばしているのは、澄音だった。

「あなたが遅いから、お先にご挨拶してたのよ」

と、澄音は言った。

韻子は、青ざめて立っている自分の姿を、衣裳棚の鏡の中に見ていた。——ソファに脱ぎ捨てられている澄音のワンピース、下着、ストッキング……。

何もかも、悪夢のようだった。

「君が来るなんて……」

栗崎の声がした。「知らなかった……」

韻子は、澄音の笑顔を、じっと見つめていた。——意地悪な笑いではない。

そこが、澄音の不思議なところだが、これほど人を

傷つける仕打ちを企んで、それでいて、まるで子供がちょっとしたいたずらで大人を困らせて喜んでいる程度にしか、思っていないのだった。分らなかった。

「――韻子、部屋は別に取ったの？」

澄音が訊いた。韻子は、無意識に肯いていた。

「そう、それじゃ私がここに泊っても、いいわね」

「ええ」

韻子は、声を押し殺して、言った。

「――失礼します」

開いたドアの所で声がした。「ルームサービスでございますが」

「あら、ちょうど良かったわ」

と、澄音が言った。「二人でちょっと運動したらお腹空いちゃってね。韻子も一緒に食べて行かない？」

韻子は、栗崎の部屋を出た。入れかわりに、ボーイが、ワゴンを部屋へ入れる。

韻子は、廊下を歩きながら、どこへ向っているのか

静かな叫び

1

羽田に着くと、韻子は、母の姿を見つけて驚いた。

「私が電話しといたのよ」

と、澄音が言った。「急に思い立って、私があなたを無理に引張って行ったんだ、ってね。そうしないと、説明が面倒でしょ」

「そうね」

と、韻子は言った。

帰りは、同じ飛行機で、並んで座って来た。栗崎の方は、もっと早い便で戻っていた。

韻子には、姉の気持が分らない。あんなことをしておいて、次の日は、

「あんた一人じゃ心細いでしょ」

と、妹に気をつかっている。

ただ、実際のところ、韻子は一人で帰りたくなかった。姉が一緒にいてくれて、ありがたいとさえ思っていた。

そんな気持にさせたのは、当の澄音なのだが、韻子には、姉を憎むということが、できない。

むしろ、憎むとすれば、栗崎の方だった。——不合理な話だと分ってはいるのだが、実際にそうなのだから、仕方ない。

「お母さん！」

澄音が手を振った。

「——二人とも、何なの、一体」

と、貞子が、渋い顔でやって来た。「黙って出かけちゃうなんて！」

「たまにはいいじゃないの」
と、澄音が言った。
「一言ぐらい言って行きなさい」
と貞子は不機嫌である。「北海道からいきなり電話なんて、びっくりするじゃないの」
「私は年中やってるわよ」
「あなたはね。でも韻子まで――」
「私がだきつけたの。少し図太くならないと演奏家としてはだめよ。一人旅ぐらい平気にならなくちゃ」
澄音の言葉には、母も一目置いている。
「まあいいわ」
と、肩をすくめて、「二人とも、お昼は？」
「軽く向うで食べて来たわ」
「それじゃ、行きましょうか」
と、貞子が先に立って歩き出す。
「どこに行くの？」
「上尾先生の所よ」
「ドイツ行の話？」
「それもあるわ。――ともかく、車を待たせてあるから」
と、貞子は足を早める。
澄音と韻子は、急いで母の後をついて行った。
ハイヤーに乗り込み、韻子は座席に体を沈めた。
――深い疲労感があった。
結局、自分は姉の手の中で、踊らされただけだ。
怒りも、悲しみもなくて、ただ、投げやりな疲労感だけがある。――もう、どうなってもいい、と思った。
「上尾先生がね」
と、貞子が言った。「韻子は見どころがある、とおっしゃってたわ。これから伸びる子だって」
「へえ、大したもんじゃない」
澄音が、冷やかすように、妹を見た。
実際、澄音の言う通り、それは「大したもの」なのかもしれなかった。

貞子が、「上尾先生」と呼んでいる、上尾浩三郎は、日本の音楽教育界の大物の一人なのである。自らは楽器の名手というわけではないが、教育には才能があって、今日、日本を代表する名手の多くは、彼の門下生である。

普通、ただ単に音楽学校の生徒、というぐらいでは、なかなか上尾に会うことはむずかしい。貞子は、夫の知人の国会議員のつてを頼って、ようやく上尾の知己を得ることに成功した。

一旦、顔をつないでしまえば、そこは貞子のことである。上尾と古い知人の如く接するようになるまでは、時間はかからなかった。

澄音は何度か上尾とも会っていたが、韻子は、遠くで見かける程度で、まだ言葉を交わしたことはない。

韻子には、そんなことは、わずらわしい以外の何物でもないのである。

それに——正直なところ、怖いのである。母親から、上尾が今の楽界に、どんな大きな影響力を持っているか、散々聞かされているのだ。

それに、遠くから見た限りでは、上尾は正にそういう「権威」の典型ともいうべき、尊大な男に見えた。

今、車は、その上尾の邸宅の前に停った。

「——さあ、降りて」

貞子は先に降りると、門の方へと歩いて行った。

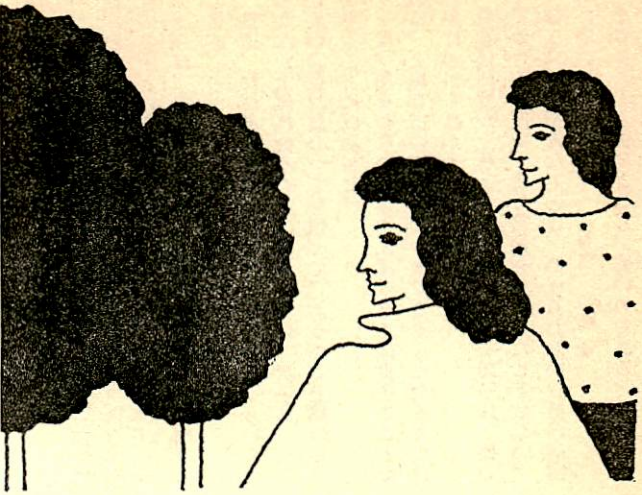
「そう固くなることないわ」

と澄音が言った。「普通のおじさんよ。どうってことないわ」

だが、韻子は固くなってはいない。その点は姉のおかげと言っても良かったかもしれない。

昨夜の、あんな出来事の後で、一体何を怖がる必要があるだろう？　もう、何もかもが、どうでもよかった。

韻子は、門の前に立って、やや古びた、その邸宅を見上げた。——思いがけず、趣味のいい造りである。



近寄りがたいものを感じさせない、静かなたたずまいだった。

洋風だが、けばけばしくない。灰色の建物に、つたが何本か這い降りている。いかにもピアノの調べが聞こえて来そうだった。

中年の婦人が出て来て、門を開けてくれる。家へ上り、静かな応接間へ通された。

「先生はすぐおいでになります」

と、その婦人が言って、退がって行く。

「——奥様じゃないの？」

と韻子が訊く。

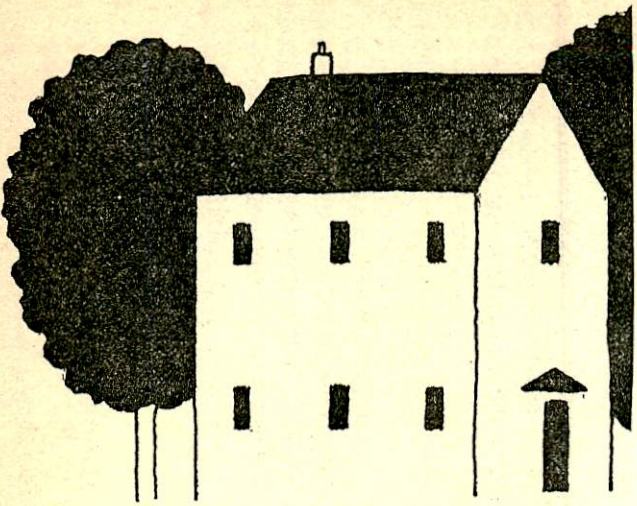
「先生の奥様は一昨年、亡くなられたのよ。ちゃんと憶えておきなさい」

と貞子が言った。

「今の人はお手伝いの人？」

と澄音が訊く。

「そうよ。お子さんはいらっしゃらないから、このお



宅に一人住いというわけね」
「寂しいでしょうね」
韻子は、ポツリと言った。
上等なお茶が出て、十五分ほどすると、ドアが開いた。
「やあ、お待たせしてすみません」
英国風に、茶系統のカーデガンとスラックスというスタイルの上尾が入って来た。
この人が？——韻子は一瞬戸惑った。
演奏会場などで見かける、背広姿の上尾からは、いかにも「大物」という風格のようなものを感じるのだが、こうして自宅の応接間に寛いだ様子で出て来ると、同じ顔であって、同じでない——どこにでもいそうな、初老の好人物という感じである。
「お忙しいところをどうも」
貞子が挨拶するのに、
「いや、どうせ大して用もないので」

と軽く応じ、「こちらが下の娘さんですね」
と韻子の方へ目を移す。
韻子は挨拶した。——もう、後は、母に任せて黙っていればいい。
「——君の演奏はなかなか良かった」
と、韻子の方へ、上尾は言った。
「ありがとうございます」
「ああいうタイプの演奏は近頃珍しい。コンクールなどでは、地味なので損をするかもしれないが、最近は日本でも、少し技巧偏重ではないかという反省があるからね。君のような演奏が、これからは重視されるかもしれないよ」
「はい」
「ヴァイオリンが好きかね？」
いきなり訊かれて、韻子はためらった。もちろん、即座に、「大好きです」と返事をしなくてはならない。しかし、ためらったのである。
「——はい、好きです」
少し間を置いて言うと、
「ちょっと考えたね。よほど厳しく仕込まれたな」
と、上尾は愉快そうに言った。「先生は誰？」
「あの——沢崎先生です」
と、韻子は、ヴァイオリンの教師の名を挙げた。
「沢崎女史か。すぐ言うだろう、『心の姿勢を大切に』って」
「ええ」
「二十年前から、そればっかりだ」
と、上尾が言ったので、韻子は笑い出してしまった。
上尾も一緒になって笑う。——韻子は、すっかり気持がほぐれて来るのを感じた。
貞子は気が気でない様子だったが、上尾が愉快そうにしているのを見て、胸をなでおろしたようだ。
「先生、この子をみてやっていただけますでしょうか？」

と、話が切れたところで言った。
「ああ、いいですとも」
上尾は肯いた。「技術的なチェックはできないが、音楽の中身なら、多少は分る。——今日はヴァイオリンを持ってますか」
「いえ、今日は……」
「じゃ、明日、いらっしゃい。いいね」
韻子は、ゆっくりと肯いていた。

2

「本当に韻子は運がいいわ」
と、貞子は、一日、ご機嫌だった。
上尾に直接指導してもらえるというのは、貞子に言わせれば、指導の内容より、「上尾先生の指導」という、そのことに大きな意味があるというわけなのだった。
貞子は、もう北海道へ二人が黙って行ってしまったことなど、ケロリと忘れている様子であった。
その夜、韻子が風呂から上って休んでいると電話が鳴った。
「水城です」
と韻子が出る。
「韻子さん？　栗崎です」
ためらいがちな声が聞こえた。韻子は、何も言わずに、受話器を持っていた。
「ゆうべは——本当に悪かった」
「もういいんです」
と韻子は言った。
「いや、聞いてくれ。僕は少し酔ってて何だか分らなかったんだ」
「姉はそういう点、上手ですもの。あなたが——ああなったのは当り前だと思います」
栗崎の深い吐息が、伝わって来た。

「僕を……もう許してくれないだろうね？」
韻子は、言葉に詰った。
「栗崎さん……。許すとか、そんなこと、私に、そんな権利はありません。でも、姉とあんなことがあって、すぐにまたあなたとお付き合いはできないわ。そうでしょう？」
「うん、分ってる」
栗崎は、少し安心したようだった。「しばらく間を置いて、また会ってくれるね」
「さあ……。それは何とも言えません」
「必ず、会ってほしいんだ」
栗崎の言葉が、真剣であるのは、韻子にも分った。
電話を切ってから、しばらく韻子はぼんやりしていた。
栗崎への想いが、急速に冷めているのが、自分でも分った。——人間の心は、奇妙なものだ、と思った。
あのとき、姉が邪魔をしなかったら、おそらく、そのまま栗崎の部屋に泊り、彼と結婚していたかもしれない。
ヴァイオリンも、何もかも捨てて、一向に悔いなかったかもしれない。いや、おそらく、そうだったろう。
だが、その一瞬を逃してしまったことで、韻子の気持は大きく変り始めていた。明日から、上尾のレッスンを受けることの方が、今はずっと重大なことのように思えていた。
「——韻子」
澄音が居間へ入って来た。
「なあに？」
「電話、栗崎さん？」
「うん」
「何だって？」
「謝ってたわ。——お姉さん、可哀そうよ、あの人にあんなことして」
「その程度の男なのよ」

澄音はタバコに火を点けた。「分る？　あんたと一緒になっても、出張先で可愛い子に言い寄られれば、またああなるわ」

いい気なもんだ、と韻子はおかしくなった。

その翌日、韻子が起きてみると、いつもは寝坊している澄音が、珍しく先に起きて、朝食を取っている。

「どうしたの、お姉さん？」

韻子は、母の注いでくれたコーヒーにミルクをたっぷり入れながら訊いた。

「今日は同窓生のリサイタルなの。行ってあげなきゃ悪いでしょ」

「へえ、上手な人なの？」

と韻子が訊く。

「もうこれで最後。諦めて結婚するのよ、来月ね」

「じゃ、お別れコンサートっていうわけね」

「そんなところ。——後は、まあ近所の子供にピアノでも教えてお小遣いをかせぐぐらいでしょうね」

「何のために、何年も苦労して来たんでしょうね」

と、母の貞子が、台所からトーストを持って来た。

「あなたたちは、そうならないでちょうだいよ」

「でも、楽でいいじゃない。ちょっと教えて、月に何万円も稼いでさ。後は亭主に働かせてのんびり昼寝して」

澄音が例によって皮肉っぽく言う。貞子の方も、澄音が本気でそんなことを考えているわけではないのを承知しているから、笑っているだけである。

韻子は黙ってコーヒーを飲んだ。——はたして、どっちが幸せなのだろう？

音楽に賭けて、恋も、結婚も、総てを捨てて……。年老いたとき、虚しくはならないだろうか？

平凡に結婚し、子供を生み、育てて、傍ら、ときどきピアノを奏いて聞かせる。そんな暮しだって、決して無意味なものではないと思うけれど……。

しかし、そんなことを、母には言えない。

「韻子は今日、上尾先生の所でしょ？」
と澄音が言った。
「うん」
「あ、そうだわ。さっき上尾先生からお電話があってね」
と貞子が言った。「何だか、用事ができたので、四時にしてくれってことよ」
「四時？　分ったわ。それじゃ私、大学へ行って、帰りに回る」
「そうして。先生に、一応お話ししておきなさい」
「ええ、そうするわ」
と、韻子は肯いた。
韻子は、名門とされるS音楽大学の二年生である。もちろん、それなりに授業があるのだが、何といっても実技で秀でていると、授業を少々さぼっても、あまり文句は言われない。
姉の澄音も、ここの先輩だが、めったに授業に出ないので有名であった。
「今夜は私、リサイタルの後、一緒に飲みに行くから遅くなるわ」
と澄音が言った。
「そう。私も出かけるの」
と貞子は立ち上がって、「韻子も外で食べて帰ってね」
韻子は肯いた。三人で、家で揃って夕食を取ることは、めったにない。

3

爽やかで、穏やかな日だった。
韻子は大学へ出て来たものの、最初の授業は休講で、仕方なく、キャンパスの芝生に座りこんでいた。
学生食堂へ行っても、どうせ話し相手もいない。
——韻子は、大きく深呼吸をして、芝生に寝そべった。

笑い声や、おしゃべりの声が風に乗って聞こえる。

もちろん、男女共学ではあるのだが、どうしても女子の方が多いので、休み時間などはあちこちにおしゃべりの輪ができる。

韻子には、心を許せる友人がいなかった。一応、友だちとして付き合っている相手はいるのだが、内心では、お互い、競争相手と思っている。思いたくないのだが、そう思うように教育されているのだ。

会うと当りさわりのない話しかしない。本当に、悩みを打ちあけて相談のできる友人は、一人もいないと言って良かった。それは、母の方針でもあった……。

「あら」

と女の子の声がした。「水城さん」

起き上がると、コンクールで会った武田百合が立っていた。ジーパンにセーターという、至って気楽なスタイルで、あのときとは見違えるように、浮き浮きして見える。

「どうしたの、ここの大学に用事？」

「今度、ここの先生につくのよ」

と百合は言った。「――座っていい？」

「ええ。何だったら、学食に行く？　コーヒー一杯五〇円よ」

「賛成！」

百合は笑いながら言った。「そうか。あなた方はこの大学だっけ」

「そう。でも、どうしてここの先生に？」

「母上のご命令よ。もしかすると、あなたのお姉さんにあやかりたいのかな」

二人は、学生食堂へ行った。――昼休みではないので、空いている。

「――五〇円にしちゃ悪くないわね」

と、窓際の席で、コーヒーをすすりながら、百合が言った。「この間はおめでとう」

「え？」

「二位だったんでしょ？」
「ああ、そうね」
「忘れてた？　二位ぐらいじゃ頭に残らないんでしょ」
「からかわないで」
と韻子は苦笑した。
百合という娘には、無邪気な天性の人の良さがにじみ出ているようで、韻子は気持の安らぐのを覚えた。
「これから毎週来るの？　嬉しい！　会えるわね」
と、韻子は胸を弾ませた。
「もう来なくていいと言われなきゃ、ね」
と、百合がおどけた調子で言った。「――ああ、そう言えば……」
「なに？」
「お宅のお母さんを見かけたわ」
「今日？　出かけるの、年中だからね」
「この間、会場で見かけただけだから、人違いかもしれないけどね」
と、なぜか百合は急いで言った。
「母をどこで見かけたの？」
と韻子が訊いた。
「うん……。渋谷よ。うち、井の頭線でしょ、だから――」
百合が、ちょっとためらいがちな様子で言った。
渋谷？――おかしい、と韻子は思った。母は今日、ピアノの教授の所へ出かけているはずだ。その家なら、韻子もよく知っている。
全く方向が違うのである。
「チラッと見ただけよ」
と百合が肩をすくめて、「きっと人違いだわ」
「そうね」
だが、何となく、韻子は釈然としなかった。百合の様子が、どこか、おかしいせいでもあった。
何か、言いにくそうにしている。

「どんな服装だった？」
と、韻子が訊いた。「母はベージュのスーツを着て行ったわ」
「ああ、それじゃ違う人ね」
と百合はホッとした様に、「私の見た人は、グレーと紫の、ちょっと変った柄の服だったわ」
やはり母なのだ。本当は、今、百合が言った通りの服だったのである。
「どうして言いにくそうにしてたの？」
と韻子は訊いた。
「うん、実はね――」
百合は少し声を低くして、「駅からバス停の方へ歩く近道が、いわゆるラブホテル街なの。派手なのがズラッと並んでてね」
「それで？」
「そこを歩いてたら、タクシーが目の前に停って、その女の人が降りたのよ。あれっ、と思ってね。あ、似てるな、と……。それで、その女の人、サッサとホテルへ入って行っちゃったのよ。ごめん！　お宅のお母さん、そんなことするわけないものね」
韻子はコーヒーを飲み干した。手の震えているのを、悟られないだろうか、と思った。
母がホテルへ！――一体誰と会いに行ったのだろう？
「ああいうホテルって、昼間から混んでるんですってねえ」
と、百合は呑気にしゃべっている。「どういう人が行くのかしら？　ヒマな人間って多いんだわね、世の中には」
「そうね……」
「ねえ」
と、百合は少し顔を寄せて、「あの彼氏とは、あの後、会った？」
「ええ。――札幌まで追いかけてったのよ、凄いでし

よ」

わざと冗談めかして、韻子は言った。百合の話から受けたショックを隠そうと、ことさら、陽気に言ったのである。

「へえ！　見かけによらないのね」

と、百合は目を輝かせたが、「――あ、残念！　もう行かなきゃ。また会いましょうね」

「うん」

百合があわただしく、学生食堂を出て行く。残った韻子は、しばらく座ったまま、動かなかった。

母が男とホテルへ……。

韻子には、とても信じられないような話であった。しかし、冷静に考えれば、自分だって、栗崎を追ってホテルまで行ったのだ。母が、誰かとそうなっても、おかしくはない。

ただ、違うのは、母には夫がある、ということである……。

夫の水城章造は、もうここ一年近く、アメリカへ行ったきりだ。稼ぎもいいが、それだけ多忙でもある。

韻子は、混乱していた。

もちろん、母も一人の女である。それはよく分っていた。しかし、夫のいない寂しさから、若い男とホテルへ行くというタイプでは、全然ない。

私がそう思っているだけなのかしら、と韻子は考えた。

母にとっては、娘二人を一人前の――いや、一流の演奏家に育て上げることが最優先である。それ以外のことは、二の次なのだ。

そんな母に、男と遊んでいるような時間があるだろうか？　時間は作れるとしても、そんな余裕が――。

だが、武田百合が嘘をつくとは思えないし、他人の空似にしては、服が同じというのは、できすぎている。やはり、母に間違いなかったのだろう。

――別に、それがどうだというのか。母は母、私は

私で、何の関係もない、とは思っても、韻子の心は騒いだ。そんな自分の心が、自分でも捉えられない……。

「――よく来たね」

上尾は、レッスン室へ入って来て、言った。

「よろしくお願いします」

と、韻子は頭を下げた。

十畳ほどの広さの洋間である。防音が施されているので、庭へ面したガラス戸は二重になり、扉は、重く、厚さが十五センチもある。

「さあ、今、沢崎女史のところでは何をやってるの？」

「ヴュータンのコンチェルトです」

「四番？　五番？」

「四番です」

「君は好きかね、この曲が？」

「さあ……」

韻子は迷ってから言った。「あまり好きでもありません」

「君向きじゃないな。――何でもいい。好きなものを奏きなさい」

上尾は、ゆっくりと椅子に腰をおろした。

韻子は、ヴァイオリンを取り上げた。

「――何にしましょうか？」

「好きな曲でいいよ。何なら『キラキラ星』でもいい」

上尾はそう言って微笑んだ。

「キラキラ星変奏曲」は、ヴァイオリンの初心者が必ず奏く曲だ。韻子は、緊張がほぐれて、ちょっと笑顔になった。

「そうそう。そうやって、笑顔で奏けるようにならなくては」

と、上尾は機嫌良く言った。

秘密

1

「どうなの、レッスンは？」
と、澄音が言った。
ベッドに寝転がっていた韻子は、顔を上げて、
「誰のレッスン？」
と訊き返す。
「上尾大先生よ。決まってるでしょ」
「だって、四人も先生がいるのよ」
韻子が言い返す。——ヴァイオリンの沢崎女史の他に、ピアノと理論の教師にもついている。
「とても親切よ。あんまり細かいことは言わないけど、音楽を聞いて下さってるわ」
「音楽の心ってやつね。あんたには向いているかもしれないわね」
澄音は欠伸をした。
「お母さんは？」
「知らない。出かけてるんじゃない？　今夜は二人で食べてくれ、って言ってたわ」
「そうなの？——何か作る？」
「私はだめ。料理なんて柄じゃないもの」
澄音は、家事の類は一切できない。韻子も得意ではないが、姉よりは多少ましである。
「じゃ、私が何か作るわ」
韻子は台所へ行って、冷蔵庫を開けてみた。——ため息が出る。空っぽなのだ。
「これでも家庭の台所なのかしら」
澄音がやって来て、フフ、と笑った。

「愉快ね」
「笑ってる場合じゃないわ。もう七時よ。どうする？」
「食べに行こう、二人で」
「どこへ？」
「私が連れてったげる。さあ、仕度しなさいよ」
澄音は、何を考えているのか、軽くウインクして見せた。
スラックスにセーター姿で、二人は家を出た。
澄音はタクシーを停めると、韻子を押し込むようにして、乗り込むと、
「六本木へやって」
と言った。
韻子はびっくりした。
「近くへ行くんじゃないの？」
「任せときなさい」
澄音は気楽に言って、口笛を吹き始めた。——韻子は肩をすくめて、座席に身を沈める。
道が混んで、六本木に着いた頃には、八時近くになっていた。
「——今日は金曜日か」
と韻子が言った。「凄い人ね」
若いカップルが、ほとんど隙間のないくらい、道を埋めている。韻子のいままで知らない世界だった。
「どこへ行くの？」
「私のよく行く店があるの。——ね、そこで停めて」
タクシーを降りると、澄音は、六本木の雑踏の中をずんずんと歩いていく。韻子は、その後をついて行くのが、やっとだった。
澄音は、わきの細い道へ入ると、曲りくねった道を迷いもせずに辿って行く。
「こんな所に何があるの？」
「黙ってついてらっしゃい」
と、澄音は言った。
「どこに行くのよ？」

と、韻子は訊いた。

大体が、表通りしか——というよりは、慣れた道しか歩いたことのない韻子である。知らない道というのが、不安でならない。

「任せときなさいって」

澄音は、まるで迷路のような狭い道を曲って行く。こんな所があったのか、と韻子は呆気に取られていた。もう、一体どこをどっちの方向へ向かっているのか、見当がつかない。

「——さあ、ここよ」

と、澄音が足を止めたのは、三階建の、マンションだった。

低層なので、一見個人の住宅かと思うような印象だが、入口には、ちゃんとマンション名のプレートがはめ込んである。十何階建という高層よりは、ずっと洒落て、高級な感じである。

「こんな所に食事のできる店があるの？」

と韻子が言った。「私、お腹空いちゃったわ」

「まあ、子供ね」

と、澄音は笑った。「ついてらっしゃい」

エレベーターで三階に上る。廊下は静かで人影はなかった。

「人が住んでるの？　ずいぶん静かね」

と、韻子は言った。

「怖いの？」

「まさか！　お化屋敷ってわけでもないでしょう」

「そりゃね。でも、お化より人間の方がよっぽど怖いわ。そうじゃない？」

澄音は、からかうように言って歩き出した。〈303号〉というドアの前で立ち止り、チャイムを鳴らす。

「どなたですか」

と女の声がした。

「澄音よ」

「待って下さい」

すぐに、ドアが開いた。「――まあ、珍しい」

韻子はびっくりした。出て来たのは、二十歳そこそこの若い娘だった。それは、ともかく、肌が透けて見えそうな、ネグリジェというのかランジェリーというのか――それも黒の、どことなく怪しげな感じのする格好をしているのだ。

「あら、こちらはどなた？」

と、その娘が韻子を見て言った。

「妹よ。韻子というの。『余韻』の『韻』の字を書くのよ」

「素敵な名前ね。お姉さんより可愛いじゃないの」

「まあ、言うじゃない。入っていい？」

「もちろんよ。どうぞ」

澄音が韻子を促した。――韻子は、何となく気が進まなかったが、姉に背中を押されるようにして、仕方なく、中へ入った。

まず戸惑ったのは、玄関の上り口に、重いカーテンが下がっていて、遮られていることだった。

そしてそのカーテンが左右へ分けられると異様な匂いが韻子の鼻をついた。

「さあ、入って」

澄音が、韻子を、力をこめてカーテンの中へ押しやった。

部屋の中の暗さが、また韻子を戸惑わせた。

「ここ、何なの？」

と韻子は言った。

「その内分るわよ。さあ、のんびりしていなさい。今、食べる物を出してもらうから」

と、澄音が言った。

少し目が慣れて来ると、室内の様子が分って来た。

――一見したところ、ごく普通のリビングルームだが、テーブルというものがなく、ソファの代りに、分厚いクッションや敷物が広げられている。

そしてカーテンは固く閉じられ、光が外からは一切

入って来ない。どこか異様な雰囲気であった。
「さあ、ともかく寛いで」
澄音が、敷物に座り込んで、クッションにもたれかかった。
「この匂いは何？」
と、韻子は言った。
「部屋にしみついちゃってるのよ。タバコの煙」
「タバコ？」
それにしても、タバコや葉巻とはちょっと違う、独特の匂いである。
「よく来たわね」
と、さっきの娘が、グラスを二つ手にしてやって来た。
「あの、私――」
と、韻子が言い淀む。
「ああ、この子、アルコールだめなの」
と、澄音が言った。
「そうなの？　まあ、お姉さんとは、ずいぶん違うのね」
と娘は笑って、「私はエリよ。よろしく。――これ、アルコールといっても、凄く軽いから、ともかく飲んでごらんなさい」
グラスを渡されて、韻子は困惑した。
「じゃ、一口飲んでみたら？」
姉に言われて、韻子は仕方なく口をつけてみた。――刺すような味は全くなくて、甘い、意外に爽やかな味だった。
「どう？　おいしいでしょ？」
エリ、という娘は、韻子の顔を見て、言った。
「ええ……」
飲み込んだ感覚が、胸に広がると、体の中から、カーッと熱くなって来る。「――いやだわ、ドキドキしちゃって」
「すぐ慣れるわよ」

澄音が、一気にグラスを空けた。「それに、これは高級品だから、悪酔いしないわ。安心していなさい」
「サンドイッチのようなものでも作ってあげるわ。それを飲んでいてね」
エリが姿を消すと、韻子は、もう一口飲んでみた。今度は、顔が火をふくように熱くなった。
「どうかなっちゃいそう」
と、韻子は言った。
「お腹が空いてるからよ。何か食べれば平気。おいしいでしょ？」
「うん……。そうね」
韻子は、もう一口飲んだ。目が回るような、経験したことのない気分だった。

2

「やるじゃないの」
と、澄音が言った。
その声が、どこか遠くから聞こえて来るような気がする。——韻子は、空になったグラスを、どこへ置こうか、と迷った。
「はい、きれいに飲んでくれたわね」
エリの手が伸びて来て、空のグラスを、ヒョイと持って行く。
「どうも……」
韻子は礼を言おうとして、舌がよく回らないので、戸惑った。
「呆れた」
と、澄音が笑って、「もう酔っ払っちゃったの？たった一杯で」
「平気よ、何ともないわ」
と、韻子は言い返した。
本当は、何でもないどころではないのだ。部屋が大揺れに揺れているようで、韻子は下の敷物を、ギュッ

と手でつかんだ。そうしないと、床が傾いて、どこかへ滑り落ちて行きそうなのだ。

もちろん、そんなはずはない。錯覚だと分っていながら、それでも、つい感覚の方に従ってしまう。

「さあ、どうぞ」

エリの声がして、韻子の手に、またグラスが押し付けられる。

「困るわ、私……もうとっても……」

「今度のは、さっきよりずっと軽いのよ。ほとんどアルコール分なんてないんだから。それに今、食べる物を持って来るから、お腹に入れば、酔いはさめて来るわ」

エリは、グラスを持たせて、また行ってしまう。韻子は困ってしまった。どこかへグラスを置いておこうにも、テーブルというものがない。

それに、敷物の上に置けば、グラスは倒れてしまうだろう。敷物を汚すことになる。

「飲んじゃいなさいよ」

と、澄音が言った。

「だって……」

「酔って気持悪くなったら、寝てればいいんだから」

「そんなの無茶よ」

と、韻子は抗議しながら、仕方なく、新しいグラスに口をつけた。

確かに、前の一杯より、ずっと口当たりも甘く、軽くて、さっぱりしていた。これなら大丈夫かもしれない、と韻子は思った。

「さあ、どう？　おいしいでしょ」

と澄音が言った。「一気に飲んじゃいなさいよ」

やはり、前の一杯で気が大きくなっていたのだろう、韻子は、思い切って、二杯目のグラスを一気にあけた。

「凄い！　それでいいのよ」

と澄音は笑いながら言った。

いわゆる、後からきいて来るタイプの飲物だったの

だろう。韻子は突然、部屋中が歪んで来るような気がして、敷物の上に倒れた。
「どうしたの？」
と澄音が覗き込む。
「部屋が——回る」
と、韻子は呟くように言った。
めまいに続いて、韻子は、体中が、燃え出すように熱くなるのを感じた。
胸から熱さが広がる、というよりは、肌のすぐ下まで熱がしみ出したような感じだった。
「いやだわ……」
韻子は両手で頬を挟んだ。
「どうしたの？」
「体が熱くて……。だから飲みたくなかったのに……」
「少し休んでいれば大丈夫よ」
澄音は笑いながら、「子供ねえ、あんたは」
と言った。
「そんなこと言ったって——」
「ほら、食べる物が来たわよ。一ついただいたら？」
「もういい。私、帰る」
韻子は起き上がろうとしたが、よろけて、そのままうつ伏せに倒れてしまった。
「仕方ないわね、もう……」
澄音が、かかえ上げるようにして、韻子を仰向けにさせ、「そうやって寝てるの。分った？」
「お姉さんが——いけないのよ」
「はいはい、分りましたよ。いいから、目をつぶりなさい」
「熱があるみたい……」
「アルコールだから、じきにさめるわよ。——分った？」
澄音は、韻子の方を覗き込むようにして、
「セーターを脱がせてあげようか？」
と訊いた。

「うん……」
「その方が気持いいでしょ」
「うん」
韻子は、意識が薄れて行くような気がした。姉の手でセーターを脱がせてもらうと、ずいぶん楽になった。
目をつぶって。——眠るのよ。
姉の言葉が、エコーをかけたように、何度も響いて聞こえる。そして——韻子は、深い眠りの中に引き込まれて行った。

目が開く。
眠っていた、というよりは、何だか、ずっと目をつぶっていただけのような気がする。
どうしたのかしら、私?
見慣れた天井だった。——自分の部屋である。自分のベッドで寝ているのだ。
ゆうべは何時に寝たのだろう? 十二時? 一時?
——いや、何だか変な記憶がある。
ベッドから脱け出し、パジャマ姿のまま、部屋を出た。少し頭が重い。
大体、寝起きのあまり良くない韻子である。頭が重いのは、いつものことだ。
「あら、起きたの?」
と、母が二階へ上がって来たところだった。
「うん……」
「もう大丈夫?」
「大丈夫……って。私、どうなったの?」
「憶えてないの?」
貞子は苦笑した。「ゆうべ、散々酔っ払って帰って来たじゃないの。澄音が閉口してたわよ」
空白の時間。
そんなものが、小説の中以外に存在しようとは、韻子は考えたこともなかった。
記憶の中で、ある数時間がポッカリと脱落している。

それは何ともいえず不安なものだった。

——その日、韻子は、何度も、

「ねえ、あそこで何があったの？」

と訊いてみるのだったが、澄音は、ただ笑って、

「内緒、内緒」

と言うばかりだった。

韻子としても、母には、スナックでジンフィズを飲んだだけ、と言い訳してある関係上、あまり、しつこく姉を追及することはできなかった。

「——お姉さん、知ってる？」

どうしてそんなことを、つい口に出してしまったのか、韻子にもよく分らなかった。

「何を？」

と、澄音が訊き返して来る。

二人は、ブラームスのヴァイオリン・ソナタを合わせているところだった。もっとも、この二人が奏くと、ヴァイオリンがピアノの伴奏をしているように聞こえる。

「ううん、何でもない」

と、韻子は急いで言った。「今のパッセージ、もう一度やって」

「だめよ、ごまかしたって」

と澄音は言った。「何のこと？　はっきり言いなさいよ」

「大したことじゃないわ」

「大したことでなきゃ言えるでしょ」

澄音はたたみ込むように言った。「一旦口に出した以上は、しゃべらなきゃだめよ」

「お母さんのこと」

と、韻子は、ためらいがちに言った。

「お母さんがどうしたの？」

「あのね……」

韻子は、武田百合から聞いた、母がラブホテルに入

って行った話をした。
「へえ、お母さんもなかなかやるわね」
と澄音は、愉快そうに笑ったが、それだけだった。
「相手は誰なのかしら？」
「そんなこといいじゃないの。お父さんでないことは確かよ」
韻子には、そんな風に気楽にものの言える姉が、半ば羨しくもある。しかし、真似をしても、それはしょせん真似でしかない。
韻子には、愛情と、ホテルへ一緒に行くような関係を巧みに使い分けることはできないのである。
「だって——お母さん、浮気してることになるじゃない」
「いけないの？　お父さんが向うで、女っ気なしでいると思う？」
「それは、でも——」
「男がやってることよ。女だって、やっていけないわけはないわ」
澄音は、和音を鳴らした。
しかし、韻子には、何となく納得できない。母が、もともと男遊びに興味のあるタイプならともかく、およそ違うと思っていたからだ。

3

「いいね」
と、上尾浩三郎が言った。「とても良くなった」
「そうでしょうか」
ヴァイオリンをおろして、韻子は言った。
正直に言って、自分でも良く奏けたと思う。家で、姉のピアノと合わせていると、ついむきになってしまうのだが、ここで、上尾の教えている、やはり若いピアノ科の女子学生と奏いていると、ごく自然に、音楽の中へ入って行けるのである。

「今度の発表会では君らが組むといいね」
と、上尾は言った。「――じゃ、後は水城君一人でいい。無伴奏ソナタだったね」
「はい」
「失礼します」
と、ピアノ科の学生が帰って行くと、上尾は、ちょっと寛いだ様子になって、
「紅茶でも淹れよう」
と、椅子から立ち上った。
「はい。あ、私がやります」
「いいよ。――そうかい？　じゃあお願いしようか」
上尾について、居間へ入ると、韻子は台所へ行って、お湯を沸かし始めた。
紅茶の葉を出して、用意し、振り向くと、上尾が台所の入口に立って、韻子を眺めている。
「すまんね、こんなことまでさせて」
「いいえ、どうぞあちらで――」
と韻子は、ふと目をそらしながら、言った。
ほんの一瞬だったが、振り向いた韻子の目に、上尾の視線がつき当ったのだった。その視線には、教師とは違う上尾の感情が――はっきり言えば、「男」としての感情が、こめられているように、韻子には思えたのである。
もちろん、それはほんの一瞬のことで、韻子の思い過しかもしれなかった……。
「なかなか不便だよ、一人になると」
と、上尾が言った。「女房がいなくなって、人は頼んであるが、そういい人は来てくれないからね」
「今日はいらっしゃらないんですか？」
「休みを取ってしまってね。それも昨日になって、急に言い出すんだから、全く困ったもんだ」
と、上尾は苦々しげに言った。
確か、上尾は一昨年、妻を亡くしている。韻子は、姉と交わした会話を思い出していた。男が、長く女な

しで、過ごしていられるはずがない……。
馬鹿ね！　何を考えてるの！
「今、淹れてお持ちします」
「じゃ、居間にいるよ」
上尾が姿を消すと、なぜか韻子はホッとした。
いかにも高級品のティーカップへ紅茶を注いで、居間へ運んで行くと、上尾は雑誌から顔を上げた。
「やあ、どうもありがとう」
「いいえ」
韻子が、ティーカップを置いたとき、電話が鳴り出した。
近くにいたせいで、何となく、韻子が電話を取ることになってしまった。
「はい、上尾でございます」
と韻子は言った。
だが、向うは何も言わない。
「――もしもし？」
と言っていると、上尾が立ってやって来る。
そのとき、女の声がした。
「もしもし、あなた、誰？」
「あの――私は学生ですが、先生にご用でいらっしゃいますね」
少し間を置いて、女が言った。
「ええ。先生を出してちょうだい」
「――誰だい？」
そばに来た上尾が訊いた。
「さあ」
韻子は、受話器を上尾に任せた。
「上尾ですが」
という声を背に、韻子はソファへと歩いて行って、座った。
「もしもし、どなた――」
上尾の声が、急に低くなった。「君か。どこにいるんだ？」

韻子は、つい耳を傾けていた。
「――そうか」
上尾は、声を低くして、「しかし、今はちょっと」
と言いかけた。
韻子は、そっと紅茶を飲んだ。
「――よし、分った。そこにいるんだ。いいな？　待ってるんだぞ。――ああ、分ってる。すぐに行くよ」
上尾が肯いて、電話を切った。
「済まないけど、ちょっと急に出かけなくちゃならない。レッスンの続きはこの次ということにしよう」
「分りました」
と韻子は言った。
仕事の話し方、個人的な知り合いとの話し方、友人との話し方。それぞれ、みんな違うものだ。
上尾の家を出て、歩きながら、韻子はまた、
「男は女なしではいられない」
という言葉を思い出していた。

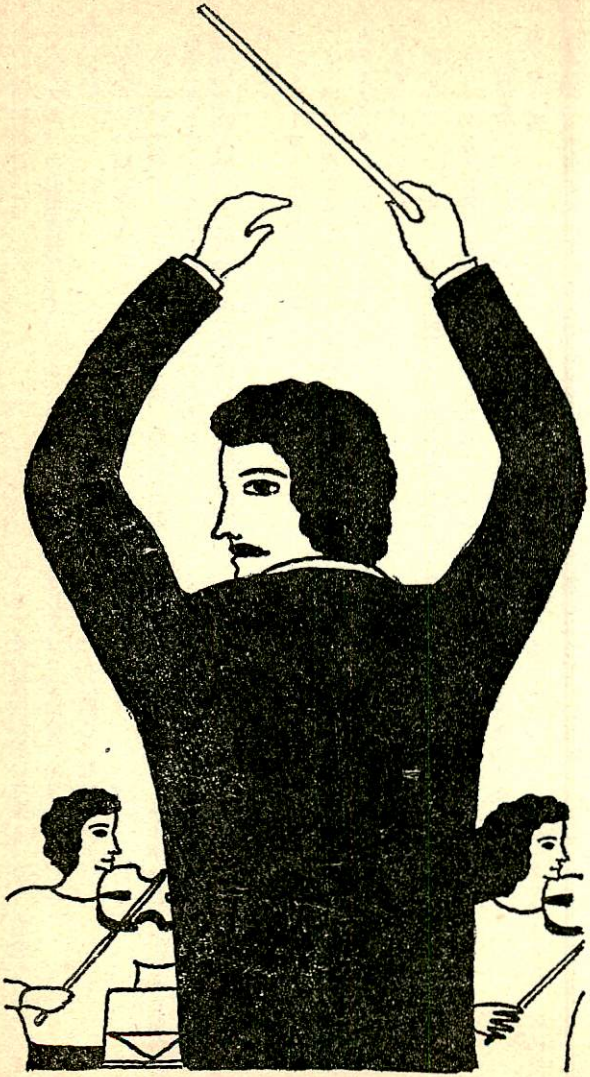
約束

1

「韻子さん！」
そう呼ばれても、韻子にはそれが自分のことだとは思わなかった。
「韻子」という字は珍しいにしても、「かず子」は決して少ない名前ではない。
さらに歩き続けようとする韻子にもう一度、
「韻子さん！」
と声がかかって、やっと足が止る。
振り返ると、韻子は、ちょっと目を見開いた。
「まあ、栗崎さん」
よく晴れた日だった。坂道を、栗崎が息を切らしながら、駆け上って来る。
「――やあ、久しぶりだね」
と息を弾ませて、「どこへ行くの？」
「この上」
と、韻子は言って、手にしたヴァイオリンケースを、ちょっと持ち上げて見せた。
「演奏会？」
「オーケストラで人が足りないから、アルバイトなの」
「そうか。――急ぐの？」
韻子は、ちょっと腕時計を見て、
「リハーサルまで三十分くらいなら」
と言った。
「じゃ、どこかでお茶でも飲もうよ。いいだろう？」
栗崎は、もうとっくに「あの事」は時効になったと

決めているようだった。その単純さが、韻子にはおかしかった。
「ええ、いいわ。でも十五分だけ。友だちと早目に落ち合うことにしてあるから」
「いいよ。それじゃ――」
と、栗崎は手を伸ばして、韻子の肩を抱こうとした。
韻子が素早く逃れる。栗崎は、ちょっと気まずい表情になった。
近くに、ろくな店がなかったので、仕方なく、普通の食堂に入る。
「――ちょうど昼食抜きだったんだ」
と、栗崎は丼物を取って、言った。
「相変らず忙しいの？」
韻子は、甘ったるいオレンジジュースを、ほとんど口をつけずにわきへ押しやった。
「まあまあね」
栗崎は、チラチラと韻子の顔をうかがいながら、
「――でも、今夜は時間があるんだ」
「そう」
「君の方は？」
「演奏会が夜ですもの」
「終るのは？」
「九時過ぎね」
「まだ宵の口じゃないか。表で待ってるよ。いいね？」
「早く帰るの。練習があるから」
「一日ぐらい、いいじゃないか」
「明日はレッスンの日ですもの」
韻子はそう言って、「あ、もう行かなきゃ」
と立ち上った。
「ねえ、韻子さん――」
「ジュース代、ここに置きます」
金を置いて出て行く韻子を見送る、栗崎の顔が、こわばっていた。

「ホルンは、もう少し強く！　決然とした感じを出して」
指揮者が汗を拭いながら言った。「よし、もう一度、一一二番から」
曲のフィナーレである。韻子は第一ヴァイオリンの後ろの方に座って、大いに楽しんでいた。
ピアノは原則的にソロ楽器で、ヴァイオリンは合奏のための楽器だ。韻子のような性格には、やはりヴァイオリンの方が向いているのかもしれなかった。
もちろん、華やかなソロ活動も悪くないが、韻子のような性格は、むしろ合奏に向いている。もっとも、母は韻子がオーケストラの仕事をするだけでは納得しないだろうが。
「大きく伸ばして！」
と指揮者が腕を振り回した。
最後の和音が力強く響き渡る。指揮者は汗を拭って、
「OK。ご苦労さん」
と言った。
太っていて、やたら汗をかく男なのである。——客席の方からパチパチと拍手が聞こえた。
「誰？　入って来ちゃ困るよ」
指揮者が顔をしかめて振り向く。
「やあ。悪くなかったよ」
客席の方から響いて来た声に、韻子はびっくりした。上尾の声なのだ！
指揮者の方も驚いたようだった。
「上尾先生！　これはどうも。失礼しました」
「いや、邪魔したかな。構わず続けてくれ」
「ちょうど休憩するところだったんです」
「そうか。じゃ、少し時間をくれないかね」
「ええ、いいですとも」
指揮者は即座に言った。「——じゃ、休憩！」
「あの人、大物なんでしょ」
と、やはりアルバイトに来たらしい、ヴィオラパー



トの女の子が言った。
「大ボスよ。あの指揮者だって、ペコペコしてるじゃないの」
友人らしい娘が肯く。
大ボス。大物。——そんなイメージは、韻子の中の、上尾の姿とは、どうにも重ならないのである。
知らない人が、そう思っているだけだ、と韻子は考えていた。
「コーヒー飲みに行かない？」
と、前に何度かこのオーケストラで一緒になったことのある、若い女性が誘って来た。
「ええ、いいわよ」
韻子は、ヴァイオリンを席に置いて、立ち上った。
ホールの地下に喫茶室がある。行ってみると、メンバーばかりで、ほぼ席は埋っていた。それでも何とか奥の席に座って息をつく。
「あなた、水城さんっていうんでしょ？」
と、その女性が訊いて来る。「もう有名なのに、どうしてソロで出ないの？」
「まだそんな腕じゃないわ」
「そうかなあ」
韻子は黙ってコーヒーをすすった。——ふと気が付くと、隣のテーブルに、上尾が座っている。

2

上尾は、韻子には気付かない様子だった。一緒にテーブルについている指揮者と、何やら話をしている。
何しろ、あちこちで話が弾んでいるので、中は、やたらに騒がしい。同じテーブルの者同士、話をするにも、大声を出さねばならなかった。
「オケで奏くときって楽しいわ」
と、韻子は言った。「個人のリサイタルみたいに緊張しなくていいし」

オケ、というのは、オーケストラのことである。
「そうかなあ」
同席の女性は、首をかしげて、「でも、ソロを奏くって、やっぱりこたえられない気分じゃない？　一度やってみたいわ」
韻子とて、オーケストラをバックに、協奏曲を奏いたという経験は、数えるほどしかない。確かに、百人にもなろうというオーケストラの前で、一人、立って奏くときに、ある種の高揚感があるのは事実だ。
しかし、韻子は、それよりも、気の合う仲間と、四重奏を組んだりする方が、ずっと好きなのである。
——ふと、韻子は、上尾たちのいるテーブルの方へ、目をやった。自分の名前が、聞こえて来たような気がしたのである。
気のせいだろうか？——それきり、話はまた騒音の中に埋れて行った。
休憩の後、韻子たちは、ステージに戻った。そろそろ五時になる。
開演は七時なので、あと三十分ほどリハーサルがあって、後は本番になるはずだ。
自分の位置に座って、ヴァイオリンの音を合わせていると、
「水城君」
と呼ばれた。
指揮者が、ステージの袖で手招きしている。何事か、と思って、韻子は急いで歩いて行った。
「何でしょうか？」
「実はね——」
指揮者は、韻子を促して、少し奥の方へ入りながら、
「交響曲の第三楽章のソロなんだが、君に奏いてもらいたいんだ」
「私がですか？」
韻子がびっくりして、思わず訊き返した。
交響曲の中に、比較的長い、ヴァイオリンのソロが

出て来る。それを奏けというのだ。
しかし、それは普通、オーケストラのコンサートマスターが担当する。韻子のように、正規の団員でもない者が奏くのは、慣例に反していた。
「でも、どうして――」
と言いかけて、韻子には事情が分った。
上尾が、指揮者に話をしたのだ。しかし、どうしてそんなことをしたのだろう？
「私、自信がありません」
と、韻子は言った。
奏くのはやさしい。ただ、それではコンサートマスターの立場がない、と思ったのである。
「そこを何とか頼むよ」
と、指揮者は言った。
韻子はためらったが、結局、引き受けざるを得なかった。
筋を通すという意味では、断るべきだったろうが、それでは指揮者が困ることになるのだ。
指揮者がコンサートマスターの男性を呼んで話をするのを、韻子は、ちょっと胸の痛む思いで眺めていた。何だか、ひどく悪いことをしているような気がする。
向うは別に大していやな顔をせずに肯いていたが、それと韻子の気持とは別であった。
上尾にしてみれば、韻子が喜ぶと思ってやったことなのかもしれないが、韻子の方は、上尾がそんな風に無理を言うのを見て、悲しい気持だった。
リハーサルが始まった。
韻子が、コンサートマスターの席につくのを見て、他の団員たちがざわめいた。
「じゃ、終楽章の頭から。さっきは、少し元気がなかったよ」
と、指揮者が言って、譜面をめくる音がした。
韻子は、楽団員たちの視線を背中に感じて、この場から逃げ出したかった……。

拍手がホールを埋めた。

こういう演奏会にしては、入りがいい。半分も客席が埋らないことだって、珍しくないのだ。

今夜は八分の入りだった。

「よっぽど、他に演奏会がなかったのね」

などと言う女性団員もいた。

オーケストラも好調だった。韻子も、いざとなると、精一杯ソロを奏いた。

しかし、アンコールの後、指揮者が韻子をたたせようとしたときは、それを拒んで、座っていた。全員が立つときになって、やっと立ち上ったのである。

前から三列目に、上尾の顔があった。韻子は、殊更に、そっちを見ないようにしていた。

「——お疲れさま」

と、声をかけ合って、団員たちが、楽屋口から出て行く。

もう九時半を回っている。——韻子は、わざと少し遅れて、外へ出た。

上尾が待っているかもしれないと思ったのだ。見回したが、それらしい人影はなかった。

夜の道を、韻子はヴァイオリンを手に歩き出した。

駅への道は、もう人の姿もまばらになっている。ちょっと寂しい道だった。

「いやだ」

と呟いたのは、雨が顔に二つ、三つ、当たったからだった。

駅まで大分ある。韻子は足を早めた。雨はすぐに本降りになって来た。

あわてて、木立ちの下へ入ったものの、木の葉の間を落ちて来る水滴がパタパタと頭や肩を打つ。思い切って駅まで走るしかない、と思った。

車のライトが近付いて来て、韻子を照らし出すと、ピタリと停った。

「——やあ、探したよ」
窓から顔を出したのは、栗崎だった。

3

「栗崎さん！」
と、韻子は言った。
「さあ、乗れよ。濡れちゃうじゃないか」
栗崎が車のドアを開ける。——韻子は、ちょっと迷った。
雨でなければ乗らないところだ。しかし、自分が濡れるよりも、ヴァイオリンが濡れるのが心配だった。
結局、韻子は栗崎の車に乗り込んだ。
「——良かったね、ちょうど」
栗崎の言い方は、ちょっと押し付けがましかった。
「駅まで送って下さればいいわ」
と韻子は言った。
「どうして？　せっかく一緒になれたんだ。どこかへ行こうよ」
車がゆっくりと走り出す。
「早く帰らないといけないのよ」
「レッスン、レッスンか！」
栗崎は吐き捨てるように言った。「君もお姉さんも、世間の人から見たら変ってるよ。それが分ってるのかい？」
「そんなこと、あなたに関係ないでしょ」
「ヴァイオリンが少々巧くたって、ピアノが奏けたって、それじゃいい女房にはなれないよ。女なんて、しょせん男に頼って生きていくんだ」
栗崎は早口に、まくし立てるように、言った。
「それがあなたの本音なのね」
と、韻子は固い口調で言った。
「男なんて、みんなそう思ってるさ」
「分ったわ。車を停めて」

「何を言ってるんだ」
「停めて。歩いて帰るわ」
「この雨だよ」
「別に構わないわ。濡れて帰るから」
「——強情だな、君も」
と、栗崎は苦笑いした。
車はカーブして停った。
外は真っ暗だった。
「——ここはどこ?」
「公園の入口さ。どうする? 降りるかい?」
「ええ」
韻子がドアを開けようとした。
いきなり、栗崎がのしかかって来る。
「何するのよ!」
韻子はもがいた。座席がガタンと倒れて、韻子は仰向けに倒れた。栗崎は、押えつけるようにして、力任せに、
「いいじゃないか——どうせ、この前はこうなるつもりだったんだろう!」
と、唇を押し付けて来る。
「やめて!」
韻子は頭を左右に振って逃れようとした。「——人を呼ぶわよ!」
「こんな所に誰もいないさ。——大人しくしろよ!」
韻子は、大体がか細い方である。栗崎に組み敷かれて、身動きが取れなかった。
栗崎の手がスカートの中へと這い入って来た。韻子は必死でもがいた。
そのとき、突然、他の車のライトが、二人の姿を照らし出した。
「畜生! あっちへ行け!」
栗崎は、韻子を押えつけたまま、口走った。
その車のクラクションが鳴る。——誰かが降りて来るのが見えた。

栗崎は、諦めたように、手を離して起き上った。韻子はあわててスカートを引張った。
「――何をしてるんだ？」
覗き込んだ顔を見て、韻子は思わず声を上げた。
「上尾先生！」
「こっちの車に乗るかね」
「はい」
韻子は、ヴァイオリンを手に、栗崎の車を出た。
「韻子――」
栗崎が呼びかける。
「二度と会いたくないわ！」
韻子は叫んで、上尾の車へと走った。
雨が、一段と激しさを増した。
「――すみませんでした」
と韻子は言った。
「いや、君が謝ることはない」
上尾はタオルを手渡した。「さあ、髪を拭きなさい」
「はい……」
上尾の家である。
雨が、やっと小降りになりつつあるようだった。
「あの男性は君の恋人？」
「いいえ」
と韻子は首を振って、それから、ちょっと微笑んだ。
「以前は――お付合いしていました」
「それで、向うが君に未練があるわけだね」
「もう、忘れてしまいたいです」
と韻子は言って、ヴァイオリンのケースを開けた。
「大丈夫かしら？」
「中までは濡れていないよ」
「母に叱られますわ」
「それより君の方だ。――大分濡れてるじゃないか」
「放っておけば乾きます」
「うちに乾燥機はあるが……。じゃ、シャワーでも浴

びておいで。その間に乾燥機へ入れておけば乾くよ」
「でも――」
「大丈夫。乾燥機は風呂場の前だ。僕は二階にいるからね」
と、上尾は微笑んだ。
韻子は、ちょっと顔を赤らめた……。
「――さあ、ここだ。使い方は分るね」
と、浴室のドアを開け、上尾が言った。
「はい」
「じゃ、ゆっくり暖まるといいよ。お宅へ電話しておくから」
「すみません」
と、韻子が頭を下げる。
上尾がいなくなると、韻子は、ちょっとためらってから、服を脱いだ。
なぜか、胸がときめいた。――どうしてなのか、韻子にもよく分らない。
まるで、上尾が、そこで見つめているような、そんな気がした。
「まあ、本当にご迷惑をおかけして――」
と、送ってくれた上尾に、母の貞子は何度も礼を言った。
そして、半ば無理矢理に家に上げると、あれこれと話し込んでいる。
「あれじゃ、却って迷惑ね」
二階へ上ると澄音が言った。
「でも、どうして先生の所へ行ったの？」
「栗崎さんのせいよ」
「栗崎？」
澄音がいくら勘が良いといっても、それだけでは分らない。
「ええ。ひどい話なの」
「どうしたの？」

韻子が話をすると、澄音は愉快そうに、
「だから言ったでしょ。あんな男なのよ。分った？」
と言って、韻子の鼻を指先でつついた。
「でも、お姉さん――」
「なあに？」
「そんな人に、札幌では抱かれたんでしょ。何とも思わないの？　悔しくない？」
澄音は、韻子の部屋のベッドに腰をおろして、
「そんな風に考えてたら、人生、楽しくも何ともないじゃないの。別に私は栗崎って人間と寝たわけじゃないわ。ただ一人の男の体と寝ただけ。――そう考えればいいのよ」
澄音の言葉に、韻子は首を振った。
「とてもじゃないけど、私には、お姉さんみたいに考えろと言われても無理だわ」
「そうでしょうね、あんたには。一緒に寝ることが、一つの約束だと思ってるんでしょ」
「約束……」
「そう。これで私はあなたに所属しました、っていうね」
所属する。――確かに、そうかもしれないと韻子は思った。
「でも、それは逆に、男を拘束しようっていう、ずるいやり方でもあるのよ。純粋な愛なんてもの、少なくとも男と女の間じゃありっこないわ。打算と、駆け引きよ」
「そうなの？」
「そうよ。そう分って、割り切れたら、却って面白くなるわ」
姉の言葉は、韻子にも分らないではない。少なくとも、それを実践している者の実感があった。
説得力はある。しかし、頭で分ることと、共感することは別だ。
「――石ケンの匂いがするわね」

と、澄音が言った。「お風呂、まだでしょ？」
「先生の所でお借りしたわ」
「まあ、上尾先生の？」
と、澄音は目を見開いた。
「ええ。どうして？」
「それで、あんた何ともなかったの？」
「何ともって……」
韻子は戸惑った。
「あの先生が手をつけた女子学生は沢山いるのよ。当然あんたにも気があるんだと思ってたわ」
「嘘よ、そんな――」
「本当よ。誰だって知ってるわ」
そう言って、澄音は笑った。

うわさ

1

大学へ行って、みんなの目が変って来ていると気付くのに、ずいぶん時間がかかった。

もともと、韻子は勘のいい方ではない。ヴァイオリンによらず、楽器一筋にやって来た人間には、どことなく、無邪気なところが残っているものである。

韻子にしても例外ではなかった。

だから、気が付いたときには、もうすっかり自分が孤立している、という具合なのだった。

「——何だかおかしいの」

その朝、朝食の席で、韻子は言った。

「何が？」

と訊いたのは、澄音だった。

珍しく、今朝は早く起き出して来ている。

「妊娠でもした？」

澄音の言葉に、母の貞子が顔をしかめた。

「やめてよ、変なことを言うのは」

「だって、韻子だって、ちゃんと生理はあるんだから、男と寝れば妊娠するわよ。ねえ？」

「相手にするんじゃないの」

と、貞子は言って、「何がおかしいの？」

「学校で、みんなが私のこと、何か噂してるらしいの」

と韻子は言った。

「どんな噂？」

「分らないの。こっちの方見てヒソヒソ話してると思うと、私が近くへ行くと、パタッと話をやめちゃうし

――おかしいのよ」
「気のせいじゃないの？」
「そうかと思ってたんだけど……それがあんまり何度も続くものだから」
「韻子が気付くんだから相当なもんよ」
と、澄音が笑った。「大体、あんたは鈍い人だものね」
「悪かったわね」
韻子は舌を出してやった。貞子は、苦笑して、
「何をやってるの。――ともかく、あんまり気になるようなら、私が先生にでも相談に行ってみる？」
「やめてよ、そんなこと！」
韻子は、あわてて言った。「小学校じゃないんだから。笑われちゃうわ」
貞子も音楽家を志したくらいだから、やはり、多少常識外れのことを平気でやるというところがあるのだ。
「じゃ、いいわ。ともかく、そんなことで気が散って、稽古がおろそかになるようじゃ困るから、ちゃんと確かめてごらんなさい」
「分ったわ」
と韻子は言った。
そう言わないと、母のことだ。本当に大学へやって来るに違いない、と思ったのである。
だが――それにしても確かにおかしいのだ。韻子自身、あまり友人のいる方ではないが、それでも休み時間などにおしゃべりぐらいはすることがある。
ところが、このところ、誰もが韻子を避けている感じで、話しかけて来ない。韻子は、自分から、「ねえ」と声をかけて行くタイプではないので、自然、ポツンと一人ぼっちになってしまうのである。
「今日はレッスン？」
と、貞子が韻子に訊いた。
「今日はないわ。でも、カルテットの練習があるから」

貞子が、ちょっと渋い顔になったが、何も言わなかった。

気の合った者同士で、弦楽四重奏を組んでいるのだが、このところめったに練習できない。韻子としては、この上ない息抜きだった。

貞子は、そんなことはむだだと思っているから、あまりいい顔はしないのである。

韻子は、授業が終ると、ヴァイオリンを手に、前もって決めてあった部屋へと急いだ。

他の三人は、早目に授業が終って、先に練習しているはずだった。人数の多いオーケストラと違って、四重奏は一人でも欠けたら曲にならない。

韻子は、比較的地味な第二ヴァイオリンだった。

「ごめん、遅くなって――」

ガラリと戸を開けて、韻子は戸惑った。誰もいなかったのである。

「変ね……」

教室の番号を見直す。間違いなく、いつも使っている部屋である。

「部屋を変えるなんて、言ってなかったのに……」

韻子は廊下を歩いて行って、空いている部屋を一つ一つ覗いてみた。――どこにも仲間はいない。

何かあって中止したのだろうか？　それなら一言連絡してくれてもよさそうなものだけど。

ともかく、がっかりして、韻子は外に出た。歩きかけて、ふと目を遠くへやると、四重奏でヴァイオリンを奏いている、戸田奈々子が歩いて行くのが見えた。

急いで後を追う。

「奈々子！」

声かけると、奈々子は振り向いて、一瞬、逃げ出したいような素振りを見せた。しかし、結局諦めて、ぎこちなく笑顔を作ると、

「こんにちは」

と言った。
「どうしたのよ？　今日やるって言ってたじゃない」
と韻子が言った。
「ええ。でも、中止になったのよ」
「どうして？　何かあったの？」
「別に——知らないわ。何だか——都合が悪いんじゃない？」
奈々子は目をそらしていた。「私も用事があるの。それじゃ、またね」
と歩きかける。
「待ってよ！」
韻子は、とっさに奈々子の前に出た。「どうしたの？　私のせいなの？　みんなおかしいわ」
「自分の胸にきいてごらんなさいよ」
奈々子は、少し声を震わせていた。「私たち、第二ヴァイオリンには別の人を入れることに決めたの。さよなら」
奈々子が足早に去って行くのを、韻子は呆然として見送っていた……。

2

韻子は、まるでやけ酒でも飲むように、学生食堂でコーヒーを飲んでいた。
自分の胸に訊いてごらんなさいよ！
韻子は、戸田奈々子の投げつけて来た言葉を、何度もかみしめていた。一体何のことだろう？　私が何をしたというんだろう？　韻子はアルコールが飲めれば、酔い潰れたいような気分だった。
「あら、水城さん」
と、声がして、顔を上げると、武田百合が、笑顔を見せながらやって来た。
「こんにちは」
「何だか不景気な顔してるのね」

「最低よ。死んじゃいたい気分」
「学生食堂で口にするセリフじゃないわね」
と、武田百合は笑った。
「笑いごとじゃないわ」
「ごめん、ごめん、そう、にらまないでよ」
韻子は仕方なく笑い出した。
「——ねえ、あなたは何も聞いてない？」
「え？　何のこと？」
「私の噂」
「あなたの？——どんな噂？」
「それが分らないのよ」
武田百合は、椅子をひいて座り直した。
「面白そうな話じゃない。聞きたいわ。話してみて」
「面白い、って言われると抵抗あるな」
「あなただって、逆の立場なら面白いと思うわよ。つべこべ言わないの」
百合の明るさが、韻子には救いだった。
韻子は、みんなの見る目が変わって来た事情を説明した。百合は肯きながら聞いていたが、
「それは、やっぱり何かあるのね」
「どうしたらいいと思う？」
「さあね」
と、百合は首をかしげた。「噂って、手に負えないもんなのよね。一人歩きを始めたら、もうどうやったって止められないし」
「止められないのは仕方ないとしても、その噂がどんなことなのか、知りたいわ」
と、韻子は言った。「私にとっちゃ、深刻なのよ」
「分かるわ」
百合は、しばらく考え込んでいたが、やがて、ポンとテーブルを叩いて、「私が調べ出してあげる！」
と言った。
「本当？」
「私、ここの学生じゃないけど、大体、大学なんて知

らない人がいくらもウロついてるでしょ。——ねえ、この近くに、ここの大学の人の行きつけの喫茶店みたいなところ、ない？」

「そうね……」

韻子は、ちょっと考えて、「駅の前の〈S〉っていう店が一番ね、きっと」

「OK。それじゃ、そこに決めましょ」

「何をするの？」と、韻子が不思議そうな顔で訊いた。

大体が、そう広い店ではない。

中へ入った百合は、

「カウンターでいかがですか」

と、声をかけられた。

ちょうどいい。

百合は、カウンターの、一つ空いた椅子に腰をかけた。コーヒーを注文し、左右を見回してみる。

なるほど、一目であの大学の学生と分る子ばかり——それもほとんど女の子である。

もっぱら、あれこれと噂話に花を咲かせているのだ。

「——だから、それがふざけてると思うのよね」

と、隣の女の子が、話をしている。「大体、向井先生って、少しおかしいわ。そう思わない？」

こいつはいいや、と百合は思った。向井というのは、百合のついている、ピアノの教授である。

「常識ってものに欠けてるのよ」

と、一人がまくし立てて、他の二、三人は肯いている、という構図である。

「あの、ちょっと——」

と、百合は声をかけた。

「え？」

「向井先生って、ピアノ科の？」

「そうよ。——あなたは？」

「今度、向井先生につくことになったの」

「まあ、本当？　じゃ、会うかもね。私たち、みんな

向井先生とは五年間付き合って来てるのよ」
「へえ、五年間？　あの先生って、ちょっと難しそうね」
「ちょっとどころか――」
と、仲間同士で顔を見合わせ、「ね、あの先生のご機嫌悪いときはね、犬のこと訊いてごらんなさい」
「犬のこと？」
「そう。可愛がってる犬がいるの。そのことを訊けば、とたんにニコニコし始めるわ」
「へえ、いいこと聞いたわ」
と、百合は言った。
話が弾んだ。――十五分して、約束通り、韻子が店に入って来る。
ちょっと心細そうに、中を捜して百合を見付けたが、百合の方は韻子を全く無視していた。韻子が、空いたばかりのテーブルにつく。
百合は、適当な間を置いて、店の中を見回し、
「あら、あそこに座ってる人、見たことあるわ」
「誰のこと？」
「ほら、あそこの、ヴァイオリン持ってる……」
「ああ、水城韻子よ」
と、その女子学生は言って、「有名なのよ、姉妹で」
「あ、そうか、コンクールで一緒だったんだわ。見憶えあると思った」
と、百合は肯いた。「優秀なんでしょ？」
「でも、ちょっと異常よ」
「どうして？　そんな風にも見えないけど」
「だっていくら有名な先生に教えてもらうためでも……」
と、女子学生は声をひそめて、「体まで提供しなくっても」
「まさか――」
「本当よ。みんな知ってるわ。あの子、上尾浩三郎の愛人なのよ」

約束した通り、韻子は、喫茶店を出ると、少し前に出た武田百合の後を追った。

百合は駅前のハンバーガーショップに入っていた。

「どうだった？」

と、韻子がいきなり訊くと、百合はちょっと複雑な表情で、

「ね、お腹空いてない？」

と訊いた。

「ええ？」

「ハンバーガーでも食べようよ。その方が話しやすいわ。ショックも柔らぐと思うし」

「おどかさないでよ」

「本気なのよ。ね、チーズバーガーにする？」

韻子は、ちょっと呆気に取られながら肯いた。——

二人は、ハンバーガーとコーヒーを盆にのせ、二階へ上った。下はカウンターの立ち食いだが、上はテーブルと椅子の席になっている。

「話してよ」

と、韻子は言った。「何だったの？」

「やきもちね」

「やきもち？　私に？」

韻子は、ちょっと間を置いて笑い出してしまった。

「どうして笑うの？」

「だって——私にやきもちやくなんて、そんな人いないわよ」

「あなたって本気でそういうこと言ってるのね」

百合は、ため息をついて、「だから、余計に誤解をされるのよ」

「誤解って？　どういう風に？」

「あなた、上尾浩三郎の愛人にされちゃってるわ」

韻子は、愕然とした。今度は笑えなかった。

それならば分る。奈々子の態度も、みんなの目も。

——姉の言葉が、思い出された。

「まさか、本当じゃないわよね」
と、百合は言った。
「とんでもない話だわ。でも——そんな噂って、否定しても信じてくれないでしょう。困っちゃうわ」
「ハンバーガー食べたら？」
韻子は、つい笑い出していた。——百合の明るさで、救われたような気がする。
「上尾さんって人のことは、私も噂で聞いたことあるわ」
と、百合が言った。「いい先生なの？」
「人間的に立派な人だと思ってたわ。でも——そんなこと聞くと——」
「噂なんて、無責任だものね」
百合が慰めるように言った。
「どうするのがいいかしら？」
「レッスン、やめるわけにいかないんでしょう？」
「母があんなに喜んでたのに……」
「じゃ、お母さんにそのこと、話してみたら？　他に仕方ないじゃないの」
「そうね」
と、韻子は肯いた。
しかし、内心では、まず自分で話をしなくてはならない、と考えていた。

3

「——やあ、水城君」
玄関に出て来た上尾は、ちょっと意外そうに、「今日はレッスンだったかな」
と言った。
「いえ、そうじゃないんです」
韻子は玄関に立ったまま、「お忙しいのに申し訳ありませんが、ご相談がありまして……」
「そうか。じゃ上りなさい」

上尾は快く言った。「今日は一人でね。手伝いの人が休みの日なんだ」
「すみません」
「いや、構わないよ。かけなさい」
居間へ通されると、韻子はソファに腰をおろした。固く、両足を合せ、そこに両手を揃えて置く。
「話というのは？」
「あの……実は、とても困っているんです」
「どういうことで？」
「大学で、噂を立てられていて……」
目を伏せがちにして話していた韻子は、チラッと視線を上げた。上尾の表情が厳しくなった。
「そうか」
と、早口に言った。「僕とのことを、噂されているんだね」
韻子は少しためらってから、
「はい」
「それで、僕のレッスンを、もうやめたいというわけだね」
「そうじゃないんです。母も——私も、そんなことになったら残念ですし、私は続けたいんです。ただ……このままにしておくわけにもいかないので……」
「ふむ」
上尾は立ち上ると、少し興奮している様子で、歩きながら言った。「じゃ、君は僕にどうしろと言うんだ？大学へ出向いて、僕は水城韻子に手を出していませんと証言して来るのか？　それとも君を医者へ連れて行って、処女だという証明書でももらって来るか」
「そんな——」
「他に方法があるというのかね？　噂を否定したって、それは却って火に油を注ぐだけだ。それぐらいのことが分らないのか？」
「分っています。でも——」
「噂は、無視するしかない。そして嵐が過ぎるのを待

つんだ。——もし、ここで君がレッスンをやめたら、どうなる？　やっぱり噂の通りだったと思われるだけだ。子供じゃあるまいし、そんなことも分らないのか！」

上尾は、腹立ちを叩きつけるように言った。韻子は、小さくなって、

「すみません……」

と、低い声で言った。

上尾は、二、三度居間の中を歩き回ってから、足を止め、肩で一つ息をした。

「すまん。ついカッとなってね。——しかし、これまでにも、その噂で、もう何人もの女の子がやめているんだ」

「知りませんでした」

上尾は、ゆっくりと韻子の方へ歩み寄り、優しい目で、見下ろした。

「それを知っていたら、ここへは来なかったかね？」

韻子は、じっと上尾の視線を受け止めていた。

「分りません」

と、韻子は首を振る。

「君は正直だ」

と、上尾は、ホッと緊張を緩めたように、ソファに座った。

「——どうしたらいいでしょうか？」

韻子は、おずおずと訊いた。

「君次第だね。その噂——僕が、習いに来ている女の子に手を出すという噂が本当か嘘か、君には判断できまい」

「そんなことは——」

「僕が否定しても、それを信じるかどうかは君の気持にかかっている」

「はい」

「それが事実でも構わないと思えば、また来たまえ。つまり、僕に襲われるのも覚悟の上でならね。そうで

なければ——少しでも危険ならいやだと思えばやめるといい。別に僕は、だからといって君をとがめたりはしないよ」

上尾は、微笑を浮べながら言っている。韻子は果して上尾が冗談を言っているのかどうか、分らなかった。

「——どうするね？」

と、上尾は訊いた。

「考えて来ます」

「それがいい。次のレッスンは、あさってだったかな」

「はい」

「じゃ、来る気になったら来なさい。来なければ、やめたと思うことにするよ」

「——失礼しました」

韻子は立ち上がった。

「一つ訊いておきたいんだがね」

「何でしょうか？」

「君はどうなんだ、男を知ってるのかね」

韻子の口元がこわばった。上尾は続けて、

「これは別に興味本位で訊いてるんじゃない。おそらくまだ知らないんだね」

「はい……」

「君の音楽を聞いていると分るよ。恋とか、嫉妬とか、そういう感情の激しい波を知らないと、音楽に血が通わない。いつまでも単なる音譜で終ってしまうよ」

上尾は立ち上がった。「さあ、玄関まで送ろう」

「馬鹿らしい」

と、貞子は即座に言った。「言いたい人には言わせておけばいいじゃないの。みんな、上尾先生のレッスンが受けられないから、やきもちをやいているのよ」

「お母さん、簡単に言うけど……」

夕食の席で、韻子は話をしたのだった。「大学で除け者になってるのは私なのよ。たまらないわ」

「却って気が散らなくていいじゃないの」
と貞子は呑気なことを言っている。
「お母さんったら」
韻子は諦めて口をつぐんだ。澄音がフフ、と笑って、言った。
「お母さんにそんなこと相談したってだめよ。決ってるでしょ」
「お姉さん、どう思う?」
と、韻子は訊いた。
「私は噂になるのなんて、慣れっこだものね」
澄音はアメリカンコーヒーの二杯目をゆっくりと飲んで、「でも、噂ってやつは、自然に消えてなくなるのを、待つしかないのよ。それだけは確かね」
「それまでどうしてりゃいいの?」
「何ごともなかったようにしていなさい」
と、貞子が少し怒ったように言った。「却ってあわてたりうろたえたりすれば、みんなの目を引くわよ。分った?」
「ええ……」
韻子としても、母の言葉が正しいと認めざるを得なかった。しかし、だからといって、学校へ出るのに、気が楽になるわけではないのだ。

大学へ出たものの、韻子は授業に身も入らず、やっと昼休みになると、食事もとらずに、芝生に腰をおろしていた。
学校は、町の中にあるので、そう静かというわけではないが、むしろやかましいのは、学校の中の方だろう。色々な楽器を練習している音が、あちこちから聞こえて来る。そこが、いかにも音楽学校らしいところである。
明日、上尾の所へ行くべきかどうか。——韻子は決めかねていた。
大体、決断力に乏しい韻子である。誰かが強引に、

「こうしなさい」と命令してくれると気が楽なのだが。

しかし、迷ってみても、結局行かざるを得ないだろう、と韻子は思っていた。母が苦労して、やっとレッスンを受けられるように頼んでくれたのだ。それを勝手にやめるわけにはいかない。

韻子は、誰かが傍に立ったのに気付いて、顔を上げた。——見知らぬ若者だった。

ここの学生には違いない。ちょっと着崩れしたブレザーをはおっている。

「ええと……君は、水城っていうの？」

と、その若者は、何となく遠慮がちに切り出した。

「ええ」

「そうか。ちょっと話があるんだけど」

「なんですか」

「僕は三年生で水木っていうんだ」

韻子が目を見張った。「ただし字は違うぜ。『水』に『立木』の『木』と書くんだ」

「私は『城』と書くんです」

「やっぱりね」

と、その水木という若者は肯いて、「これが僕のロッカーに入ってたんだ」

と、封筒を出した。

韻子は、それを受け取って、表書きを見た。〈水城韻子様〉とだけある。何だか金釘流の字である。差出人の名はなかった。

「どう考えても僕は女じゃないしね、友達に訊いたら、君のことを教えてくれたんだ」

「すみません」

と、韻子は、ちょっと笑顔になって言った。

「何かしら……」

封を切ってみると、一枚の写真が出て来た。——韻子の顔色が変った。

水木という三年生は、韻子がさっと青ざめるのを見て、びっくりしたらしい。

「どうしたの？　大丈夫かい？」

韻子は、何も聞こえなかった。

いや、聞こえてはいるのだが、それに返事をする気にもなれない。周囲の総てが、遠ざかっていくような気がした。

いつしか、写真を取り落としていたらしい。一瞬、気を失うような状態になっていたのかもしれない。ハッと気が付くと、水木という若者が、写真を拾い上げていた。

「見ないで！」

韻子は、叫ぶように言って、水木の手から写真をひったくった。

そして、手の中に、写真を握りつぶす。——頬が、燃えるように熱くなって来た。

それは、母の写真だった。母が、一見してラブホテルと分る建物から出て来るところである。むろん一人ではなかった。

母は、上尾と一緒だったのである。

いくら鈍い韻子でも、事情は分っていた。母は、上尾と関係して、娘に上尾のレッスンを受けさせることに成功したのだ。

写真は、あまりにはっきりと、その事実を語っていた。信じたくない、という思いは、その事実の前に、何の力もなかった。

何ということだろう！——何ということをしてくれたのか。

韻子は、叫び出したいような思いを、じっとこらえた。

ふと気が付いて、わきを見る。あの水木という三年生は、姿を消していた。

韻子は、立ち上ったが、少しよろけた。もう、とても授業など受ける気にはなれない。

——家路を辿りながら、韻子は、皮肉な成り行きに、思いをはせていた。

上尾と噂を立てられているのは、自分の方なのだ。しかし、実際には母が上尾の愛人だった。みんな、そんなことは知らずに、韻子のことを、のけ者にしている。

みんな？——いや、そうではない。

韻子は、やっと、そのことに思い当った。この写真をあの水木のロッカーに入れたのは誰なのか、ということだ。そして、なぜ、そんなことをしたのか。

誰かが、たまたま撮ったにしてはあの写真はあまりにも鮮明に写っている。母を尾行した誰かが、あるいは上尾を尾行した誰かが、撮影したのだ。予め、狙っていたとしか思えない。

それを、なぜ韻子へ渡そうとしたのか？

——考えてみると妙だ。

水木は三年生である。ロッカーも韻子とは全く別の所にあるのだ。それを、間違えているというのは、この学生ではないということかもしれない。

外部の人間？　おそらくは、そうだ。

これから、どうしたものだろう？　家へ帰って、母を問い詰めるか。——それはしたくなかった。

家の中で、いがみ合い、黙って部屋へ閉じこもっているなんて、いやだ！

韻子は、途方にくれたまま、ゆっくりと家への道を歩いていた。

出会い

1

「最近はずいぶん無口になったのねえ」
澄音にそう言われて、韻子はギクリとした。
「私、もともとおしゃべりじゃないわ」
とやり返しながら、人波の中で歩き出す。
五反田にある、演奏会用ホール。ピアノのリサイタルを聞き終えての帰りである。
「そりゃ分ってるけどね。でも、いつも、こういう演奏会なんかの後は、結構しゃべってたじゃない。それなのにこのところ、いつでも黙りこくってさ」
「いいでしょ、黙ってたって」
「どうぞどうぞ。——何だかピリピリしてんのね」
澄音は、ちょっとおどけた調子で言った。
韻子は、姉の勘の良さをよく知っている。何かあったことを、ちゃんと気付いているのだ。
「コーヒーでも飲んで行こうよ」
と澄音が言った。
韻子も逆らわなかった。大体、コンサートなどの後は、こうして一服するのが習慣なのである。
「アルコールでもいいけど、私は」
「やめてよ。もうごめんだわ」
と、韻子はあわてて言った。
店は、ほぼ一杯で、大半は、同じリサイタルの帰りに寄った客である。みんな同じプログラムを持っているから、すぐに分る。
澄音たちのように、年中そういうリサイタルに来ていると、およそプログラムを集める趣味などなくなっ

てしまうのだ。

——韻子は、ウィンナーコーヒーを、ゆっくりと口に含んだ。クリームがまだよく溶けていないので、苦い。

変った、か、と韻子は思った。変らなければ、どうかしている。親の、あんなところを見せられて。

しかし、結局、あのあと、もう二週間になるのだが、韻子は母を問い詰めもせず、上尾のところにも通っている。大学での、韻子をめぐる噂も、そろそろ下火になりつつあるようだ。

これじゃ、いけない。こんな風に、うやむやにしてしまっちゃいけない、と思うのだが、日がたつにつれて、このままでも仕方ない、と思うようになって来る。迷ってはいるのだが、もう、負けと決っているようなものだ。

「また何か考えてる。どうしたの？　恋愛中？」

澄音に言われて、あわててコーヒーを飲んだ。ふと目をそらすと、店に入って来たのは、ブレザー姿の大学生で……。

あ、と思った。あのときの三年生。水木とかいった。韻子はあわてて顔を反対の方へ向けた。

「最近は不作ねえ」

と、澄音が言った。「こう、パーッと燃えるようなリサイタルって、めったにないものね。もっとも、プロがいちいち燃えてたら、いくつ命があっても足らないけどさ」

韻子は、水木が、そばに来て、足を止めるのを、目の端で見ていた。

「やあ、水城君」

と、彼は屈託のない声で言った。

澄音が、目をパチクリさせながら、

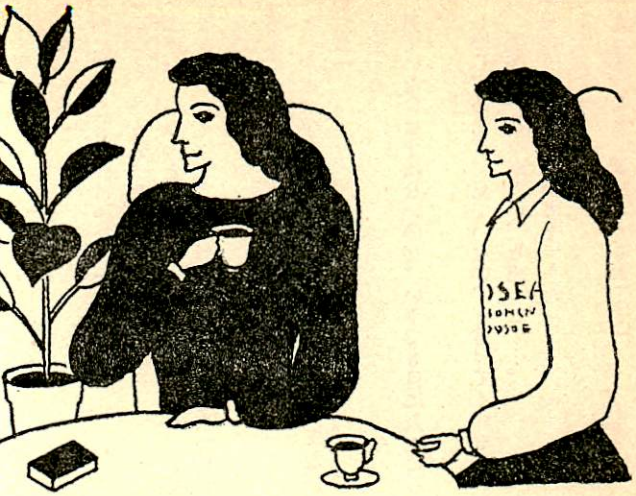
「こちらはどなた？」

と妹に訊く。

「僕は三年生の水木といいます。——ああ、字は違う

んですよ」
彼の説明に、澄音はちょっと笑って、
「良かった。こんなハンサムな弟がいたのかと思ってびっくりしちゃったわ」
と言った。「お一人？」
「そうです」
「よかったらご一緒に」
「お姉さん、ご迷惑よ」
と、韻子が言ったが、聞くような澄音ではない。
「いいんでしょ？　さ、どうぞ」
と、水木を座らせ、「――じゃ、あなたのせいだったのね、妹がこのところおかしいのは」
と言い出した。
「お姉さん、何てことを――」
「いや、そうだと嬉しいけどな」
と、水木は笑って言った。「お二人のこと、友達から聞きましたよ。有名なんですってねえ」
「悪名高い、って言うのが本音じゃないかしら？」
と澄音は愉しげに、「妹とは長いお付き合い？」
「いえ、つい最近ですよ」
「それならそう言えばいいのに」
澄音はタバコに火を付けながら、「妹はだめなの。男に関しちゃ小学生以下なんだものね」
「やめてよ」
韻子は、何だか分らないが、ひどく惨めな気分だった。居たたまれなくて、店を飛び出して行きたい。
しかし、そんなことをする度胸は、なかった。
「さて、じゃ私、先に帰るわ」
と澄音は、気をきかせたつもりか、立ち上った。「じゃ、妹をよろしくね。何しろ、ママのオッパイ飲まないと寝られない子なんだから」
韻子は真っ赤になって、姉をにらんだ。澄音は、平然と店を出て行ってしまう。
「――面白い人だねえ、君のお姉さん」

「すみません」
「別に謝ることないじゃない」
「いいえ、そうじゃなくて……」
韻子は、ちょっとためらってから、「この間、失礼なこと言っちゃって。せっかく、ご親切に届けて下さったのに」
「ああ、そんなこといいんだよ」
と、水木は手を振って、「僕は写真なんか見てないからね」
と言った。
見ていないはずはないのだ。いやでも目に入ったろう。
しかし、あえて、見ていない、と言ってくれる水木に、韻子は、ありがたい、と思った……。
「今のリサイタルの帰り？」
「そうです」
「どう思った？　僕はどうもね……」
水木は、もっぱら音楽のことばかりを話していた。
それが、自分への心づかいだと分っている韻子は、いかにも楽しげに、水木の話に耳を傾けた。
正直なところ、韻子たちのように、凄まじいまでの訓練を経て来た者にとっては、水木の感想は、いかにも生ぬるかったが、その話よりは、声が、快かった。若々しく、弾んでいて、リズムがあるのだった。
「――ああ、大分長話ししちゃった」
と、水木は腕時計を見て言った。「ごめんね。送って行くよ」
「大丈夫です。一人で帰れますから」
「そういうわけにいかないよ。お姉さんにちゃんと依頼されてる」
「姉はいつもあんな風なんです。男の人を、こき使うのは当然だと思ってるんだわ」
「得な性格だね」
「本当に」



そう言って、韻子はつい笑った。

「何だ、水城君か」

声をかけられて、二人ともヒョイと顔を上げた。

——上尾が立っている。

「上尾先生……。どうも——」

韻子はあわてて立ち上った。

「聞きに来てたのか。僕もいたんだよ。気が付かなかったね」

と、上尾は上機嫌である。「お姉さんとは？」

「姉は先に……」

「そうか。どうやら今日は、ちゃんとナイトがついているようだ。僕はもう帰るよ。じゃ、今度のレッスンに」

「失礼します」

韻子は頭を下げた。——上尾が出て行くと、体中で息をして、座る。

「今のは……」





「上尾浩三郎先生よ」
「あれが？」
水木が、目を見開いて、「へえ。初めて見たよ。君はあの人についてるのか。凄いじゃないか」
おそらく、三年生の間までは、韻子の噂も広まっていないのだろう。
「僕にはまるで別世界の人間だな」
と、水木は言った。
「水木さんも、音楽家になるんですか？」
「いや、とてもだめさ」
と肩をすくめる。「せいぜいコネを利用して、いい会社へ入る。バーに行ったとき、女の子の前で、ちょっとカッコよくピアノを弾いて見せる。——それが目あてで、音楽学校に入ったんだから」
大真面目な水木の話に、つい韻子は笑い出していた。
「すみませんでした」

と、家の前まで来て、韻子は足を止めた。
「上れって言ってくれないのかい？」
「え？　でも――」
「君の部屋はどこ？　窓から忍び込むから、開けてくれよ」
韻子が驚いて見つめると、水木は笑い出した。――韻子も一緒に笑い出していた……。

2

美しく晴れ上った日曜日だった。
韻子は、珍しく一人で家を出た。いや、一人で出歩くことはよくあるにしても、韻子の場合、たいていは、大学へ行くとか、音楽会に行くとか、本を捜しに行くとか……つまり、目的がはっきりしているのである。
「どこに行くの？」
と、出がけに母から訊かれた。
「ちょっと気晴らしに」
と答えてみたが、自分でも何をしようというのか、よく分らないのだった。
さあ、どこへ行こうか。――レッスンや、授業から解放されたひとときである。
何をしたって構わないようなものだが、却ってそんな経験がないので、困ってしまう。
家を出て、ともかく駅へ出ようと歩き出すと、向うから水木がやって来るのが見えた。
まさか。そんなはずないわ、と頭を振ったが、いや、確かに水木である。
「やあ、出かけるの？」と、水木が手を上げて言った。
「水木さん。――どこへ行くの？」
韻子は呆気に取られていた。いや、そうびっくりするほどのことでもないかもしれないが、水木が自分のところへやって来たのかもしれない、と思ったのであ

る。

そんな！　そんなはずがない！

「どこって、君の所に決ってるじゃないか」

と水木は愉快そうに言った。

「だって、電話も何も――」

「君のお母さんが出ると怖いからなあ」

韻子は、ちょっと青くなった。

「母と話したの？」

「一度だけね。君が留守のときだった」

「知らなかったわ」

「君のレッスンの邪魔をするなという様子だったよ」

「ごめんなさい、母はちょっと変ってるのよ」

「いいんだよ。ああでなきゃ、一流の音楽家は育たないのかもしれない」

「そんなことないわ。――本当にごめんなさい」

「ともかく、今日は何か用事？」

「いいえ。珍しく、ただぶらっと出て来ただけ」

「じゃあ、どこかに行こうよ」

水木が韻子の腕を、さり気なく取った。韻子は、顔がほてるのを感じた。

「でも――どこに行くの？」

「さあ、分らないなあ。君の行きたい所」

「私も分らないわ。ともかく狭い世界しか知らないんですもの」

二人は少し黙り込んで歩き続けた。韻子はちょっと惨めな気分だった。普通の女の子のように、どこへ行けば面白いとか、あそこのケーキがおいしいとか、そんなことを、まるで知らないのだ。

「よし！」

と、水木が言った。「君、お金持ってる？」

「少しなら」

「僕も少しだ。――じゃ、それでどれだけ買物ができるか、やってみようよ」

「買物？　何を買うの？」

「それはデパートへ行って考えるのさ。特売場めぐりだ。どうだい？」

デパートの特売場。

韻子は、そんな所へ行くのは初めてだった。

いや、もちろんデパートで買物をすることはあるが、特売場で人をかき分けてつかみ取りをやるなんて——考えてみたこともないのである。

「たまにはそういう経験をするのもいいじゃないか」

と、水木は、戸惑う韻子を、引張るようにしてデパートへ連れて行った。

日曜日の新宿。——それもデパートとくれば、商品が人の間から覗いている、というところである。

「——さて、あの人だかりは何かな」

婦人洋品の売場で、二人は満員のエレベーターを降りた。

「ブラウスだわ。千円ですって」

「よし、じゃあそこへ割り込んで、何枚かひったくっておいでよ」

「私が？」

と、韻子が思わず訊くと、水木は笑って、

「僕が割り込んだらおかしいだろ」

「それもそうね。——いいわ。やってみる」

韻子は肩から下げていたバッグを、「これ持ってて」と、水木に預けた。

押し合い、もみくちゃにされながら、やっと、人の壁の内側に顔を出す。体を横にして、やっと手が一本出る、という凄まじさである。

どうやら、一時間のタイム・サービスということで、よけいに凄い人出らしいのだ。

「定価の半額から三分の一です！　あと二十分！」

売場の係が声をからしている。

「ちょっと！　これのM、ないの？」

「それ、私が取ったのよ！」

正に絶叫とでもいいたい声が飛び交う。

山と積まれたブラウスをかき回して、やっと、これならというのを見つける。手に取って、サイズを見ようとしていると、いきなり横あいから出た手が、サッとそのブラウスをつかんで持って行ってしまった。

アッという間のことだ。韻子は唖然としてしまった。しかし、腹が立つというより、愉快だった。まるでゲームか何かやっているような、そんな気分だ。

今度はしっかり握りしめてなきゃ。韻子は身を乗り出して、ブラウスの山をかき回した。

やっと人の壁をかき分けて、外に出たとき、韻子は五枚のブラウスを抱きしめていた。

「心配しちゃったよ、潰されたんじゃないかと思って」

と、水木が笑いながらやって来る。

「ああ疲れた。でも見て！　五枚持って来たわ」

「頑張ったね。でも——これはよくないよ。ちょっと年寄りじみてる」

「そう？」

「それに、サイズがLじゃないか」

「あら、いやだわ。Sのつもりだったのに」

——結局、二人で調べてみて、買うに価すると決ったのは二枚だけだった。

「くたびれたわ。でも、楽しかった！」

と韻子は言って笑った。

「良かったね。たまにはいいだろ、こういう所も」

水木に言われて、韻子は肯いた。

「ねえ、スカートもほしいわ、私」

「よし。じゃ行ってみるか」

二人は、スカート売場へ行った。こちらはブラウスの方ほどの混雑ではなかったが、やはり、特売コーナーはかなりの人で、試着室の前には行列ができていた。

ここでも韻子は、今まで買ったことのない派手な柄のスカートを二枚買った。

「お母さんが目を回すわ」

と、財布をしまいながら韻子は言った。
「いいじゃないか。君は、若いのに少し地味すぎるよ」
荷物を持っているのは、もちろん水木の方である。
韻子は息をついて、
「さあ、後は靴だわ！」
と言った。
「おい、もう二時だよ。何か食べてからにしよう」
「えっ？——あ、そうね。お昼まだだっけ。忘れてたわ」
韻子は笑いながら言った。こんなに気持が弾むのはどうしてだろう？　こんなに楽しいのは、どうしてなのかしら？
二人は、表に出た。歩行者天国で、人が溢れている。
「ハンバーガーでも買って食べるか」
「そうね」
立ち食いなんて、これまではいやでたまらなかったのに、今なら平気だった。
ハンバーガーをかじりながら、ぶらぶらと歩く。——はた目にはどう見えるか分らないにせよ、ともかく、韻子自身は楽しかった。
「こんなこと初めてだわ」
と、韻子は言った。「楽しいの、凄く」
「良かった。——いつも楽譜とにらめっこしてても、音楽が生き生きしてこないだろ」
「そうね。母の意見は違うと思うけど」
「人間、馬鹿なことをするのを怖がっちゃいけないと思うんだ。誰だって、時には馬鹿げたことを思いっ切りやってみたくなるもんだよ」
「そうね。そうかもしれない。——ねえ、靴を買いに行きましょうよ」
「ああ、いいよ。何なら下着売場でも」
「いやね！」
韻子は、笑いながらにらみつけた……。

「これも、馬鹿なことの仕上げ？」
と、韻子は訊いた。
少し、あたりは暗くなっていた。——二人は、アベックの名所ともいうべき公園を歩いていた。
「見物さ。面白いだろ？」
「そう？」
ベンチに並ぶ恋人たち。人目も構わず、抱き合ったり、キスしているカップルも珍しくない。——さすがに韻子は、きまりが悪くなって下を向いて歩いた。
「あそこが空いてる」
水木が、木陰のベンチを指した。「座ろうよ。疲れただろ」
韻子は、胸が高鳴るのを感じた。

3

ベンチに並んで腰をかけると、韻子は、何だか水木の顔を見るのが怖くなって、わざと周囲を眺め回していた。
木陰なので、視界は割合に狭いが、それでも何組かのアベックが目に入る。——ちょうど夜へと溶けこむように、あたりが暗くなって行く。
「楽しい？」
と、水木が訊いた。
「ええ」
「どうしてそっぽ向いてるんだい？」
「別に……」
韻子は、ためらいがちに、水木の方を向いた。少しかげって、表情がはっきりと見えなくなっている。
彼の手が、韻子の肩に回った。少し身を固くして、

「そんな……」
と、低く囁くように言った。
他のアベックたちが、暗さに助けられてか、大胆にキスしているのが目に入ると、韻子は、体が熱くなって来るのを感じた。
興奮とは違う、気恥ずかしさと、緊張のせいである。水木に抱き寄せられるようになって、韻子は反射的にその手を振り切った。頬がカッと燃えた。
「ごめんよ」
と、水木が言った。「怒ったかい？」
韻子は黙って顔を伏せた。——違うのだ。怒ってはいない。ただ、惨めな気持になっているだけだった。どうしてか分らないが、ともかく、惨めなのだ……。
二人は、長いこと黙り込んでいた。——やがて、水木が立ち上った。
「行こうか、送るよ」
韻子は、立ち上って、水木の後について歩き出した。すっかり夜になっている。二人のいたベンチは、すぐに他のアベックで占領された。
——帰り道、二人はほとんど口をきかなかった。あんなに楽しく時間を過していたのに……。韻子は何か言いたかったが、言葉が出て来なかった。
家の前まで来て、韻子は足を止めた。
「それじゃ——」
と、水木が言いかける。
「待って」
韻子は遮った。自分でも、わけの分らない内に、水木の唇へ、自分の唇を押し当てていた。
水木が韻子を抱きしめる。水木の持っていた、買物袋が道に落ちた。
唇が離れると、韻子は、まるで百メートルも突っ走ったように、荒い息をついた。
「——私、馬鹿みたい？」
と、韻子が訊く。

「とんでもない。すてきだよ」
「本当？　嬉しいわ」
韻子の顔に笑みが戻った。「あ、荷物が――」
水木が紙袋を拾い上げていると、誰かの影が二人の間へ割って入った。
「お姉さん」
と、韻子が言った。
「見物させていただいたわよ」
澄音も、外出から戻ったところらしかった。冷やかすように笑いながら、
「妹はうぶなんだから、よく教えてあげなきゃ」
と、水木へ言った。「――もう家へ入る？」
「うん」
と、韻子が肯く。「ありがとう、荷物」
「いや、別に。――また行こう」
「ええ」
「おやすみ」
水木は、澄音の方へ一礼して、足早に去った。韻子は、それを見送っていたが、
「さあ、入ろうよ」
と、姉に促され、一緒に玄関へと歩き出した。
「私と出かけたことにする？」
と、澄音が言った。
「どうして嘘つくの？　私、悪いことなんかしてないわ」
「はいはい。そんなにむきになっちゃ、すぐお母さんに気付かれるわよ」
「構わないわ」
韻子は玄関のドアを開けた。「ただいま！」
母は、韻子が次から次へと出して見せる、安物の数数に、目を丸くしていた。
「どうしてこんなものばっかり――」
「いいでしょ。たまには普通の女の子のようなことがしたいのよ」

貞子は、面食らっていた。韻子が、いつもの韻子でないことが、いやでも分ったのである。
「じゃ、私、お風呂に入るわ」
と、韻子はさっさと二階へ行ってしまった。
ニヤニヤしながら眺めていた澄音に、
「どうなってるの？」
と、貞子は訊いた。
「恋愛中なのよ」
「誰と？」
「三年生の子よ。名前は同じ――」
「ああ、その子なら知ってるわ。電話して来たから、素気なくしてやったのに」
「お母さんも下手よ」
「どうして？」
「何でも、だめ、と言っていれば、その内反乱が起きるわ。適当に手綱をゆるめてやらなきゃ」
「だけど――」
「もう韻子も、押さえて言うこと聞く年齢じゃないのよ」
「だけどね、韻子はもともと、あんまりプロになる気のない子よ。恋愛だけならともかく、結婚したいって言い出したら……。現に、あの栗崎さんとだって――」
「大丈夫よ」
と、澄音が遮った。「そこまでは行かないわ」
「どうして分るの？」
「私は未来を見る水晶球を持ってるのよ」
澄音は、軽くウインクして、二階へ上って行った。

オーディション

1

「オーディションですか？」
ヴァイオリンをケースへしまう手を止めて、韻子は訊き返した。
「そう。オーディションだ。どうだね。受ける気はないか」
レッスンの終りに、その話が上尾から出て来たのである。
「でも……」
「僕の見たところでは、君はソリストよりも室内楽の方が向いていると思うんだがね。どうかな、君の考えは」
「はい。私もそう思っています」
と、韻子は肯いた。
ちょっと意外であった。当然母の意志が上尾に伝わっていると思っていたのである。
「別にソリストとして、君がやって行けないとは思っていないが、君にとって、幸せな道を選んだ方がいいからね」
と、上尾は言った。
「ありがとうございます。でも――」
「何か問題があるの？」
韻子は言い淀んだ。上尾は、微笑んで、
「あぁ、お母さんのことだね」
「そうなんです。母は私をソリストにしたがっていますし……」
「分ってるよ。しかし、今の世界的なソリストの中に

も、オケや室内楽の経験者は沢山いる。——よし、お母さんには、僕の方から話してあげる」

「お願いします」

少しためらってから、韻子は言った。ためらったのは、その上尾と母の会話が、どこかのベッドの中で交わされるのを想像したからである。

そのことは、忘れるようにしているのだが、頭の中から追い出してしまうというわけにはいかない。

「それで、オーディションというのは——」

無理に音楽のことだけを考えようとして、韻子は訊いた。

「うん、杉本カルテットなんだ」

カルテットといえば四重奏団である。オーケストラのオーディションとはわけが違う。

「杉本カルテットって……あの杉本京子さんのことですか？」

と、韻子は訊き返していた。

「そうだよ。今度第二ヴァイオリンがやめたんでね。杉本君が替りを捜してるんだ」

韻子は驚いた。杉本カルテットといえば、若手の集まったカルテットの中では、一番優秀な存在である。

弦楽四重奏団は、二人のヴァイオリン、それにヴィオラとチェロが一人ずつという構成だ。第二ヴァイオリンだからといってやさしいものではない。

四人が全く等しい力を持っていなくては、いい演奏はできないのだ。

「先生、とても私には無理です」

と、韻子は言った。「実力が違いすぎますもの」

「技術的には大丈夫だよ」

と、上尾は言った。「それに、君の音は、あそこのカルテットに向いていると思う。ともかくやってみたらどうだ？」

韻子の顔が、緊張でこわばった。

上尾の家を出ると、もう八時になっている。

食事をして帰るのだが、このところ、一人で食べることはなかった。
「やあ」
いつものレストランに、水木が待っていてくれた。
「飢え死にしそうだったよ」
「いやね、いつもそんなこと言ってる！」
と、韻子は笑いながら言った。
「君を食べちまいたいね」
「骨ばってて、おいしくないわよ」
韻子は、メニューを開きながら言った。
二人の付き合いも、このところ、半ば公然としたものになって来て、貞子もあまり文句を言わなくなっていた。
韻子は、食事をしながら、上尾から話のあった、オーディションの件を話した。
「杉本カルテットか。凄いね」
「ねえ？　ちょっと手が届かないわ」
「でも——受けるの？」
「どうしようかしら」
と、韻子は肩をすくめた。「上尾先生は、可能性があるとおっしゃってるけど」
「君はどうなんだい？」
韻子は、ちょっと考えて、
「そうね、やってみたいって気もするの。どうせだめに決ってるけど、それを目標に頑張るっていうのもいいかな、って……」
「いつなんだい、オーディションは」
「一か月あるわ。——練習期間としては短すぎるけど」
水木は、ちょっと不安げに韻子を見つめた。
「もし合格したら、君は忙しくなるね」
「え？——何を心配してるの？」
と、韻子は笑って、「大丈夫よ。私だって自分の力は知ってるわ」

と言った。

「頑張って、と言いたいけど、何だか複雑な気持だなあ」

水木は、肉の一切れを口に放り込みながら、言った。

レストランを出ると、二人は少し歩いて、公園に足を向けた。

相変らず、アベックで一杯だが、もう韻子も気後れすることはない。空いたベンチに腰をおろすと、韻子は水木の肩へ頭をのせる。——キスされるのも、もう慣れた。

「——今夜は帰らないことにしないか？」

と、水木が言った。

「どうするの？」

「どこかに泊る、とかさ」

「どうして？」

「君を逃したくないんだ」

「逃げないわよ。——ホテルはいや。そんな風にあなたのものになりたくない」

「僕は構わないんだけどな、どんな風だって……」

「待っててよ」

韻子は、自分の方からキスした。——二人の仲は、この先、一向に進展していないのである。

家へ帰ると、貞子が果物を出して待っていた。そして韻子の顔を見るなり、

「上尾先生からうかがったわよ」

と言い出した。「どんなことをしても、杉本カルテットに入りなさい！」

2

韻子は面食らった。

「待ってよ、お母さん」

と、ヴァイオリンを置いて、「アンサンブルに入るのに反対してたのは、お母さんじゃないの」

「杉本カルテットは別よ。あなたの将来にプラスになるわ」
「ちょっと——考えてもみてよ。私の力じゃ到底無理だわ」
「最初から、そんな風でどうするの！」
と、貞子は突っぱねるように言った。「何が何でも、オーディションに合格するのよ、分った？」
「受けることは受けるわ。それでいいでしょ？」
「そんないい加減な気持じゃだめ！　上尾先生は、もし受けるなら、特にレッスンしてあげるとおっしゃって下さったのよ」
「今だって、学校を休んでるのよ。これ以上——」
「学校なんて、あなたのキャリアにとって、どうってことないのよ。チャンスをつかみなさい！」
韻子は諦めた。こういう、「盛り上って」いるときの母には逆らってもむだである。
風呂上りの格好で、澄音がやって来ると、韻子はホッとした。
「またやってるの？」
と、澄音は笑いながら、「今じゃ、韻子の方がお母さんの希望の星ね」
「無茶言うんだもの」
「何が無茶ですか。やればできるわ」
「限界ってものがあるわよ」
「一か月間、大学なんかさぼっていいから、オーディションを目指して、猛練習なさい。あの男の子とも会わないようにして」
韻子は、ちょっと反抗的な目で母を見返した。
「あの人のことは関係ないわ！　干渉しないで！」
貞子は何か言いかけて、思い直したように息をついた。
「——いいわ。でも、ともかく、オーディションを受けるのよ」
「受ける、って言ってるでしょう！」

ヴァイオリンをつかんで、韻子は自分の部屋へと駆け上った。

服を脱いでいると、澄音が入って来た。

「――今日も会ったの？」

「うん」

「ホテルとか、向うの部屋とかには行ってるの？」

「行かないわ」

「行きたがらない？」

「いつも行こうって言ってる。でも、無理にとは言わないわ」

「あんたらしいわ」

と、澄音は笑った。「――でもね、青春は二度来ないのよ。悔いのないようにするのね」

「お姉さんって面白い人。自分じゃめちゃくちゃやってるくせに」

「私は自分の哲学に従ってるだけよ。――ねえ、知ってる？」

「何を？」

「杉本カルテットの杉本京子って、上尾先生の親類なのよ」

「上尾先生の？」

韻子は驚いて訊き返した。

それは初耳だった。杉本カルテットのことを直接知っているわけではないが、上尾とつながりがあるなどとは聞いたこともない。

「だから、お母さん熱心なのよ」

と、澄音が言った。「上尾先生が推薦してくれれば、きっとオーディションに合格すると思ってるんだわ」

「呆れた」

と、韻子は言った。「お母さんだって、かつてはピアニストを目指したんじゃないの。コネなんかで、一流のカルテットに入れると思ってるのかしら？」

学生オーケストラぐらいならともかく、たった四人のカルテットで、一人の実力が落ちれば、音楽の専門

家にはすぐに分る。いくら杉本京子が上尾の親類でも、そんなことをすれば、カルテットそのものの命取りになることぐらい分っているはずだ。

「まあ、多少は違うんじゃないかと思ってるのよ、きっと」

「馬鹿げてるわ」

「そうプリプリしなさんな。可愛い顔が台なしよ」

「からかわないで」

と、韻子はそっぽを向いた。「――オーディション受けるの、やめるわ」

「また意地になって」

「そうじゃないの。でも、たとえ万が一合格したとしても、上尾先生が口をきいてくれたからかもしれない、なんて思ったら、やって行けないもの」

「あんたらしい理屈ね。――じゃ、本当に受けないつもり？」

「そうよ」

韻子はじっと机の上を見つめた。――母が憎らしかった。韻子としては、純粋に自分の力をためしたかったのだ。それなのに、母がそれを打ち壊した……。

姉が出て行って一人になると、韻子は瞼に涙が浮ぶのを感じた。

姉が、きっと階下へ行って、母にこの話をしているだろう。そして母が上って来る。きっと。

ほら、足音が、少し苛立たしげに……。

「韻子、どういうつもり？」

ドアが開くなり、母の言葉が背後から叩きつけられて来た。

ダイヤルを回しかけた指が、何度も止った。二度、三度とかけ直して、それでも、呼出音のする前に切ってしまう。

韻子は、電話ボックスの中で、こめかみに脈打つ自分の鼓動を聞いていた。――どうしたらいいだろう？

韻子が、さっきからかけているのは、水木の家の番号だった。しかし、ともかく夜中の三時なのだ。水木自身が出てくればいいのだが、そうでないと、言い訳を思いつかない。

朝まで待とう。——あと、三、四時間のことだ。韻子は電話ボックスを出た。

もちろん、通りには人影もない。韻子は家を出て来たのである。

3

家を出たことを、韻子は後悔してはいなかった。こうするしかしかたなかったのだ。こうしなければ、音楽そのものさえ捨てることになっただろう。

韻子は、右手にヴァイオリン、左手に小さなボストンバッグをさげていた。朝まで、どこで時間を潰していればいいのか、見当もつかない。

ぼんやりと立っているわけにもいかないので、ともかく駅に向って歩き出した。

時々、車が通るが、タクシーを停めて乗るのも、何だか怖い。ともかく、そういうことに関しては、韻子は小学生並みに臆病なのである。

駅の近くに、二十四時間営業という喫茶店があった。——入ってみようか。

昼間、入ったことはあるが、こんな時間に来る客なんかいるのかしら？

韻子は恐る恐る覗き込んでいたが、思い切って扉を押した。——驚くほど客がいる。

席の半分以上が埋っていた。

「いらっしゃいませ。どうぞ奥のテーブルへ」

割合に感じのいいウエイターが言った。韻子はホッとして、言われた通り、席につく。

メニューには、食べるものもあって、別に夜中だから特別というわけではなさそうだった。

韻子は紅茶だけでは悪いかと思って、ケーキを頼んだ。値段は昼間の倍ほどもする。

少し落ち着いて店の中を見回すと、意外にサラリーマンらしい男性の姿が目につく。座席で居眠りしている者も少なくない。

ホテル代りにしているのだとすれば、確かに安上りではある。

韻子が心配していたような、ヤクザ風の男とか、不良っぽい姿はなかった。それもそうだ。こんな所へ来ても、アルコールがあるわけではなし、一向に面白くもないだろう。

みんな、お互いのことにはまるで関心がないようだった。

自分の格好だって、はたから見れば、家出と一目で分りそうなものだが、誰も気にも止めない。それは快い無関心だった。

低く流れている音楽は、意外なことにクラシックで、ムード音楽にアレンジされた「タイスの瞑想曲」だった。

お世辞にもおいしいとは言えない紅茶とケーキだったが、気分的にはずいぶん楽になった。

これから、どうしようか。

ともかく水木と相談したいとしか考えなかったのである。その先は——どうにかなるだろう。

世間知らずの故の無鉄砲で、家を出て来たものの、外で暮らすといっても、今財布にあるのは、二、三万円の小遣いだけだ。部屋一つ借りることはできない。働くといっても、韻子は、およそ仕事などしたこともない。

「いいわ、ともかく……」

と、韻子は呟くように言った。

今は、早く朝になってくれないか、と、そればかりを考えていた。

時が過ぎるのを待つ内に、ついウトウトして、目が

覚めると、外は明るくなりかけていた。
七時になるのを待って、韻子は、水木の家に電話をした。
「水木ですが」
母親らしい声がした。
「あの——水城韻子と申しますけど——」
「あぁ、ちょっとお待ち下さいね」
すぐに水木が出た。
「やあ、どうしたの？　ずいぶん早いね」
「良かったわ、起きててくれて」
「今日はテストなんだ。勉強してないんで、早く起きてやってるんだよ」
「あ、そうなの。何だか悪いわね」
「どうしたんだい？」
「実は——家を出て来ちゃったの」
少し間があった。水木がどう言うか、それが気になって、胸苦しいほどだった。
「今、どこにいるの？」
と水木は言った。
「喫茶店。終夜営業だから、ここで時間を潰してたの」
「すぐ行くよ」
「いいわよ。テスト、あるんでしょ？　終ってからでいいから」
「そんなもの、追試を受けりゃいいんだから。——どこ？」
「いえ、だめよ。私は大丈夫。ともかく、どこかで会えればいいの。テスト終るの、何時？」
「そうかい？——ええと、昼までだから、十二時半には大学を出られるよ」
「じゃ、大学の裏門の所で待ってるわ。表だと母が捜しに来るかもしれないし」
「裏だって危いよ。それじゃ、ピアノの修理室があるだろ。あの裏にしよう」

「ええ、分ったわ。十二時半に行く」
「それじゃ――」
と言いかけて、水木は少し声を低めた。「僕に任せておけばいいよ。心配しないで。いいね？」
「ええ……」
電話を切ったとき、韻子は急に体が軽くなったような気がした。
喫茶店を出ると、外はよく晴れ上って、光がまぶしい。勤めに出る人たちが、早い足取りで駅に向っているが、まだまだラッシュアワーには間がある。
混んだ電車で行くのもいやなので、韻子は、自分も駅に向って歩き出した。大学の方へ早目に行って、待っていよう、と思ったのである。
こんなに早く大学へ出るのも珍しいわ、と韻子は一人で笑ってしまった。
母や姉は、もう自分の家出に気付いているだろうか？　いや、寝坊だから、まだ当分は気付くまい。
それに、韻子が真先に起き出して、大学へ行くことも多いから、別に姿が見えないからといって、気にとめはしないだろう。書置き一つ、置いて来たわけではないのだから。
大学へ着いて、韻子は人のいないレッスン室に入って、時間を潰した。
昼までの時間が、ひどく長い。――しかし、一向に不安はなかった。至って呑気な家出人だった。

4

水木は、なかなかやって来ない。
韻子は、待ち合せた場所を、まるでメリーゴーランドのように、ぐるぐると回っていた。彼が来ることを疑っていたわけではない。
ただ、早く彼に会いたいという、その一心でしかなかった……。

一時になり、一時半になると、少し不安になって来たが、学内を捜し歩くわけにもいかなかった。音楽大学などというのは、もともとあまり大世帯ではないから、歩いていれば、知った顔に出くわすに決っていた。

一旦、不安が頭をもたげると、悪いことばかりが想像された。水木が、母に電話しているのではないか、と思った。

韻子が家を飛び出してしまうとは、水木も思っていなかっただろう。今度は韻子を敬遠したくなったとしても、不思議ではない。

まさか、あの人がそんな！

打ち消してみるのだが、それならなぜ、やって来ないのか、と意地悪な声が聞こえて来る。

二時になった。——韻子はバッグを持ち直して、どこかへ行こう、と歩き出した。

とたんに、水木が駆けつけて来て、韻子の前へ飛び出した。

「ごめん！」

水木が息を弾ませて、「テストが一科目増えてたんだ！　それを忘れてて。——悪かったね」

ホッとすると同時に、韻子は涙が出て来て止まらなくなった。

「おい、泣くなよ。——ねえ、弱いんだ、泣かれると。——頼むからさ」

水木が、困り果てた様子で、頭をかいている……。

「——この部屋、誰の？」

と、韻子は窓を開けながら言った。

「クラブの先輩さ。留守中、空いてるから、借り手を捜してくれって頼まれてたんだ」

「そう」

「男一人で住んでたから、ちょっと汚いかもしれないけど、差し当りここしか思い付かなくてね」

と水木は言った。

「いいのよ。充分だわ」
三階建の、ちょっと立派なアパート、というところだった。マンションとアパートの中間、というところか。
隣の音が筒抜けということはなさそうだ。
「でも——ここにいていいの？」
と韻子は訊いた。
「うん。しばらくは大丈夫さ。でも、どうするか、ゆっくり考えなきゃ」
「そうね」
韻子は、ゆっくりと、色の少し変った畳の上に座った。
「あなたに迷惑かけたくないわ、私」
「そんなこと、気にするなよ」
水木は、ちょっと照れたように言って、「そうだ。君、何も食べてないんじゃないの？」
そう言われて、韻子は、昼抜きだったことを思い出した。あの終夜営業の喫茶店でケーキを食べただけだ。そう思いつくと、急にお腹が空いて来た。
二人で外へ出て、スーパーマーケットへ行った。
韻子が、必要なものを買い込み、その後、スーパーの中の食堂で遅い昼食をとった。早い夕食、といった方が正確かもしれない。
アパートへ戻って、韻子は部屋を掃除した。
「——布団がしまいっ放しで、しめってると思うけど、一晩だけ我慢してくれよ」
と、水木が言った。「明日、陽に当てるといい」
「そうするわ」
韻子は肯いた。
2DKの広さ。——韻子一人で生活するには充分である。電話はあるが、通じていなかった。
「——でも、お宅で心配してるんじゃないかな」
と水木が言った。「僕の所へも、何か訊いて来るかもしれないよ」

「教える？」
「君次第だな」
と、水木は肩をすくめた。「でも、生活費をどうするか、とか、考えなきゃいけないだろ」
「ええ」
二人は、ちょっと黙り込んだ。——韻子にしても、音楽以外のことでは、子供のようなものである。急にお金を稼ぐといったって、どうしていいのか分らないのだ。
「まあいいさ」
と、水木は軽い調子で言った。「ともかく、疲れてるだろ、今夜はゆっくり休めよ」
「まだ早いわ」
「そうかい？　でも五時過ぎだよ。——カーテン、閉めたら？」
「ええ、そうね」
韻子は、立ち上ってカーテンを閉めた。部屋の中が、黄昏の色に沈んだ。
「明りを——」
と、水木が言いかけるのを、
「いいわ」
と、韻子が遮った。
「え？」
「まだ、点けないで」
韻子は、水木の前に座った。——不思議に、緊張も恐怖もない。ごく、当り前の感じだった。
——部屋の明りは、外が本当の暗闇になっても、なおしばらく、点けられなかった。

次の日、韻子は昼近くに目を覚ました。
自分がなぜここにいるのか、戸惑いはなかった。
——いつになく気分がいい。
布団を上げ、部屋の掃除をした。
水木が午後にはやって来ることになっている。夕食

に、何か作ってみようかしら、などと考えていた。
ゆうべはヴァイオリンに触らなかったわ、と韻子は思った。何年ぶりのことだろう？　この分だと、今日も触れずに終るかもしれない。
玄関のチャイムが鳴った。
「はい！　早いのね」
ドアを開けて、韻子は立ちすくんだ。母が立っていた。

孤独の詩（うた）

1

韻子は弾き終えて息をついた。
額に少し汗がにじんだ。
「良くなったね」
と、上尾が言った。「本当だ。とてもいいよ」
「ありがとうございます」
と韻子は言って、「じゃ、今日は――」
「うん。また明日おいで。オーディションまで一週間だ」
「はい」
韻子はケースにヴァイオリンをしまった。
「このところ、君は見違えるようになったね」
と上尾が椅子から立ち上って言った。
「そうでしょうか」
「お世辞でも何でもないよ。――ああ、あっちで一服しよう。何かあったのかな？」
「え？」
「君にさ。演奏に何かキラキラしたものが出て来た。何かなければ、ああは変るものじゃないよ」
居間へ入ると、上尾はソファに座った。
韻子は、立ったまま上尾を見つめた。
「大人になったね、君は」
と上尾が言った。「大人の女に。――違うかな」
韻子は、上尾の視線をはね返すように、
「母とはいかがですか」
と言った。
「君のお母さんと？」

「私、知っています。当然、私のことも母からお聞きになっているはずです」
「なるほど、そうか」
上尾は、さして驚いた様子もなく、「音楽家にとっては、音楽だけが総てさ。その他のことは、どれも大したことじゃない」
「母とのこともですか」
「君のお母さんとは、そう何度も会ったわけじゃないよ」
上尾は、ちょっと皮肉っぽい笑みを浮かべて言った。
「それに、君を引き受ける代償として、お母さんとあなったわけじゃない。それとこれとは別だ」
「そうですか」
「信じられないかな？　まあいい。——ともかく君が杉本カルテットに入れば、君のお母さんは満足ということだ」
上尾は、のんびりと言った。「ところで、君の方は？　これだけヴァイオリンに打ち込んでいるところをみると、かなり意欲は満々のようだね」
「ええ、もちろん」
と、韻子は言った。「何としても、入りたいと思っています」
「そうか。それは良かった。やる気のない生徒ほど、教えがいのないものはないからね」
「では、また明日参ります」
韻子は一礼した。
上尾の家を出て、韻子は、ゆっくりと家路を辿った。いつも疲れている。体の方々に根深く巣食ったこの疲労感は、あのアパートから母の手で連れ戻されて以来、消えたことがない。
いや、正確に言えば、水木が、アパートの場所を、自分から貞子へ電話して教えたのだと知って以来、である。
もう、誰も信じられない。

韻子は、ただヴァイオリン一筋に打ち込んだ。一日十数時間も、奏きまくった。

母の貞子が、さすがに、

「今からそんなに頑張ったら、疲れちゃうわよ」

と心配したほどである。

もっとも、貞子が心配したのは、もっぱら杉本カルテットのオーディションのことであって、韻子の体や、精神状態についてではなかった。

しかし、こうして、上尾の家から、家路を辿る時間など、韻子の思いは、水木との一夜に飛ぶ。——水木を恨む気持はなかった。

いや、なかったといえば嘘になるが、男というもの一般への、不信の思いが、韻子を苦しめていた。

姉は、このところ新しいボーイフレンドができたようで、毎晩帰りは遅い。姉妹で話し合うことも、一向になかった。

家に帰ってみると、母は外出から帰っていなかった。家は真っ暗であった。

「真っ暗な家か……」

と呟いて、韻子は苦笑しながら、玄関の鍵を開けた。鍵をバッグへ戻そうとしていると、誰かの足音がした。振り向くと、玄関の照明に、若い娘が浮かび上った。

若い、といっても、韻子と同じぐらいだろう。——ちょっとやせ型で、神経質そうなタイプだった。

「どなた？」

と、韻子が訊くと、

「水城澄音って、あなた？」

と、その娘が言った。

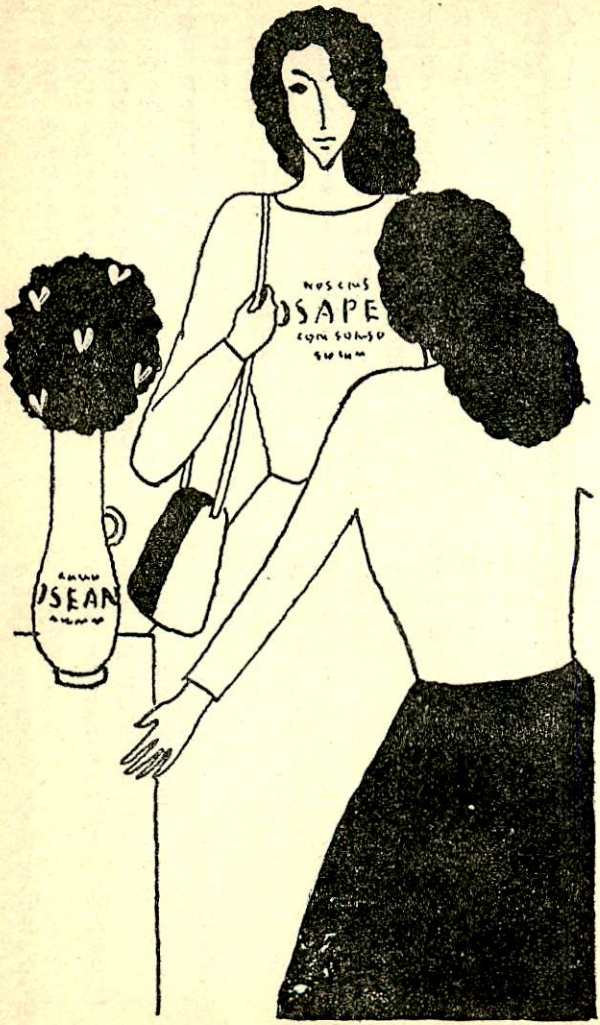
「澄音は姉だけど……。何かご用？」

「会いたいの」

「今はいないわ」

「どこにいる？」

「知らないわよ。姉はともかく帰りが遅いから。——



何のご用？」

その娘は、疲れたように、息を吐き出した。——張りつめていたものが、崩れたという感じだ。

「あなたのお姉さんに言っておいてよ。人の恋人をとらないでくれって」

娘は、声を震わせていた。

やれやれ、と韻子は思った。これが初めてというわけではないのだ。前には、子供を連れた若い主婦がやって来たこともある。

澄音はそんなことを一向に意に介さない。それでも、いつも「遊び」という一線を守っているから、面倒になると、どんなに深く付き合っていた相手でも、あっさり別れてしまうのだ。

「伝えておくわ」

と、韻子は言った。「でも、姉は、いつも長くは続かないの。放っておいた方がいいと思うけど」

「人のことだと思って、気楽に言わないでよ！」

その娘は、そう言うと、泣き出してしまった。韻子は、歩み寄ると、

「そんなつもりじゃなかったのよ。ごめんなさい」

と、その娘の肩に手を置いた。

その娘は、涙をのみこむと、

「もう——大丈夫。ごめんなさい。あなたにこんなこと言っても仕方ないのに」

と言った。

韻子は、ちょっと、考えてから、

「家に上る？」

と訊いた。

「いいえ」

「どうせ姉はずっと遅くならないと戻らないと思うけどね」

「会ってもどうにもならないわね。——それは分ってるんだけど」

「あなた、お名前は？」

「いいの」
その娘は、首を振った。「私が来たことも、お姉さんには黙っててくれる？」
「それはどっちでもいいけど……。本当にその方がいいの？」
「ええ」
と、娘は肯いた。「その内には、きっと彼にも分るわ……」
「姉は飽きっぽいから、その方が賢明だと思うわ」
「そうね」
その娘と韻子は、何となく顔を見合わせて微笑んだ。
「ごめんなさい、驚かせて」
「いいのよ」
「じゃ、帰るわ、私」
名も告げないままで、その娘は足早に歩き出した。
韻子は、道に出て、その娘の後姿を見送った。——少しうつむいて、前かがみの、寂しい後姿だった。

その夜、澄音が戻ったのは、十二時を少し過ぎていた。
ベッドに入っていた韻子は、物音で目を覚まし、下へ降りて行った。
居間で、澄音がソファに寝そべっている。
「——お早いお帰りね」
「何だ、こんな時間まで起きてたの？」
「眠ってたのよ。——健全な生活してるんだもの」
澄音はちょっと笑って、立ち上ると、ウーンと伸びをした。それから、ピアノの前に座って、静かに鍵盤を叩いた。
不思議なもので、こんなにめちゃくちゃな生活をしているのに、澄音の技巧は少しも損なわれない。
その点では、姉は天才なのかもしれない、と韻子は思った。自分のような人間が必死の努力をしても、手に入れられない「何か」を、先天的に身につけているのかもしれない。

「――お姉さん」
「何よ？」
「今日、女の子が訪ねて来たわ」
「誰？」
「名前言わなかった。――お姉さんに恋人をとられた、って」
ピアノを奏く手が止った。
「じゃ……あんたも分ったのね」
澄音はピアノの方へ目を向けたまま、言った。「どうせ、あんただけじゃなかったのよ」
「何の話？」
「水木君のことじゃない、もちろん」
と、澄音は言った。
韻子は、しばらく、姉の言葉の意味が分らなかった。
そして、ゆっくりと言葉を押し出すようにして言った。
「じゃ……今のお姉さんの彼氏って……」
「何だ、名前も聞かなかったの、その女の子から？――そう、そうなのよ」
澄音がちょっとの間、韻子から目をそらしたのは、さすがに気がとがめたせいだったろうか。
「知らなかったわ」
「まずいことでもある？」
「別に」
と、韻子は首を振った。
「そう。良かった。――妹を悲しませるに忍びないものね」
韻子は、フフと軽く声を上げて笑った。澄音はびっくりしたように妹を見た。
韻子は、はっきり声を上げて笑った。天井を仰ぐようにして、笑いが弾ける。体を震わせて笑った。
澄音は、ちょっと面食らったように、
「どうしたのよ一体？」
と韻子の腕に手をかけた。

「ね、何か奏いて！」

と韻子は澄音に言った。「うんと激しい曲を。〈革命〉か何かがいいわ。ね、奏いて！」

「いいわよ」

澄音は、女性とは思えないほどの、力強いフォルテを叩き出した。

ピアノの響きが、音というよりは、振動の波として部屋を満たした。

韻子はピアノの上に両手をのせ、そこに頭をのせて、聞き入った。音が、じかに韻子の体へ伝わって来る。

韻子の目は、燃えるように激しいものを見せて輝いていた。いつもの韻子からは、想像もつかないような激しさである。

その目は、真直ぐに姉を見据えていた。

奏き終えて、澄音は妹を見た。

「――いかが？」

「ありがとう。お姉さんって天才だわ」

「何を急に――」

と、澄音は笑った。

突然、韻子は澄音に飛びかかった。両手が澄音の首にかかる。二人は床に転がった。

澄音が、韻子の手を引き離そうともがいた。韻子は額に汗を浮かべて、姉の首を絞める手に力をこめた。

澄音も必死だった。何とか逃れようと、韻子の顔を捉えようとする。だが、韻子はそうはさせなかった。

悲しげな声が澄音の喉から洩れた。

そして――飛びかかったときと同じように唐突に、韻子は姉の首から手を離した。

立ち上ると、ピアノの椅子にぐったりと腰を落とし、鍵盤に両手を叩きつける。不協和音が鳴った。

澄音は、激しく喘いで、やっとの思いで起き上った。咳込みながらソファまで這って行って、体をもたせかけた。

しばらく、沈黙が続いた。聞こえるのは、澄音の荒

い息づかいと、低く流れる韻子のすすり泣きだけだった……。

2

雨の日だった。

韻子は、大学の門の前に、もう三十分以上立っていた。——そろそろ、どの学年も授業を終えて帰り始める時間だ。

水木は、友人たちと四、五人で、何やら話しながらやって来た。雨と、傘のせいで、韻子には一向に気付かない様子だ。

「じゃ、明日な」

友人たちと別れて、水木は一人で歩き出した。韻子が足を早めて、それに追いつく。

水木が、横に並んだ韻子に気付いた。

「君か」

「憶えてた？」

「もちろんさ」

「私もよ」

韻子は微笑んだ。水木は、ちょっとホッとしたようだった。

「ねえ、お茶でも飲まない？」

と、韻子の方から誘った。

「いいよ」

二人は、学生だらけの喫茶店に入って、そのやかましさに閉口して、すぐに出てしまった。少し遠くまで歩いて、やっと、適当に静かな店を見付ける。

「濡れちゃったわ」

「大丈夫？」

「ええ。しばらくすれば乾くでしょ」

韻子は、席に落ち着くと、さて、という風に、水木を眺めた。「——元気？」

「まあね」

水木は、ちょっと落ち着かない様子だった。
「なかなかいいもんね」
「何が？」
「別れた恋人とまた会って話をするのって。よく映画なんかで見るじゃない」
「そういじめるなよ。僕だって別に……」
「あら、何も恨んだり、責めたりしてるわけじゃないわ。純粋に、お話があって会いたかったのよ」
「話って？」
「どうして気が変ったの？」
水木は、ちょっと困ったように目を伏せた。
「それは……君のために、その方がいいと思って……」
「だめだめ」
と、韻子は笑った。「白状しなさいよ。姉のせい？」
「姉さん？」
水木がハッとしたように韻子を見る。
「姉とのこと、知ってるわ。それはもういいの」
「そうか……」
「ただ、私とああなる前から、姉と付き合ってたのか、それを訊きたいのよ」
「聞いて、どうするんだい？」
「知りたいの、教えて」
韻子はじっと水木の目を見据えた。
「後だよ」
「本当に？」
「ああ」
「そう……」
韻子は肯いた。「でも……あのときは私を愛してくれてたんでしょ」
水木は答えなかった。外では雨がひどくなっていた。
「オーディションの方、どうした？」
と、水木が話題を変えた。
「あと一週間ないわ。これからまた、上尾先生の所よ」

韻子が素直に話に乗って来たので、水木は少し気が楽になったらしい。
「頑張ってるね。見通しは？」
「どうかしら。先生は有望だって言って下さるけど」
「大したもんじゃないか。入れば国際的な活動が待ってるだろ」
「そうね。でも、私、飛行機が怖くって……」
と韻子は言った。
「先生の所に遅れるとまずいんじゃないの」
「そう逃げるな、こら！」
と、韻子は水木をにらんだ。
「別に逃げやしないけど――」
「今日はね、レッスンが遅いの。お出かけだから」
「そう……」
「時間、余ってるのよね」
韻子は、少し間を置いて、言った。「――ホテルに行かない？」
水木が目を大きく見開いて、韻子を見る。
「そんなにびっくりしなくてもいいでしょ。初めてっていうわけでもないんだし」
「よせよ」
「どうして？」
「どういうつもりだ？」
「もう一度、あなたと寝てみたいの。それだけよ」
水木はムッとしたように韻子をにらんでいたが、その内、気が変ったのか、ヒョイと肩をすくめて、
「いいよ、僕は」
と言った。
その表情の変り方を見た瞬間に、韻子の中に残っていた、水木への想いは、完全に消えていた。
「じゃ、行く？　私、よく知らないの。連れて行ってよ」
「僕だって、そう詳しくはないよ。でも――まあ、いいか。適当に選ぼう」

「そうね」
韻子は立ち上った。
外の雨は、まだかなり強く降っていた。
「車を拾おうか。どうせこの近くにはホテルなんてないからな」
「タクシー代ぐらいもつわ」
「いいよ。それよりホテル代もってくれ」
「まあ、貧しいのね」
と韻子は笑った。
「冗談だよ。待っててくれ。ここじゃ車、通らないから、あっちの広い通りで捜して来るよ」
「ここにいればいいの？」
「うん、ここまで来て拾うよ。その軒下ででも。——いいね？」
「分ったわ。待ってる」
水木は、雨の中を小走りに急いで行った。三時を少し過ぎていた。

——新宿のラブホテルで、水木が刺し殺されているのが見つかったのは、その日の七時二十分のことだった。

容疑

1

「何ですって？」

玄関を上りかけて、韻子は訊き返した。

「警察の人が来てるのよ」

貞子は、迷惑そうに言った。まるで、ゴキブリが出たのよ、とでもいう調子だ。

「何の用かしら？　別に非行の経験もないのにね」

「ともかく、お上りなさい。——本当にいやね、オーディションがもうすぐだっていうのに」

韻子は、ヴァイオリンを置いて、居間へ入って行った。何だか、貧乏くさい感じの中年男が二人、居心地悪そうにソファに浅く腰をかけている。

「お待たせしました」

と、韻子は言った。

どうやら、母はお茶を出さなかったとみえる。

「——水木さんが殺された？」

韻子は、話を聞いて驚いた。いや、ショックだった、と言ってもいい。

しかし、取り乱すほどのことはなかった。ただ、知人がそんな目にあったという驚きと、さして変るところはなかった。

「いつのことですか」

「昨夜です。いわゆる——ラブホテルの中でした」

「じゃ、朝刊に出ていた……。あれがそうだったんですか」

「水木さんとはお付き合いが？」

「以前は。このところお付き合いしていませんでし

た」

と、韻子は言った。

貞子が仏頂面をして、刑事たちをにらんでいる。

「昨日、お会いになりませんでしたか」

と、刑事が訊く。

「会うはずがないでしょう！」

と貞子がかみつきそうな口調で言った。「娘は大事なオーディションを控えて、余計なことに神経を使っている暇なんか――」

「お母さん、大丈夫よ」

と、韻子は言った。「――昨日、大学の帰りに出会ったんです。レッスンまで時間があったので、喫茶店で話をしました」

「なるほど。それから、どこかへ行かれましたか？」

「いいえ。私はレッスンがありましたから。水木さんはどこへ行くとも言っていませんでしたわ」

「そうですか。――それは何時頃です？」

「ええと……たぶん三時くらいでしょうね」

刑事は、ちょっと間を置いて、

「六時前後はどちらにおいでした？」

と訊く。

「娘がやったとでも言うんですか！」

貞子は、今にもホウキを持って追い回しそうな剣幕だった。

「上尾先生の所です。レッスンは五時から七時までした」

「上尾先生……ですね。確認を取らせていただいて構いませんか？」

「上尾先生にそんな――」

貞子の怒りは正に沸騰寸前だった。

「お母さん」

韻子は苦笑して、「こちらはお仕事なんですもの、仕方ないわよ」

と言った。

「じゃ、くれぐれも失礼のないようにして下さいね」
と、貞子は渋々言った。
刑事たちも、貞子の剣幕に押され気味という感じで、上尾の住所と電話番号をメモすると、
「水木さんを恨んでいたような人間の心当たりはありませんか」
と訊いた。
「さあ……。女友だちの多い人でしたから」
「つまり——一種のプレイボーイというような？」
「そうですわ。人は良かったんですけど、ただ、もてたから……。若い内はいい気になってしまうもんですわ」
「なるほど」
刑事は、いやに感心した様子で肯いた。「そういう女友だちの——誰でも結構ですが、名前とか、ご存知ありませんか」
「残念ですけど、聞いたことがありませんわ」
と、韻子は言った。「男の友だちにお訊きになった方がいいかもしれません」
「ああ、なるほど。そうですね。そうしましょう。では……」
刑事たちは、礼を言って、引き上げて行った。——貞子は、玄関に塩でもまきたいような顔で、送り出し、居間に戻って来た。
韻子はソファに座って、じっと考え込んでいる。
「どうしたの、韻子？」
「ちょっと思い出に耽ってたのよ。構わないでしょ。一時は恋人だったんだから」
「それはいいけど……。もうすっかり終ってたんでしょ？」
「ええ。代りにお姉さんと付き合ってたようよ」
「澄音と？　忙しい子だね、あれも」
と、貞子は少々呆れた様子。
「お姉さんは、そんな馬鹿なまねはしないわね」

「何を？——人殺し？　まさか！」
貞子は、ちょっと笑って、「殺される方でしょ、どちらかっていうと」
韻子は、チラッと母の顔を見た。自分自身、姉の首を絞めかけたのだ。もちろん、母は何も知らないが。
「——気の毒に、水木君も。あの若さで殺されちゃね」
と、韻子は、まるで他人事のように言った。
「しかも場所が場所ね。親も恥ずかしいでしょう」
電話が鳴って、貞子が立って行った。
「——あ、奥様、どうも、こんにちは。——え？——いいえ！　とんでもない。——そうですか。ええ、同じ『水木』っていう名前の——字は違うんですよ。うちの二人はピンピンしてますわ」
どうやら、早とちりの知人が、澄音か韻子が殺されたのかと思って電話して来たらしい。
玄関に物音がして、姉が帰って来たらしかった。
——足音が、そのまま二階へ上る。韻子は居間を出て、階段を上って行った。
澄音の部屋を覗くと、
「——誰？」
と声がした。
「私、入っていい？」
「いいわよ」
韻子は、入ってみて、びっくりした。姉がベッドに横になっている。少し顔が青い。
「具合悪いの？」
「ちょっとね……」
韻子は、椅子に腰をかけた。
「私のせい？」
澄音はちょっと笑った。
「まさか。——寝不足よ」
「そう。水木君のこと、知ってる？」
「もちろん。新聞で見たし、学校でもみんなしゃべっ

てたわ」
「何ともないの？」
「ただの恋人の一人じゃない。どうってことないわ」
韻子は少し間を置いて、言った。
「昨日、水木君に会ったのよね」
「へえ」
「大学の帰り。——二人でホテルに行こうかってことになって」
澄音が起き上った。
「あんたがやったの？」
「違うわ。ちょうどその時間は、上尾先生のとこよ」
「絶対のアリバイね」
と、また横になって、「ホテルには行ったの？」
「行かなかった。車を拾いに行かせて、その間に、消えちゃったの。最初からそのつもりだったんだもの」
「つまり……試したのね。彼が行こうと言うかどうか」
「そう。彼、あっさり承知したわ。——あのとき、もう未練も何もなくなったの」
「あんたらしいわ」
「仕方ないでしょ。こういう性格なんだもん」
「それはいいけど、やっぱりあんたが水木君を殺したことになるかもしれないわ」
「どうして？」
と目を見開く。
「ホテルへ誘っといて、すっぽかされたら、男の方はムシャクシャするわよ。せっかくその気になってるのに。だから、電話できっと誰か呼んだのね。そしてホテルへ行って……。女の方が、その事情を知って、怒る。喧嘩になる。——で、殺人、ってわけよ」
「それが私のせい？」
「責任感じることないけどね。でも、きっとそんな具合だったのよ」
韻子は、立ち上ると、窓の方へ歩いて行き、表を眺

めた。そしてポツリと言った。
「自業自得よ、あの人」
澄音は、何も言わなかった。

2

次の日の朝、貞子は外出の仕度をしていた。
「上尾先生の所へ行ってくるわ」
と、貞子は言った。「お詫びをしておかなくちゃね」
逢引きの口実じゃないの、と韻子は心の中で呟いた。
珍しく、朝から大学へ出て、昼休みに学生食堂に入った韻子は、武田百合の姿を見つけて、手を振った。
百合の方も、席から手を上げて見せ、隣の空いた椅子を指さす。韻子は肯いて見せた。
コーヒーを受け取って、百合の隣の席に座る。
「しばらくね」
と百合が言った。「杉本カルテットを受けるんですって？」
「よく知ってるわね」
「私の情報網、優秀だものね」
と、百合は威張って見せた。
「ここの学生が殺されたってニュースは？」
「知ってるわ。もちろん。正直、テレビのニュース聞いて、ギョッとしちゃった。ほら、字は違うけど、同じ名でしょ」
「私の所に刑事が来たわ」
と、コーヒーをすすりながら言う。
「間違えて？」
「まさか！　私、しばらくあの人と付き合ってたの」
「へえ。じゃ、上尾浩三郎との噂は？」
「いつの間にか立ち消えね。無責任なもんだわ」
「良かったわね」
「良くもないわ。殺人容疑じゃね。——もっとも、私はアリバイがあるんで、すぐ刑事は帰っちゃったけ

ど」
「結構、派手な男の子だったんでしょ？」
「良く知らないわ」
と、韻子は言った。「このところ、毎日上尾先生の所でレッスンだもの。それどころじゃないのよ」
「大変ねえ、才能のある人は。私なんか、もう親が絶望してるもんね」
「いいじゃない、気楽で」
「喜べないわ、手放しじゃね」
と百合は愉しげに言った。「いつも思うのよ。こんなに稽古して、末は団地で近所のガキども相手に『猫ふんじゃった』か何か教えるのかな、なんて。そう考え出すと、虚しいわ」
でも、音楽一筋に打ち込むために、結婚も子供も、総てを諦めるのと、どっちが果して虚しいのかしら。韻子はそう思った。
もっと気楽な、もっと幸福な音楽があっていいんじゃないか……。
「お姉さんはどう？」
と、百合が訊いた。
「相変らずよ。のんびりやってるわ」
「いいなあ。好きなことして、あれだけ巧いんだから。これも才能ってもんかしらね」
「この間もね、私――」
と言いかけた韻子を、
「ちょっと！」
と百合が止めた。「あなたの名前、呼ばれたんじゃない？」
「え？」
韻子は耳を澄ました。食堂の中はざわついているので、よく聞き取れないが、なるほど、
「水城韻子さん、事務室へ連絡して下さい」
と放送されているようだ。
「何かしら？」

韻子は立ち上った。

武田百合も、韻子について学生食堂を出た。

事務室といっても別の建物なので、そう簡単には駆けつけられない。

「――すみません」

やっと受付のカウンターへやって来て、「今、呼び出しのあった水城ですけど」

と言った。

「え？　何かしら？――ちょっと待ってね」

受付の女性はよく分らないらしい。奥へ行って、何人かに訊いて回って、やっと、メモ用紙を持って来る。

「あのね、エリって人から電話で、お姉さんが倒れたから、すぐ来てほしい、って」

「姉が？」

「住所と電話がここに書いてあるわ」

「すみません」

受け取って見る。――そうか、エリというのは、いつか姉に連れられて行った六本木の妙なマンションにいた女だ。住所も、どうやらあのマンションらしい。

「お姉さんが倒れたって、どうしたの？」

と百合が心配そうに言った。

「分らないわ。このところ、ちょっと疲れてたみたいだけど。ともかく、私、すぐ行ってみる」

「心配ね。早く行ってあげて」

百合に押しやられるようにして、韻子は駆け出していた。――お姉さんが倒れた？　そんなこと……。

韻子は半信半疑だった。

住所だけで、あのマンションを捜し当てるのは一苦労だった。

タクシーに乗って近くまで行ったものの、一方通行や進入禁止が多くて、細い道までは入ってくれない。おかげで、タクシーを降りてから、二十分近くも歩き回ってしまった。

やっと見付けたマンションへ、小走りに入る。三階の〈303号〉。——ここだったわ、確か。

チャイムを鳴らして、少し待つと、ドアが開いた。

「ああ、韻子さんね」

Tシャツにジーンズ姿のその娘が、あのエリだと分るまでには、少しかかった。

「あの——姉は——」

「ともかく入って」

と、エリが促す。「大変だったのよ」

リビングルームは、少し散らかっていたが、今はごく普通の部屋に見えた。昼間の光のせいだろうか。いや、この前、どこか異様な雰囲気を感じたのが、夜の暗さのいたずらだったのだろう。

「姉はどこです？」

と、韻子が訊くと、エリはソファにけだるそうに座った。

「病院よ。救急車で運ばれて行ったわ」

韻子は青くなった。どうせ飲み過ぎくらいのことだろうと思っていたのだ。

「でも、大丈夫。危いほどのことじゃないそうよ」

「一体どうして——」

と韻子が言いかけるのを、エリが遮った。

「澄音さん、流産したのよ」

韻子には、正に寝耳に水だった。

「姉が……妊娠してたんですか」

「気が付かなかったの？」

エリに訊かれて、韻子は目をそらした。

「そういえば、ゆうべ、気分が悪そうでしたけど……。まさかそんなことだとは……」

「私も知らなくってね。そうと分ってたら、やらせなかったんだけど」

韻子は、エリを見た。

「やらせるって、何をですか？」

「あんたも喫ったでしょ、この前来たときに」

韻子は、顔をこわばらせて立っていた。
喫った？——何のことだろう。
「さあ、これが病院の名前。まだお宅には連絡してないわよ。私が電話しちゃおかしいでしょ。あんた、病院からかけてよね」
韻子は、そのメモを見た。ここなら知っている。前に、友人が入院したのを、見舞ったことがある。
韻子は、
「どうもすみませんでした」
と、頭を下げて、玄関へ行った。
靴をはいていると、
「子供の父親、知ってる？」
とエリがやって来て、訊いた。
「いいえ」
「その父親ってのがね、死んじゃったんだって。珍しく、澄音さん、落ち込んでたわ。本気だったのかもね」
韻子は、マンションを出た。
タクシーを拾って、病院へ向う。——こめかみに、血の鼓動が痛いほどだった。
「お姉さん……」
姉は、水木の子を宿していた。そして、流産した。
あのエリが言った、「喫った」というのは、おそらく、マリファナか何かなのだろう。
それを、私も喫った？　私も！
あのときは、酔って、何が何だか分らなかった。エリの言う通り、喫っていたのかもしれない。
韻子は頭を振った。——今は、姉のことだ。それだけを考えよう。
車が混んでいて、病院まで小一時間もかかった。受付で訊くと、すぐに病室は分った。
澄音は、個室に入っていた。
韻子が入って行くと、澄音はベッドに横になって、眠っているように見えたが、すぐに目を開いた。

「お姉さん、どう？」
「何だ、来たの。エリね、知らせたのは」
「うん。——具合は？」
「もう平気よ。後は寝てるだけ」
少し顔色は悪いが、それ以外はどうということもないようだ。しかし、姉が、こうして病院のベッドに横になっているところは、韻子には初めて目にする光景だった。
韻子は、急に姉が可哀そうになって、涙ぐんだ。
「何よ、いやねえ」
と、澄音は笑った。「私、死なないわよ、言っとくけど」
韻子は、泣き笑いの顔で、姉を見つめていた。

白い時間

1

貞子が駆けつけて来たのは、夜になってからだった。韻子が何度上尾の家へ電話しても、留守だったのである。——きっと、二人でホテルにでも行ってるんだわ、と思って、腹が立った。

「何をしてたの？」

と、韻子は、廊下で母が来たところを捕まえて言った。

「何を言ってるのよ」

と、貞子は言い返した。「あなたこそ上尾先生のレッスンはどうしたの」

「お姉さんが倒れたっていうのに、そんなこと——」

さすがに韻子も呆れて、怒る気にもなれない。

「倒れたといったって、別に命にかかわるってわけじゃあるまいし」

これが母親の言うことだろうか？

貞子はちょっと肩をすくめて、

「まあいいわ。ともかく、明日はちゃんと行くのよ」

と言った。「この部屋ね？　具合はどうなの？」

やっと母親らしい言葉が出て来た。

「安静にしていれば大丈夫だって。三、四日で退院できるらしいわ」

「まあ、そうなの」

貞子はホッとした様子で、「じゃ、そう練習の方にも響かないね」

もはや、韻子には言葉もなかった。

病室へ入ると、貞子は、澄音の顔を覗き込んだ。澄

音は目を閉じて、眠っているように見える。
「――起こさないで」
と、韻子が低い声で言った。
「今夜、あなたついてるの？」
「うん。お母さん、帰っていいわよ」
「そういうわけにも……。あなた、大事なときなんだから、帰って練習しなさい」
「そんなこと――」
と、韻子が言いかけると、
「いいわよ、帰って」
と、急に澄音が言い出したので、二人がびっくりした。
「何だ、起きてるの」
貞子はベッドのわきに座って、「どう、気分？」
「良くはないわね」
澄音は母を見上げた。「久しぶりだわ、寝込むなんて」
「そうね、本当に」
「何か欲しいものある、ぐらい訊いてよ」
「何か欲しいものある？」
澄音が笑い出した。韻子もつられて吹き出してしまった。この分なら大丈夫だ。
「ともかく、今夜はここにいる」
と、韻子は言った。「一日ぐらい、練習休んでも大丈夫よ」
「そう？」
貞子は渋々立ち上って、「じゃ、明日は何か食べるものでも持って来るわ」
「無理しないで。大地震が来るわ」
と、澄音が言った。
「親をからかって……」
貞子は苦笑いした。
母が家へ戻って行くと、ちょうど夕食が出た。
病院の食事である。あまり美味しいとは、お世辞に

も言えない。
「お酒飲みたいな」
と澄音が言い出した。
「馬鹿言わないで！　死ぬ気？」
「ああ、おっかない」
「そうよ。病人に対しては、厳しいことが愛情なのよ」
——澄音は、じっと妹の顔を見て、
「彼の子供だったのよ」
と、言った。
「知ってるわ」
「手違いね。こんなつもりじゃなかったんだけど……」
「愛してたの？」
「まさか」
澄音は首を振った。「気をつけてたんだけど、つい、油断したのよ」
「お姉さんでも？」
「猿も木から落ちる、ってね」
本心だろうか？　あのエリという女性の話では、ずいぶんがっかりしているということだったが。
「お姉さん、私に何をさせたの？」
と顔子は訊いた。
「何の話？」
「六本木のマンションで、よ」
「ああ……。エリに聞いたの？」
「ひどいじゃない。酔っぱらわせといて、さ……」
「あんたがやりたがったのよ。やめろっていうのに」
「嘘だわ」
「信じなきゃいいけど。本当のことよ。何も憶えてない？」
「全然よ。——忘れてて幸いだわ」
澄音は苦笑した。
「あんたは、『いい子』ね。でも、いい子だけじゃ、芸術家にはなれないわ」

「お母さんみたいなこと言わないでよ」
と、韻子は言った。「じゃ、私、近所でご飯食べて来るから」
「ごゆっくり」
「少し眠るのよ。お酒飲みに出歩いたりしないでね」
と韻子は言って、病室を出た。
病院の近くには、食べられそうな所がない。少し歩いて、やっとレストランらしい店を見付けた。
オーダーを済ませ、先にコーヒーをもらって飲んでいると、
「失礼」
と声をかけられた。
何となくパッとしない中年男。——家に来た刑事だ。
「刑事さん。どうしてここに？」
「いや、病院で見かけて、声をかけようと思いましたが、何しろ足が早いので、追いつけなくて」
刑事は椅子をひいて、「ちょっとうかがいたいことがあってね。構いませんか？」
と訊いた。
「どうぞ」
と韻子は言った。
相手は刑事だ。追っ払うわけにもいくまい。しかし、一体何の用事なのだろう？
「病院へ何しに行かれたんですか」
と、韻子は先に質問した。
「実は、あなたのお姉さんが入院されたと聞きましてね」
さすがに警察だ。行動は素早い。
「それで……」
「お姉さんに、ちょっとお話をききたかったんです。例の被害者の男性と付き合っていたという聞き込みがありましてね」
刑事は、韻子の顔色をうかがって、「——ご存知でしたか？」

韻子は、ちょっと考えた。否定するというのも、妙なものだ。

「ええ、知っていました」

「しかし、ちょっと妙な話ですな。彼はあなたとも、お姉さんとも、付き合っていたというわけですか」

韻子は軽く肩をゆすった。

「姉には数え切れないくらいボーイフレンドがいます。水木さんもその一人だったんでしょう」

「すると、あなたも承知の上で？」

「何がおっしゃりたいんですか？」

と、韻子は逆にかみついてやった。「私と姉が、水木さんを取り合ったとでも？　とんでもない話だわ。そんな面倒なことをするくらいなら、姉は男のことなんて諦めてしまいます」

「ふむ」

刑事は、ちょっと目を見開いて、「今の大学生は凄いですね」

「みんながそうだとは言いません。私たち姉妹は、ちょっと変ってるんです。誰にでもお訊きになるといいわ」

「ええ、方々で聞かされましたよ。有名なんですね、水城姉妹といえば」

「そうらしいですわ」

と韻子は言った。「――ご用はそれだけでしょうか。私、ゆっくり食事をしたいんですけど」

「ああ、どうも失礼」

刑事は立ち上ると、「では、お姉さんにも、具合が良くなられたら、ちょっとお話をうかがうことになると思いますので」

と、言って、レストランを出て行った。

食事をしながら、韻子は考えていた。――警察は姉を疑っているのだろうか？

それとも、単に水木の恋人の一人だったというので、話をしに来ただけなのか。

韻子には判断がつかない。しかし、ともかく姉に話しておく必要はありそうだ。

コーヒーを飲みながら、韻子は考えていた。——姉が、水木を殺したという可能性はあるだろうか？

「まさか！」

と首を振る。

姉は、そんな風に、のめり込む人ではない。もっとクールで、総て自分中心に物を考えるタイプなのだ。

しかし、それを警察が分ってくれるかどうか……。

2

韻子は、病院へ戻った。

澄音は、さすがに眠りに落ちていて、韻子が病室に入って行っても、目を覚まさなかった。

韻子は一晩中椅子に座っているつもりで、ベッドから少し離れた所に椅子を持って行った。——食事の後というせいもあってか、つい、ウトウトしそうになる。

ドアが開いて、少し、きしんだ音をたてた。韻子はハッと顔を上げた。

どうやら少し眠ってしまったらしい。

「失礼します」

と、顔を出したのは、当直らしい看護婦である。

「何でしょうか？」

「ご家族の方ですね」

「はい」

「面会したいという方がみえてるんですよ」

「こんな時間にですか？」

と、韻子はびっくりして、訊いた。

「お断りしたんですけどね、どうしても、家族の人にでも会いたい、って……」

誰だろう？

「なんという方ですか？」

「女の人。名前はうかがってませんけどね」

韻子は少し迷ったが、追い帰すわけにもいくまい、と思った。

「じゃ、お会いしてみます。どちらに？」

「夜間受付です。ご案内します」

「すみません」

韻子は、看護婦の後をついて、廊下を歩いて行った。病院の独特な匂いと、静かな中に響く、咳込む音や、パタパタというスリッパの音……。何もかもが、日常とはかけ離れた世界のような気がする。

——夜間受付の所まで来ると、看護婦は、

「ちょっと待ってて下さいね」

と、外へ出て行った。

韻子は、じっと立って、待っていた。薄暗い中に、受付の窓口の辺りだけが、ポッカリと明るい。ホッとするような、光だった。

「——変ねえ」

と、看護婦が戻って来て、首をかしげている。

「どうしたんですか」

「いなくなっちゃったんですよ。ここで待っててくれと言ったのに——」

「変ですね、それは、どんな女の人でしたか？」

「まだ若い人だったけど。どうしたのかしら、そんなに待たせたわけでもないのに。——ごめんなさいね」

「いいえ」

と、韻子は言った。「じゃ、病室に戻っていますから、もしまたその人がみえたら……」

「ええ、お呼びします」

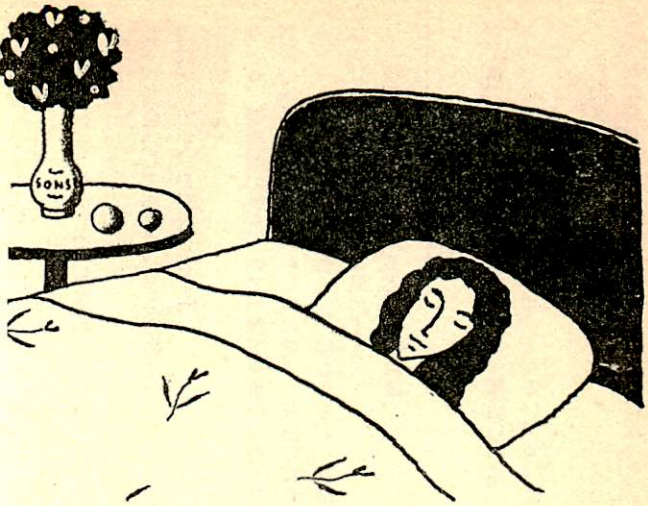
韻子は、一人で病室に戻った。

妙な話だ。——わざわざ来ておいて、いなくなってしまうなんて。

そっと病室へ入ったつもりだったのに、澄音が目を開いた。

「どうしたの？」

訊かれて韻子は、首を振った。



「何でもないわ。さあ、眠って」

病院での一夜の長いことに、韻子は驚いた。

眠るわけにもいかず、それでいてすることがないので、長く感じるのだとは分っているのだが、それにしても、時間の進み方が、倍ものろくなっているような気がする。

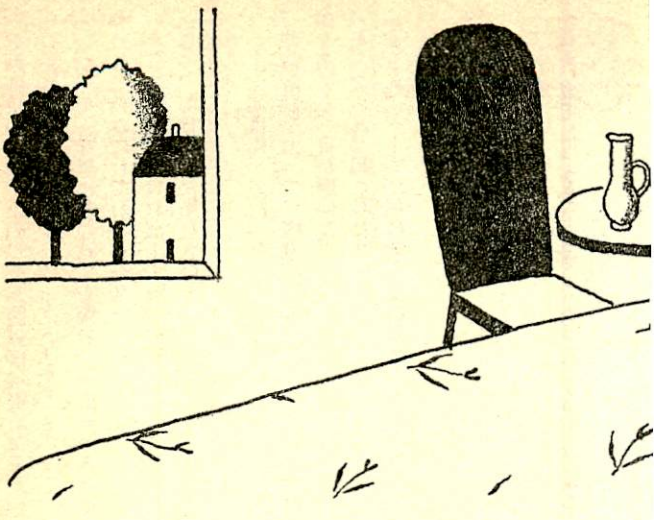
澄音は、また寝入っていた。

韻子は眠気覚ましに、廊下へ出た。〈非常口〉と書かれたドアを開けると、風が吹きつけて来る。

非常階段である。——澄音の病室は三階だったので、街路を見下ろす格好になった。

午前四時を少し回っている。間もなく明るくなって来るだろう。

韻子は大きく深呼吸した。——車の音で、下を見る。車が、ちょうど非常階段の下に停った。こんな時間に……と見ていると、ドアが開いて、見憶えのある人影が、降りて来た。



「上尾先生……」

韻子は、カタカタと足音をたてて、非常階段を降りて行った。その音で、上尾の方も、それと気付いて待っている。

「先生、どうして――」

と、韻子は言った。

「いや、君のお母さんから聞いてね。びっくりしたよ」

「母が、こんな時間にお電話したんですか？」

「いや、もっと前さ。ただ、僕の方が仕事を抱えていて、出られなかったんだ」

それにしても妙な時間だ。しかし、韻子は、もちろんそうは言わなかった。

「どうだね、具合は？」

と、上尾が訊く。

「はい。よく眠っています。安静にしていれば、大したことはないだろう、と――」

「それは良かった。いや、そう聞けば、安心だよ」
「わざわざ、すみません」
「いや、そんな風に言われても困る。一応レッスンは今日まで休みにしておこうか？」
「そうしていただければ……」
「じゃ、明日、また来なさい」
「はい」
——上尾は帰って行った。
非常階段を上って、病室に戻る。——そっと澄音の顔を覗くと、目が開いた。
「あ、ごめん。起こした？」
「ううん。——まだ朝にならないの？　生活のペースが狂っちゃうわ」
「病人が勝手言ってる」
と、韻子は微笑んだ。「今、上尾先生がみえたのよ」
「こんな時間に？」
「ねえ、変でしょう？　どうしたっていうのかしら？」
澄音は、少し間を置いて、言った。
「分ってるじゃないの」
「え？　何が？」
「お母さんとホテルへ行ってたのよ。その帰りにここへ寄った。だから、こんな時間なのよ」
韻子は、顔をこわばらせた。そう言われて、上尾の体に、石ケンが匂っていたことを、思い出したのだ。
澄音も、すっかり目を覚ましてしまったらしいので、韻子は、刑事が、水木とのことを訊きに来た、と話してやった。
「そう」
と、面倒くさそうに肯いて、「来るだろうとは思ったわ」
「別に、疑ってるわけじゃないとは思うけど」
「それはどうかしらね。今のところは、私がなぜ入院したか、たぶん知らないのよ。もし知ったら——」
「でも、お姉さんが人を殺すなんて、馬鹿げてるわ！」

「みんなが私のことを、あんたほど知ってるわけじゃないわ」
と、澄音は笑った。
「だって——まさか、本当にやったわけじゃないんでしょ？」
と、韻子は訊いた。
「さあ、どうかしら」
と、澄音が気をもたせるように言った。「分らないわよ」
いつもながらの姉の言い方に、韻子はホッとした。これが、むきになって否定されたら、却って不安になるだろう。
「でも、一体誰がやったのかしら？」
と、韻子は椅子にかけて、「あんな所で死ぬなんて、ね」
「とんだ恥さらしってとこね。私も用心しなきゃ」
韻子は姉の方へ顔を近づけて、
「お姉さん、そろそろ心を入れかえて、結婚でもしたら？」
「相手を見て、ものを言いなさい」
と、澄音は言い返して、天井を見上げた。「——たまには入院ってのも、いいもんね」
「よしてよ」
韻子が顔をしかめる。
「私が言うのはね、たまには何もしないでいるって、いいことだな、って意味よ。自分が毎日何をやっていたのか、考えちゃうの。——こうして、何もしないで、ただ眠っているだけでも、別に死にはしないで、ちゃんと生きてるわ。ピアノの練習も、お酒も——」
「男も、でしょ」
「姉をからかうもんじゃないわ」
と、澄音は笑った。「ともかく——そういったものが一切ない生活ってものを、今まで想像したこともなかったでしょう？　それがとっても新鮮よ」

病気が新鮮、という姉の見方を、韻子は面白いと思った。

言われてみればそうかもしれない。自分だって、ヴァイオリンを投げ出した生活は考えられないくらいだが、それでも、万一入院でもすれば、そんなことを言っていられなくなる。

「――朝ご飯、何か買って来てよ」

と、澄音が言った。「この病院の食事だけじゃ死んじゃうわ」

「ええ、いいわよ」

「三食、ちゃんと食べるなんて、正に画期的な出来事ね」

と、澄音は微笑んで見せた。

見知らぬ男の影

1

「いいね。とてもいい」
上尾は、レッスンを終えると、言った。
「ありがとうございます」
と、韻子は言った。
「杉本カルテットのオーディションを受ける連中を、僕はみんな知っているが、今のところ君が最高だ。今の調子を持続して行けば、間違いなく採用されるだろう」
「でも、他の方たちも精進されてるわけですし……」
と、韻子は曖昧に言って、「では、失礼します」と頭を下げた。
「——今日もお姉さんの所に寄るの？」
「はい」
玄関まで韻子を送って来て、上尾は、
「具合はどうだね？」
と訊いた。
「もう二、三日で退院できるようです」
韻子は靴をはいた。「当人は、休暇のつもりで楽しんでいるようです」
「そうかもしれないね」
と上尾は微笑んだ。「じゃ、よろしく伝えてくれ。お母さんにも」
「かしこまりました」
韻子は、上尾の家を出ると、いつもホッとした。師としては優れていても、姉が入院しているときに、母をホテルへ連れて行くような男を、人間的に尊敬する

ことはできないのである。
しかし、結果がどうなるにせよ、杉本カルテットのオーディションまでに、あと四日しかない。その先、上尾につく気は、韻子にはなかった……。
母は落胆するかもしれないが、半分は自分の責任なのだから、仕方ない。
姉の入院を機に、韻子の方が、強い抵抗力を身につけたようだった。
実際、病院のベッドに寝ている姉の世話をするのは、楽しかった。どうせなら、もっと入院していてくれたらいいのに、とさえ思っていた……。
もっとも、澄音の方はあまり変った様子でもない。病院には、ボーイフレンドが、韻子の知っている限りでも四人も訪れて来ていたし、やたらに花束が届いて、看護婦が目を丸くしていた。
韻子は、警察のことが気になっていたが、今のところ、刑事がやって来る様子はなかった。
水木を殺した犯人は、まだ捕まってはいない。姉への疑いが晴れないのは、気がかりではあった。
もうすっかり暗くなった道を歩いて行くと、後ろからついて来る足音に気が付いた。
足を早めると、背後の足音は一気に駆け足になって、韻子の前に回った。
「――誰ですか?」
韻子は足を止めて訊いた。
大柄で、どことなく陰険な、危険を感じさせる男だった。一応、背広にネクタイという格好だが、普通の勤め人ではあるまい。
「水城さんだね」
と、男は言った。
韻子は、その男の目を見つめた。
ぎらついた光が、その目を蛇のそれのように見せている。
「水城ですが、どなた?」

と、韻子は訊いた。
「ちょっとあんたのお袋さんに用がある」
と、男は言った。「帰ったら、これを渡してくれ」
男が、上衣の内ポケットから、封筒を取り出して、韻子の方へ差し出した。
「どういうことですか」
韻子は、封筒には手を出さずに言った。「母にご用なら、直接お渡しになれば？」
「そいつはちょっとまずいんでね」
と男はニヤリと笑った。「まあ、預かっといてくれよ」
封筒を韻子の手に押し付けるようにして、男は行ってしまった。——韻子は、その姿が見えなくなるまで、その場に立っていた。
家へ戻ったのは、もう夜中近かった。
母の貞子は、風呂から出てテレビを見ていたが、韻子が、食事も済ませたと言うと、
「じゃ、私も寝るわ」
と、大欠伸をした。「テレビ、消しといて。別に見てたわけじゃないのよ」
韻子はテレビを消すと、
「おやすみ」
と母へ声をかけた。
「あなたも、あんまり遅くならないようにしてね。オーディションは近いんだから」
「分ってるわ」
「じゃ、おやすみ」
貞子はまた欠伸をしながら出て行った。
韻子は、居間のソファにしばらく座っていた。——手紙を見る気になれないのだ。
母へ手渡す前に、目を通しておきたかった。韻子は母が降りて来ないのを確かめた上で、封筒を取り出すと、封を切った。
便せん一枚だった。——文面は至って簡単だった。

〈水木という男が殺された日、あなたがあのホテルから一人で出て来たのを見ました。写真もあります。相談したい〉

乱暴な字で、それが無気味でもあった。

おそらく、あの男の字なのだろう。〈相談〉の〈談〉が、〈話〉になっていた。どういう男なのか。

韻子は、母と上尾の密会を撮った写真のことを思い出した。

あれを送ったのと、同じ男ではないだろうか？——あれは、あれきりで、何事もなく済んでしまったが。〈相談〉というのが何の意味なのか、いくら韻子でも察しがつく。脅迫だ。

浮気ぐらいならまだしも、殺人となると、知らん顔を決め込むわけにもいくまい。

それにしても……。

母が水木と会っていた？——まさか！

たまたまそのホテルへ行っていたのだろうか？

だが、あの時間、上尾は韻子にレッスンをしていたのだ。すると母は他の男とホテルへ入っていたことになる。

もちろん、手紙がでたらめなら、どうでも構わないわけだが……。

手紙の内容に気を取られていて、韻子は、母が居間に入って来たのに気付かなかった。

「ねえ、韻子——」

と声をかけられて、

「キャッ！」

と飛び上りそうになる。「——ああびっくりした！」

「そんなに驚かなくても……。その手紙、どうかしたの？」

「何でもないわ」

と、韻子は言ったが、見られてしまった以上、隠しても仕方ない、と思い直した。

「お母さんあてよ」

と、手紙を差し出す。
「私に？」
貞子は、受け取って、ソファに座った。
さっと目を通して、肩をすくめる。
「馬鹿らしい」
「妙な男の人に手渡されたの」
「どこで？」
「上尾先生の家から帰るとき」
「何か言ってた？」
「別に。これを、ただお母さんに、って」
「放っときなさい。世の中には変な人がいるからね」
貞子は、少しも動揺した様子を見せなかった。
「まさか、本当にあのときホテルにいたわけじゃないんでしょ？」
「やめてよ。いくら私でも、そう趣味は悪くないわよ」
貞子は平然として言った。
「じゃ、どうしてこんな手紙を――」
「誰か、あなたと競ってる人の仕業じゃない？」
「私と？」
「杉本のオーディション。あなたのコンディションを狂わすのが目的で。――たぶんそうよ。上尾先生の家の近くで待ってたっていうのも分るじゃない」
「まさか」
と、韻子は笑い出していた。
いかにも母らしい発想だ、と思った。
「ともかく、こんな物、無視するに限るわ」
貞子は、手紙をあっさりと手の中で丸めると、くずかごへ投げた。「こんなもの、気にしちゃだめよ」
「分ったわ。――お母さん、何の用で降りて来たの？」
「ああ、そうだった。忘れるとこだったわ。澄音のことだけど、いつ退院するか、言ってた？」
「たぶん、あさってじゃない？」
「あさって、ね。分ったわ。聞いとかないと、こっちも予定があるから」

貞子は立ち上ると、「早く休むのよ」
と、居間を出て行った。
韻子は、ゆっくり頭を振った。お母さんにはかなわないわ。
それにしても——水木を殺した犯人が捕まらない限り、こうしたことが続く可能性はある。
何となく重苦しい気分だった。もし母が本当に——。いや、それなら、もう少し驚いた表情を見せるだろうが。

2

次の日、病院へ寄ってみると、澄音は、韻子の知らない男性と話をしていた。
「あら、韻子。早いのね」
「早過ぎた？」
「そうでもないわ。こちら、刑事さんよ」
「まあ」
韻子は、その青年を見た。——およそ、「刑事」というイメージからはほど遠く、せいぜい二十四、五にしか見えなかった。
「どうも、妹さんですね」
「はい」
「南といいます。ちょっとお話をうかがいに——」
「逮捕じゃないそうよ」
澄音の方は、むしろ面白がっている様子だった。
「水木さんを殺した人の手がかりはあったんでしょうか」
と韻子は訊いた。
「それがどうも……。訊き込みに回ってはいるんですが、誰もそうはっきりとあそこへ出入りした客の顔を憶えてるわけじゃありませんのでね」
「それはそうでしょうね」
「ただ、水木さんと打ち合わせていたらしい若い女性

がいたことは分っています。しかし、どんな顔、どんな服装、となると一向に……」

不意に、一つの顔が、韻子の脳裡に浮び上った。——姉に、水木から手を引いてくれるよう伝えてくれと言った娘である。

だが、もちろん、彼女も水木のガールフレンドの一人に過ぎなかったのだろう。

「このままだと迷宮入りのおそれもありますので、今、駆け回っているんですよ」

と、南という刑事は言った。「人の記憶はどんどん薄れて行きますからね」

「頑張って下さい」

と、澄音は呑気に励ましている。

「どうも。——では、また何かあればうかがいます」

南刑事が病室を出て行く。澄音はフフ、と笑って、

「そうにらんじゃ可哀そうよ」

「にらんでないわ。でも、腹が立つじゃない。いつまでもスッキリしなくて」

「迷宮入りなら、それでもいいわ」

と澄音は言った。「自業自得よ、水木君のような男性は。誰か知らないけど、殺した方に、むしろ同情するわね、私は」

韻子は黙っていた。姉に同感、という気持も、ないではなかった。

「明日、退院できそう?」

「もっといたくても、追い出されそうよ」

「変ってるわね、お姉さんは」

と、韻子は苦笑した。

「あの刑事さん、なかなか素敵じゃない?」

「呑気なこと言って!」

「入院してると、男のことぐらいしか考えなくなるわ」

「お母さんのことで、話があるの」

「へえ。何?」

韻子が、あの脅迫状のことを説明すると、澄音は肯いた。
「なるほどね。——本当かもしれないわ」
「まさか！　お母さんが？」
韻子が思わず声を上げる。
「待ってよ。別に、お母さんが水木君を殺したと言ってるわけじゃないわ」
澄音は起き上って、「——ねえ、コーヒーでも飲みに行かない？」
「そんなもの、飲んで大丈夫なの？」
「構やしないわよ」
と、澄音はガウンをはおって韻子の肩を叩いた。
食堂は地下にある。ここも、お世辞にもおいしいとは言えなかった。
「コーヒーもまずいけど、薄いから、ちょうどいいの」
と、澄音は言った。
中途半端な時間のせいか、ほとんど客はいない。若い女の子のウエートレスが、欠伸をしていた。
「——お母さんは、あんたのこと、気にしてたのよ」
「オーディションのことでしょ？」
「水木君のことで、オーディションに集中できなくなるかもしれない、ってね」
「まさか——」
「お母さんにしてみれば、あんたが杉本カルテットに入るのが夢なんだもの。その夢が、今や実現しそうだってわけでしょ。必死にもなるわ」
「私、あの日、彼に久しぶりに会ったのよ」
「お母さんがもし、それを知っていたとしたら——」
「そんなはずないわ」
「水木君を、あんた振ったわけでしょ？　彼の方が腹を立てて、腹立ち紛れに、お母さんへ電話したかもしれないわ」
「水木さんが？」

「やりかねない人よ。プレイボーイのプライドを傷つけられたらね」
「変なプライドね」
「お母さんへ電話して、今、あんたとホテルにいる、とでも言えば、お母さん飛んでったでしょうね」
「行ってみれば、私じゃないことぐらい、すぐ分るじゃないの」
「他の部屋で会ったかもしれないわ。別れてもいいが、金をくれ、とか」
「お母さん、払うと思う？」
「少々の額ならね。——もちろん、こんなのは想像よ」
韻子は、妙な気がした。
姉は至って現実的なタイプである。空想癖は韻子の方の専売特許だった。
どうやら、姉の話には、何か根拠があるらしい。
「で、もし、その脅迫状の送り主から電話があったら……」
と、韻子は言った。
「お母さんがうまくやるわよ」
「でも——」
「あんたが心配することないわ」
と澄音はゆっくりコーヒーを飲み干した。
「そう言われたって……」
「退院したら、私が全部片付けるわ」
澄音の口調は、軽いが、真剣だった。

3

「あら」
校門を出た所で、韻子は足を止めた。
半ば背を向けて立ったまま、その女の子は振り向いて、韻子を見た。——水木から澄音が手を引いてくれるように、と言いに来た娘である。
「こんにちは」

と、韻子が言った。
娘は、無言で会釈をすると、逃げるように歩き出す。
韻子は、少しためらってから、
「待って」
と、声をかけた。「私にご用だったんじゃないの？」
娘は足を止めて、振り向くと、ゆっくり肯いた。
「少しなら時間、あるわ」
と、韻子は言った。
大学構内へ戻って、芝生に腰をおろすと、韻子は、その娘の横顔を眺めた。はっきりとはしないが、前に見たときよりも、やつれているようだ。
無理もない。夢中になっていた水木が、あんな死に方をしたのだから。
「気の毒だったわね、水木さん」
と、韻子は言った。
娘が韻子を見る。目に険しさが消えていた。
「私、大塚修子」
と、娘は名乗った。「この前は、妙なこと言って、ごめんなさい」
「いいえ、構わないのよ」
大塚修子という娘は、少しためらってから、
「お姉さんの具合はいかが？」
と訊いた。
「ありがとう。大したことなくて、今日退院なの。これから病院へ行くところよ。——あ、大丈夫、まだ早いから」
「そう。良かった」
と、大塚修子は言って、指先で草をむしり取りながら、「妊娠したって、本当？」
と言った。
韻子は、迷ったが、結局、隠したところで仕方ないと思った。
「ええ。でも、流産して……。どうせ産む気はなかったのよ」

「あの人の子供？」
「らしいけど……。でも、姉にしてみれば、ちょっとした失敗、ということらしいわ」
「いいわね、そう割り切れたら」
大塚修子の、ため息混りの言い方に、韻子はギクリとした。
「ねえ、もしかして、あなた――」
と韻子が言いかけるのを、
「そんなことない！」
と、強く遮り、すぐに低い声へと落ちて、「いえ――本当は、そうなの」
「何か月？」
「今、四か月」
「大丈夫なの？」
「大丈夫じゃない。堕すなら、もうやらなくちゃ。でも、決心がつかないの」
「だけど……」
彼は死んじゃったんじゃないの、と言いかけて、やめた。それぐらいのことは、この娘だって、考えているに違いないのだ。
「私、産みたいの」
と、大塚修子は言った。
大塚修子は、複雑な表情の韻子を見て、微笑んだ。
「別にロマンチックな気持になってるんじゃないの。妊娠とか、つわりなんて、およそロマンチックじゃないものね」
「そうでしょうね」
「でも――もう四か月にもなった、一つの命のことを考えると、むごい気がして。もちろん、産む方が無責任で、むごいと言われるでしょうけど、それはそれで、私の努力次第で何とかなることでしょ」
「そんなに、あなた、水木さんのことを――」
「そうじゃないの。あの人のことなんか、もう忘れたわ。本当よ。――私の他に、あなたのお姉さんにまで、

あんなことして……。他にも何人かいたのよ。私、うすうす気付いてたわ」

大塚修子は、自嘲的な口調で言って、肩をすくめた。

「あの人の子だから、産みたいんじゃないの。もう、独立した一つの命として、愛着があるのよ」

韻子は、ふと思った。——自分だって、水木の子を宿す可能性があったわけだ。しかし、もしそうなったとして、この娘のように、考えただろうか……。

「でも、大変なことでしょ、一人の人間を、産んで、育てるって」

と、韻子は言った。

「覚悟してるわ。覚悟してるつもり」

大塚修子は、続けて、言った。「私、あの人を殺したかった」

——風が、渡って行く。

構内は静かだった。どこかで、トロンボーンの音がする。音程が悪い、と韻子は思った。

「あの日、ホテルへ呼ばれて行ったの」

と、大塚修子は言った。「あの人に、まだ子供のことは言ってなかったけど、どうも少し察してたみたいで、このところ向うが避けていたわ。だから、ちょうどいい機会だと思って、出かけて行ったの」

「話をしたの？」

「ええ」

「彼は何と？」

「もちろん、堕せって。有無を言わさない感じだった。そして、まず言ったのよ。『金は出せないよ』って。——費用のことを、まず言い出したの。あれが許せなかった」

「それで？」

「私、部屋を飛び出したの。ホテルの出口の所まで来て、足を止めて、また戻ったわ」

「どうして？」

「殺してやろうと思って」

大塚修子は、淡々と話している。それが却って真実らしい重味を感じさせた。

「でも——途中で足が重くなったの。階段に腰をかけて、じっと考えたわ。いえ、何を考えたってわけじゃないけど、ただ、座って、じっとしていたの」

「それからどうしたの？」

「どれくらいそうしていたのかしら。やっと落ち着いて、部屋へ上って行ったの。ドアが少し開いていたわ。そして——彼は死んでいたの」

韻子は、考えながら、言った。

「あなたが階段で考え込んでいる間に、水木さんは殺されたのね」

「そういうことになるわ。私、もうびっくりして……。気が付いたら、外へ出て、タクシーを拾ってたわ」

大塚修子は、むしり取った草を、てのひらにのせて、フッと吹いて飛ばした。

韻子は、少し間を置いて、言った。

「どうして、私にその話をするの？」

「相談があって」

「私に？」

「そう」

「どういうこと？」

「私、脅迫されてるの」

と、大塚修子は言った。

韻子は思わず、えっ、と声を上げた。

「誰かが、私の姿を見ていたらしいの。ホテルを出るところを写真に撮った、っていう匿名の手紙が私あてに……」

これは偶然だろうか？　いや、そんなことはない。母にも、大塚修子にも、そっくりな文面の脅迫状が来ているというのだ。

「——その脅迫状は、どうしろって言ってるの？　お金を払え、って？」

「それはまだ分らないの。また手紙を寄こすとだけあ

って……」

大塚修子は、目を伏せがちにして、「ごめんなさい、あなたにこんなことを相談したりして。——でも、他には話せそうな人を思い付かなくて。この間、あなた、とても優しく私に応対してくれたでしょう。あのとき、とても嬉しかったのよ」

韻子としては、何と言っていいものか、分らなかった。何しろ姉も母も自分も、何らかの意味で、事件の関係者なのだから。

「こんなとき、どうしたらいいのかしら？　警察へ行けば、子供ができていることが両親に分っちゃうだろうし……」

「そうねえ。——私にもよくは分らないけど——写真を撮ったとか言っても、それが同封してあるわけじゃないのね？　それなら、はったりかもしれないわ。差し当りは、無視しておいたら？」

「そうね……」

と、大塚修子は肯いた。「もし、また手紙が来たら——」

「私、姉に相談してみる」

「お姉さんに？」

「あの人は、そういうことに冷静に対処できる人なの。別にあなたのこと、分っても、何とも思わないわよ。大丈夫。——また連絡してちょうだい」

「ありがとう。そう言ってもらうだけで、気が楽になったわ」

大塚修子は立ち上がると、「じゃ、また会えるわね」

「声かけて」

「ええ！　それじゃ——」

と小走りに駆け出す。

「走らない方が——」

と、言いかけた言葉を、韻子は呑み込んだ。

水木の死が、思いもかけず、大きな波紋を広げつつあった。

ネガの顔

1

「何か気になることがあるのかね」
と上尾が言った。
「すみません」
韻子はヴァイオリンをおろして、「ちょっと……」
「演奏に表情がないよ」
「はい」
上尾は、ゆっくりと腰を伸ばした。
レッスンの間は、上尾も固い椅子に座っている。
「もうオーディションは三日後だ」
と上尾は、韻子の肩を抱いた。
韻子はちょっとギクリとしたが、上尾には、特別の気持はないようだ。
「気を付けます」
と、韻子は言った。
「姉さんはどうだね」
「家に帰ったら、とたんにボーイフレンドと出歩いています」
上尾は笑って、
「それなら心配なさそうだね。お母さんも安心してらっしゃるだろう」
韻子は、ヴァイオリンをケースにしまい込んで、ちょっとためらってから、言った。
「姉の恋人が殺されたんです。——ご存知ですか」
「ああ聞いてるよ。同じ大学の男だろう？」
「そうです。母が、そのことで、何か申し上げませんでしたか」

上尾は、ちょっと迷っている風だったが、やがて肩を軽くそびやかして、
「そういえば、そんなことを言ってたよ」
と言った。
「いつ頃のことですか」
「少し前——もう二、三週間にはなるかな……」
すると、母は、かなり前から姉と水木の仲を知っていたことになる。
母は、姉の遊び相手の男などはいちいち問題にもしないだろうが、姉を妊娠させたとなると別である。
ふと、韻子は、姉が本気で水木に恋していたのかもしれない、と思った。
いつも遊びだからといって、時にそれが「本気」にならないとはいえない。妊娠してしまったというのも、姉らしからぬ不注意である。
「——何を考えてるんだね」
上尾に言われて、韻子はハッと我に返った。
「何でもありません。——じゃ、失礼します」
上尾は、玄関まで出て来た。
「何か困ったことでもあれば、相談に乗るけどね」
「ありがとうございます。でも、差し当りはオーディションのことだけで頭が一杯ですから」
韻子は、ピョコンと頭を下げて、上尾の家を飛び出した。
暗くなった道を急ぐ。——予感があった。
韻子の予感は、めったに当ることがない。しかし、今日は別だった。
その男は、電柱の陰から姿を見せた。韻子は足取りを緩めなかった。
男は、韻子が近づくと、咳払いをした。
韻子は、足を止めた。——男が、顔を見せて、「やあ」と言った。
「ご用ですか」
「お袋さんから連絡してくれると思ってたんだがね」

「私、何も知りません」
と韻子は言った。「それに、あなたの手紙には連絡先なんて書いてなかったわ」
「あの後、電話したんだぜ」
「電話？」
「そうさ」
「母に、ですか」
「あぁ」
韻子は、男の話が本当かどうか、探るように相手を見た。
「本当だぜ。お袋さんに訊いてみな」
「そんな必要ないわ」
「そうかな」
男は、思わせぶりに言った。「あんたのお袋さんは、写真を買うよ、きっと」
「そんなものがあれば、の話でしょ」
「あるさ。見るかね」
男は薄笑いを浮かべている。韻子は、ちょっと迷った。
「見てもいいわ」
男は笑った。
「――何がおかしいの！」
「いや、親子だな、と思ってね」
男はニヤつきながら、「お袋さんも、この間の電話のとき、そう言ったぜ、『見てもいいわ』とね」
「で、見せたの？」
「いや、その約束を取りつけようにも、会えなくてね」
「私が見るわ」
「ほう」
男は、ちょっと韻子を見直したように、言った。「そうしてもらうと助かる」
「見せて」
「ここにはないよ。一緒に来てくれれば――」

「じゃ、お断りだわ」
韻子はずんずん歩き出した。男は、ちょっと呆気に取られていたが、少し間を置いて、
「おい！　待てよ！」
と、韻子を追いかけた。「――分った。分ったよ。じゃ、ともかく待っていてくれ。持って来るから」
「どれくらいかかるの？」
「十五分もありゃね」
「じゃ、駅前の喫茶店にいるわ」
韻子はさっさと歩き出した。姉の入院以来、妹の方も、大分しっかり者になって来たようである。
――店は、女の子でにぎわっている。ここなら危いこともあるまい。
韻子は、やたらに甘いパフェをとった。とても脅迫者と話をするムードではない。
男が、本当にやって来るかどうか。――韻子は、思いついて、家へ電話した。
「――あら、韻子」
思った通り姉が出る。
「お姉さん、ちょっと出られる？」

2

韻子が事情を説明すると、澄音は、
「OK、すぐに行くわ」
と、話半ばで言った。「それまで、その男を引き止めといて」
「まだ来てないわ。じゃ、早くね」
韻子は、電話を切って、席に戻った。
結局、待ち呆けに終るかもしれないが、むろんその方がいい。つまり、写真の話が、はったりだと分るからだ。
しかし、その男の話――まるきりでたらめだということが、ありうるだろうか？

それなら、初めから声などかけては来ないのではないか。写真はともかく、あの男は何かを見ていたのではないか。

——三十分、待った。

男はやって来ない。

「やっぱりね……」

と韻子は呟いた。

写真があるなんて、でたらめだったのだ。

店の扉が開いて、澄音が入って来るのが見えた。

「——どうした？」

と息を弾ませている。

「走って来たの？　大丈夫？」

「あんた一人じゃ心細いものね」

「結局むだ足よ。来ないわ」

「なんだ、そうなの」

澄音は、肩をすくめた。「ともかく、ここまで来たんだもの。何か甘い物でも食べて帰ろう」

澄音が、嬉しそうに、チョコレートパフェをつつくのを見て、韻子は、ちょっとびっくりした。

「前はそんなもの食べなかったのに……」

「入院のせいね。病院の食事って、総て薄いでしょ、味が」

「ずいぶん差し入れがあったんじゃないの？」

「そう。人によっちゃウイスキーなんか持って来てね。——でも、今はやたらと甘いものを食べたいの」

韻子は、まじまじと澄音を眺めた。——澄音が気付いて、

「何をじろじろ見てんの？」

「別に、ただ……」

「何よ？」

「お姉さん、変ったな、って……。変ったわよ、入院以来」

「そう？　太ったでしょ」

「無理がなくなったの。自然になったわ」

「そうかしら」
「そうよ。お姉さん、いつも人を見下すようにしてたけど、今は、ごく当り前に振舞ってるわ」
「そうなるのよ。あんな思いをすりゃ、少々のことでは動じなくなるわ」
「やっぱり辛かった？」
「楽しくはなかった」
「ねえ。——本気で好きだったの？」
「誰を？」
「水木君」
「別に」
澄音は目をテーブルの上に落として、「そう……。一時はね。そのとき、できたのよ、子供が」
「じゃ、やっぱり……」
と韻子が言いかけるのを、澄音は遮った。
「でも、子供ができて、却ってふっ切れちゃったの」
「逆ね」
「そう、私らしいでしょ」
韻子は笑った。——姉も笑った。
もう澄音は完全に立ち直っている。

一時間待って、二人は店を出た。
「残念だわ。会いたかったのに、その男」
と、澄音は伸びをした。
「いいじゃないの。これで静かになれば」
韻子はヴァイオリンを持ち直した。「——あら、どうしたのかしら？」
駅の改札口に人だかりがしている。
こんな時間に、混むはずがないのだ。
「——事故なんです」
と、駅員が言った。「その処理が終るまで、電車は動きません」
「どうしたんですか？」
と澄音が訊く。

「飛び込みなんですよ」
「いやだ」
と、韻子は顔をしかめた。
「仕方ないわ。タクシーで帰ろう」
と、澄音が促す。
二人は、タクシーを拾って、帰路についた。
「――そうだ」
韻子は、大塚修子のことを、姉に話した。
「その子なら知ってるわ。じゃ、やっぱり……。産むんだって？」
「そのつもりらしいわ」
「可哀そうに」
「その手紙のことは、気にしなくてよさそうね」
「そう。きっと同じ男よ。どっちにも、写真があるとか言って――」
「その点は安心していいわね」
「子供のことはねえ。――私の口を出すことじゃないわ」
「そうね。でも、大変でしょうね」
「悲劇の主人公になるのは楽よ」
「え？　どういう意味？」
と、韻子は姉の顔を見た。
「別に」
と、澄音は首を振った。
もう、かなり遅い時間になっていた……。

その翌朝、韻子は、一人で起きて、勝手に朝食をとっていた。
テレビを点けて、ニュースの画面の上に出ている時刻へ目をやっていた。
オーディションがいよいよ間近である。
自信はない。しかし、逆に、欲は出て来ていた。
音楽を精一杯やる、その充実感は、水木との恋でも及ばないものだった。――もちろん、恋と音楽が、比

較できるものではないにしても。

ふとテレビの方を見て、コーヒーカップを持った手が止った。事故。——飛び込みか？

ゆうべのあの事故だ。そして、画面に出ている、死者の写真。それは、あの脅迫状を渡して来た男だった。

韻子は立ち上った。

「何ですって？」

と、眠そうな目で、澄音は訊き返して来た。

「ゆうべの男よ！　ほら、あの脅迫状をよこした」

「その男がどうしたって？」

「あの飛び込みよ！　電車に飛び込んで死んだっていう——」

「ああ、昨日のね。それじゃ、飛び込んだのはあの男だったの？」

「そうなのよ。今、テレビに顔写真が出て、びっくりしちゃった」

韻子の言葉に、ベッドの中の澄音は、フーンと肯いて、

「それなら結構じゃない。もう、脅迫される心配もないわけだし……」

アーアと欠伸をして、「もうぐっすりと眠れるわ。おやすみなさい」

と、枕に頭を埋めた。

「気にならないの？」

「——何が？」

「だって——おかしいじゃない」

「大体、世の中は理屈通りには運ばないの。分った？おやすみ」

韻子はため息をついて、肩をすくめた。これじゃ、とてもだめだ。

階下へ降りて、韻子は、もう一杯コーヒーを飲んだ。そんなにのんびりしていられる時間ではないのだが、すぐには頭を切りかえられない性質である。

あの男が死んだ。——写真の顔にびっくりしたので、

名前は聞き洩らしてしまった。きっと新聞にも出ているだろう。

それはともかく、あの男はなぜ自殺などしたのだろうか？

韻子が写真を見せろと要求すると、取って来る、と立ち去ったのだが……。もし、本当は、あれがはったりで、写真など持っていなかったのだとしても、別に死ぬことはないのではないか。

突然、良心の呵責に駆られた、というのもおかしなものだし、どう見ても、ノイローゼ気味で発作的に自殺するタイプとは思えなかった。

まあ、姉の言う通り、人間というものは、時々、他人から見たら全く理解のできない行動に走るものではあるが、それにしても、あの男の場合は唐突に過ぎるような気がする。

しかし——考えてみたところで、仕方ないか、と韻子は思った。

男が死んでいるのは確かなのだし、その原因をあれこれと勝手に想像してみても、どうなるものでもない。たとえ、原因が分かったとしても、同情する気には、全くなれないし……。

「お姉さんの言う通りにしておくか」

と、呟いて、コーヒーを飲み干した。

家を出て、韻子は少し足を早めた。——予定よりも大分、出るのが遅れている。

今日はオーディションのための、下調べの日である。会場になるホールへ出向いて、演奏の順を決めたり、もし希望すれば、試奏することもできるのだ。

3

ホールへ着いたのは、定刻の五分ほど前だった。

慎重派で、いつも早過ぎるほど前に目的地へ着いているので有名な（？）韻子としては、滑り込みセーフ

という感じである。

といって、別に定刻通りに着かないとオーディションが受けられないというわけではなく、もう希望は出してあるので、今日来ない者は、演奏順などを、決められた通りで承知しなくてはならないのだ。

もちろん、参加者によっては、そんなことは一向に気にせず、そんな時間があったら、練習していた方がいい、という者もある。澄音などは、その典型だろう。

しかし、韻子の方はだめだった。一応、手続がある限り、総てやっておかなくては気が済まないのだ。

これは、合格したいという気持のせいではなく、ただ、性格によるものだった。

しかし、やはり、ことオーディションに関しては、韻子と同じタイプが多いとみえて、会場には、もう二十人近くがやって来ていた。

コンクールなどで、何度か顔を合わせている者も見かけた。ずいぶん若い——どう見ても十六、七という女の子もいて、韻子には驚きだった。

「——あら、水城さん」

と声をかけて来たのは、かつて、同じヴァイオリンの教師についていた、同学年の娘だった。

「まあ、久しぶり！」

ちょっとした顔見知り程度でも、女の子同士が、久しぶりに会ったりすると、キャッキャッと大騒ぎするものだが、韻子とて例外ではなく、周囲の人に、冷たい目で見られて、あわてて、口をつぐんだのだった。

「——あなたが出るんじゃ、もうだめだ」

と、娘は言った。

「見え透いたお世辞はよして、お互い、実力のほどはよく知ってるじゃないの」

「最近あなたの演奏、聞いてないからなあ。リサイタルはやってるの？」

「私、合わせ物の方が好きだから」

「ああ、そうね。あなたはその方が合ってるかもしれ

ないわ。カルテットの第二ヴァイオリンなんてピッタリかもね」
「そう思ったら、譲ってよ」
「また。——よく言うわね、全く。でもね、ライバルがいるわよ、あなたにも」
「ライバル？」
「あそこの、赤いワンピースの子、いるでしょ」
と、声を低くする。
「赤い……。あの、若い子？」
「そう。子供に見えるけど、十七歳なのよ」
「へえ。——凄いの？」
「凄いわよ。かけ値なし」
韻子は、改めて、その少女を見直した。
年齢から見ても、少々幼ない。しかし、確かに、どことなく、自信に溢れている。
つまり、オーディションに臨むという、緊張や気負いが感じられないのだ。ただ、怖いもの知らずというだけではないようだった。
その少女が、ふと韻子の方を見た。明らかに、韻子を知っている、という様子だ。
その少女の目に、韻子はちょっとギクリとした。
大体、こういう、オーディションとかコンクールでの出場者同士というのは、あまり目をはっきり見交わすことのないものである。
たまに目が合うと、さっとそらしてしまうとか、でなければ、敵意をこめてにらみ合うとか……。ともかく、あまり友好的でないのが普通だ。
ところが、その少女は、チラリとも、そんな雰囲気を見せず、にっこりと微笑んだのである。
韻子は、ちょっとどぎまぎしてから、笑みを返した。
少女が、ツカツカと韻子の方へやって来た。
「こんにちは」
と、まるで小学生のような、元気のいい挨拶。「水城韻子さんですね」

「ええ」
「私、このオーディションを受ける、宮内好美です」
「どうも……」
「この前のコンクール、聞かせていただきました。すばらしかったわ」
「ありがとう」
「きっと、水城さんが合格すると思います、私」
「ええ？　でも——そんなこと、分らないわ、やってみなくちゃ」
「少なくとも一番有力だと思います」
と、宮内好美というその少女は言った。「でも、私も力一杯やりますから」
「そうね……」
韻子は、自分の方が年上なのに、まるで押されっ放しなのに少々焦って、「しっかりやりましょうね、お互いに」
と、やたら早口になった。
「はい」
と、宮内好美は気持のいい笑みを絶やさずに言った。
「もう、希望は出したの？」
「はい。これから試奏してみようと思って」
「ぜひ聞きたいわ」
「聞いて下さい。嬉しいわ」
少女の言葉に、また韻子はびっくりした。こんなときは、競争相手に聞かれることを、却って嫌うことが多いものだ。
ともかく、この少女は型破りに違いなかった。——韻子が、演奏順の登録を済ませると、
「いいですか、もう？」
と、好美がヴァイオリンを手に、やって来る。
「あなた、私が登録を終るの、待っててくれたの？」
韻子は驚いて訊いた。
「ええ、でも、大した時間じゃありませんもの」
と言って、好美は、さっさとホールへ入って行く。

韻子は呆気に取られていたが、やがて、我に返るとあわてて後からついて行った。

ホールでは、他の出演者が、試奏していた。客席では、他の出演者たちが、思い思いの席に座って、耳を傾けている。——その空気はピンと張りつめていた。

4

三人ほど、かなり年長の女性が続いて、その後が、宮内好美だった。

レッスンにばかり気を取られていた韻子は知らなかったが、この少女のことは、他の出場者たちには知れ渡っていたようで、それまで、小声で話をしていた客席の出場者たちもピタリと話をやめて、その少女に注目していた。

韻子は、椅子がきしんだ音をたてるのを気にしながら、そっと腰をおろした。

好美が韻子の方に、軽く微笑んでみせる。——ピアノの伴奏がないので、みんな適当に無伴奏の曲を選んで奏いている。好美は、ヴァイオリンを顎に当てると、呼吸一つ置かずに、奏き始めた。

パガニーニのカプリースの一曲である。

ヴァイオリンの技巧を極めたような曲だ。韻子の好みではないが、テクニックの面を見るために、たいてい一曲は、これが課題として入る。

冒頭の音が鳴り出した瞬間から、韻子は目を見張った。一つ一つの音が、輝いている。活き活きとして、音の行列に終っていない。

これは、ちょっと桁が違う。

誰しもそう思ったのだろう。ホールの中の誰もが、息を殺して聞き入っている。

韻子にとって驚きだったのは、この少女にとって、人前で奏くことが、少しも緊張の種にならないという点であった。

誰が聞いていようが、そして、大ホールのステージだろうが、外の廊下だろうが、どこでも同じようにのびのびと奏ける、という感じだ。

これは——凄い。本当に、「凄い」としか言えない。天才、というのは、こういう少女のことを言うのだろう。

カプリースは、最後まで、針で突いたほどのミスもなく、終った。大体が短い曲だが、それにしても、アッという間であった。

最後の音が、ビブラートをかけて朗々と鳴ると、好美は、弓を高く掲げた。

拍手が起きた。——こんな席での拍手は、前代未聞である。

これには負けた、とその拍手は言っていた。

「——どうですか？」

と、客席へ降りて来た好美が、韻子へ声をかける。

「すばらしい！　あなたに決ったようなもんよ」

「フフ、油断させようなんて、だめですよ、だ」

と、好美はおどけて見せた。

そんな表情は、どう見ても中学生である。その、純情さが、天才的な技巧を、少しも鼻につかないものにしているのだろう。

「水城さん、奏いて下さい」

と、好美が言い出した。

「いやになっちゃったわ」

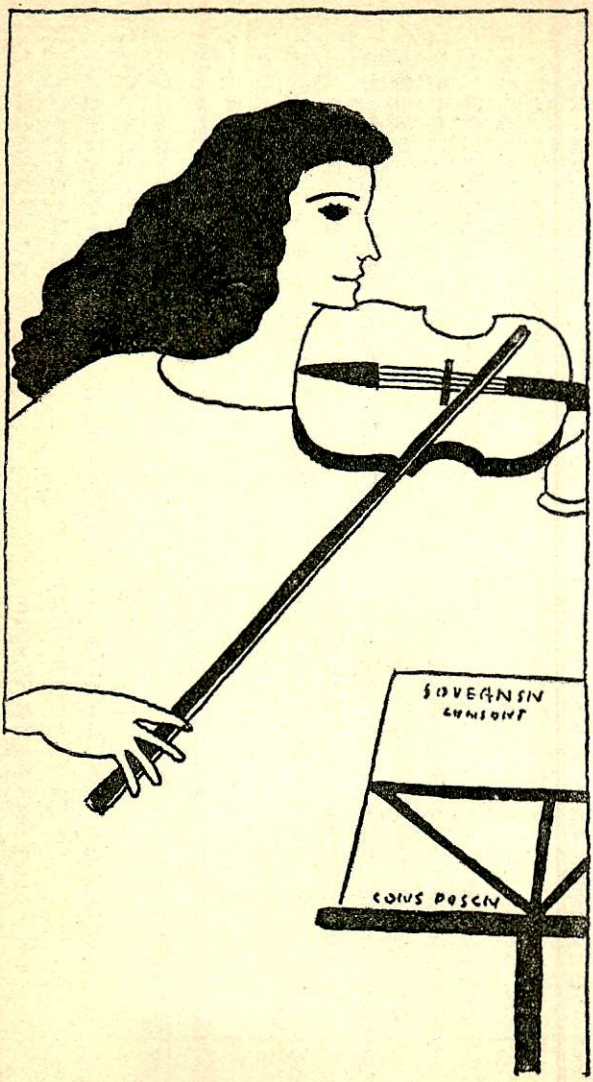
「そんなあ。ずるいですよ」

と、好美がにらむと、韻子も笑って立ち上った。

韻子は、ゆっくりした曲を選んで、奏いた。演奏しながら、客席の様子も分る。これは、上尾の特訓の成果かもしれない。

韻子の目は、ただ、あの天才少女にだけ向けられていた。

「ライバルですって？」



と、母の貞子が言った。
「ライバルとも言えないわ」
と、韻子は夕食をとりながら言った。「とてもかなわない。凄い子よ」
「今から弱音を吐いてちゃ仕方ないじゃないの。もう二日しかないのよ」
——そう。杉本カルテットのオーディションは、あさってに迫っていた。
「宮内好美ねえ……。あんまり聞かない名前だわ」
と、貞子は首をひねった。
自分の知らない者が出場するなんて、許せない、という顔である。
「名前ぐらいは聞いたことあるわ」
と、澄音が言った。「確か、八歳ぐらいから、ヨーロッパに行っていたはずよ」
「そうなの。でも、とっても気持のいい子なのよ」
「そんな、呑気に感心してちゃ勝てないわよ！」
と貞子が不機嫌そうに言った。
「今さら特訓したって遅いわ」
と、当の韻子はのんびりと構えている。
「でも、どうかしらね」
と澄音が言った。「そういう天才肌のタイプの子は、ソロには向いても、合せ物には不向きってこともあるわ。コンクールじゃないんだからね」
「そうよ！」
と貞子も急に威勢が良くなる。「自信を持ちなさい。上尾先生がついてらっしゃるんだからね」
韻子は苦笑した。——あの宮内好美という少女を見ていて、奇妙に心を洗われるような思いだった。
そこには、他人と競おうとする闘志はまるで感じられなくて、ただ、ヴァイオリンを奏くのが好きだという、それだけに没入している爽やかさがあったのだ。
自分に、そんな時期はあったかしら、と韻子は思った。——ただ黙々と、ひたすら練習に明け暮れ、そし

ていつしかコンクールの常連になって……。
そんな自分が、急に虚しく思えて来た。
だからといって、このオーディションを受ける気持が失くなったというわけではない。むしろ、全力でぶつかってみたい、という思いに駆られていた。
あの一人の少女のおかげ、と言えたかもしれない。
「――あら、チャイムだわ」
と、貞子が言った。
「誰か来たみたいね。私、出るわ」
いつになく、腰が軽くなっている。韻子は玄関へ行って、
「どなたですか」
とインタホンで訊いた。
「警察の者ですが」
急に冷水を浴びせられたような気がした。別に何でもないことなのかもしれないが……。
ドアを開けて、
「あら」
と韻子は言った。
澄音の病室で会った、南という刑事である。
「――お邪魔して申し訳ありません」
と、南刑事は、居間へ上ると、言った。
「何のご用でしょう」
と、貞子は、あからさまに迷惑顔をしている。「娘は、大切なオーディションを控えておりまして、精神的な動揺は当然、演奏の出来にも響きますし――」
「お母さんたら」
と、韻子があわてて抑えた。
「実は――」
と南刑事は手帳をゆっくりと開きながら言った。「吉田という男をご存知ですか。吉田雅吉」
「吉田さんという方なら、色々知り合いにもおられますけれど」
「吉田雅吉。――ちょっとたちの悪い男でして、警察

からにらまれていたのです」
「そんな人なんか、知っているはずがありませんわ」
と、貞子は言った。
「『にらまれていた』とおっしゃいましたね」
と澄音が言った。「それはつまり……」
「ええ、死んだのです」
と、南は肯いた。「電車にひかれて。ホームから誤って落ちたらしい、ということなのですが」
あの男だ。——脅迫者。
吉田というのか。韻子は初めて名前を知った。
「それが私どもに何の関係が？」
「実は、吉田の遺品を調べてみると、写真のネガが出て来たのです」
と南は言った。「検死に立ち会った警官が、焼き付けてみると、どうやら隠し撮りらしい写真で……」
南はポケットから、三枚の写真を取り出し、テーブルに並べた。
水木が殺されたホテルの前である。中から出て来る姿を捉えられているのは——母の貞子だった。
「警官は、このホテルの名前に聞き憶えがあったので、調べてみて、例の水木という若者が殺された現場だと分ったので、私の方へ回して来たのです」
韻子は、素早く姉の方を見た。澄音は、退屈そうな顔をしている。しかし、内心、やや動揺していることは、指が小刻みに動いているので分る。
興奮しているときの、澄音のくせなのである。
「——それで、どうだとおっしゃるんですの？」
全く、動揺した様子もないのが貞子だった。「私、このホテルを利用したことはありますわ。——主人はずっと海外なので、何度か他の男性とお付き合いしていますから。感心したことではないでしょうが、警察の方に咎め立てされる筋のことではないと思います」
「それはおっしゃる通りです」
南はやや押され気味の様子で、「ただ——殺された

水木さんは、お嬢さんの恋人だったわけで、その同じホテルに、母親が――」

「いけませんか」

と、貞子は訊き返した。

幸福な破局

1

真夜中だった。

もう長いこと、韻子は黙って座り込んだままだった。

「どうなの？」

と、韻子は言った。

その一言が、一時間も出て来なかったのである。

「何が」

貞子はくたびれたように言った。

「まさかお母さんが――」

「私が？――私がね」

頭から否定するだろうという韻子の予想に反して、貞子は、ちょっと投げやりな微笑を浮かべて、言った。

「そうね……。やったかもしれないね」

「じゃ、本当に？」

韻子は、全身が、冷たい空気に触れたようにスッと冷えて行くのを感じた。

「違うわよ。やっちゃいない」

と、貞子は首を振った。「でもね――憎かったわよ。あの男が。あんたも、澄音まで、あんな風に――」

「あの日、ホテルに……」

「電話がかかってね、話がある、って」

「水木さんから？」

「お金の話よ。私が、あなたたちに、夢をかけているのを知ってるものだから、金を寄こせば別れてやる、と……。とんでもない二枚目だわ」

「行ったの？」

「行ったわ」

「それで？　何があったの？」
「何も」
「何も、って？」
「何も、よ」
貞子は肩をすくめた。「あの男は、もう死んでたんだからね」
「殺されて？」
「もちろんよ。そりゃ、私だって、あなたたちを音楽家に育てるために、どんな犠牲だって払う覚悟はあるわ。——上尾先生とだってね。もう韻子も知っている通りよ」
貞子は、娘から目をそらさずに言った。「だけど——人を殺すなんて！　そんなことをすれば、あなた方が音楽家になる可能性まで潰すことになるわ。そんなことは決してしませんよ」
それはそうかもしれない……と韻子は思った。人の命を奪うのが悪いことだから、という理屈でなく、娘たちの将来だけが理由だというのが、母らしいところである。
「じゃ、警察の人にそう言えば良かったのに」
「とんでもない！」
貞子は強く首を振った。「そんな容疑を受けただけで、大変な傷になるわ。——大丈夫。あっちだって、あの写真が何月何日にとったものか、立証できないわ」
なるほど、それは母の言う通りだと韻子は思った。同じホテルを母が利用していたといっても、それが水木を殺した証拠にはならない。
「あなたたちが心配することはないのよ」
と貞子は言った。
「そう言われてもね」
と、韻子が苦笑しながら言った。
「もう寝ましょうよ」
澄音が立ち上った。「先にお風呂に入るわ。このと

ころ早寝早起きのいい子になっちゃったんだから」
韻子は、姉がいつになく、黙り込んでいたことに気付いていた。いつもなら、こんなはずはないのだが。
「じゃ、部屋へ行ってる」
韻子も、立ち上った。
「おやすみ」
貞子は欠伸をした。「――あの変な刑事のおかげで、テレビ、見そこなっちゃったわ」
韻子は、二階へ上った。
もう、このまま寝てしまいたい、と思った。ベッドにゴロリと横になると、本当に眠り込んでしまいそうだ。
ウトウトしていると、姉が覗き込んでいるのに気付いて、ギョッとした。
「――ああ、びっくりした」
「お風呂ぐらい入ってらっしゃい」
もう澄音はネグリジェ姿だった。
「もう入ったの？　じゃ、私、少し眠ってたのかな」
澄音は、椅子を引いて来て座った。
「お母さんの言うこと、本当だと思う？」
「分らないわ。でも――まさか人殺しだなんて」
「でも、誰かが殺したのよ」
「そりゃ分ってるけど……」
「母と娘二人。みんなが動機を持ってるなんて」
と言って、澄音はフフ、と笑った。「凄い家族ね、うちも」
そう、そうかもしれない。私たちは中にいるから分らないけれど、はた目には、異様な一家なのかもしれない。
「あの女の子――大塚修子もホテルへ行ってたわ。お母さんも。じゃ、他にも誰かが？」
「さあね」
と、澄音は肩をすくめた。
「それとも、どっちかが嘘をついてるのかしら？」

「可能性なら、いくらでも考えられるわ。私だって、ホテルへ行っていたかもしれないしね」
「まさか！」
「可能性よ。あなたは上尾先生の所にいたわけだけど」
「そう。——でも上尾先生が母の愛人で、口裏を合わせてくれた、としたら……」
「警察なら、そう考えるかもね」
韻子は、またベッドに横になった。
「刑務所はもっと寝心地が悪いのかな」
「やめなさいよ」
澄音は笑って立ち上った。「あの男のことなんか、誰も気にしやしないわ。その内、迷宮入りになって終りよ。それが一番なんだわ」
「そうね」
「おやすみ。——本当に早く寝る癖がついちゃった」
姉が出て行く。

韻子は、ベッドに起き上ると、しばらく動かなかった。——何もかも、煩しいような気がした。
どうしてこんなことになってしまったんだろう？
韻子は、ベッドに入って、考えた。——眠いはずなのに、寝つけない。
部屋の暗さが、自分の上にのしかかって来るような気がした。息苦しいような圧迫感……。
水木が死んだ。それだけは、確かなことである。それが誰のやったことなのかは別にしても。
水木自身、殺されても仕方のないようなところがあった。一度は夢中になった相手のことを、そんな風に考えるのは辛かったが、事実ならば仕方ない。
ただ、間接的に、水木の死に自分も責任があったことを韻子は考えていた。
あのとき、自分がホテルへ誘うようなことをしなければ、水木は殺されずに済んだかもしれないのだ。
そのせいで母にまで疑いがかかる。

ああ、もう考えないようにしよう！

韻子は寝返りを打って、目を閉じた。しかし、眠りはいつまでもやって来ない。

あさっては、オーディションである。

明日は、上尾のレッスンもない。もう、今さらやるべきこともなくなったのだ。後は本番にフルに力を発揮できるように頑張るしかない。

こんなことで寝不足になっては、オーディションにも差し支える。

眠らなくちゃ。さあ、眠って……。

遠くに、電車の音が聞こえた。——いつもはこんな所まで届かないのだが、こうして静かな深夜には、響いて来ることがある。

やっと少し眠りかけた韻子の脳裏に、車の車輪が浮んだ。走って来る電車。

その前へ落ちる人影。——あの脅迫者だ。そこへ突っ込んで来る電車。

急ブレーキの音、火花。人々の騒ぐ声、悲鳴。

脅迫者は死んだ。——そう、あの男だって自業自得。死んで当り前なのだ。だから……。

韻子は目を開いた。

「まさか」

と呟く。

まさか。あの男まで殺されたなんてことがあるだろうか？

もしそうなら、警察が調べているだろう。殺された？　誰があんな男を殺すだろう。

それは——もちろん脅迫されている人間だ。

韻子はベッドに起き上った。

あのとき、姉は、あの駅からやって来たはずだ。姉が、脅迫者の顔を知っていたとしたら？

脅迫者を見かけて、殺意を抱いたとしたら。混雑したホーム。ちょっと押してやるだけで事は済む。

男の背中を、軽く突く。——そして、何食わぬ顔で、

韻子の待つ喫茶店に現われる。

馬鹿なことが——そんなことが——あるはずはない！

韻子は、ベッドに突っ伏すようにして、枕に顔を埋めた。眠りは、なかなか訪れなかった……。

2

翌朝、韻子は、重い頭で起きて来た。——もう、十一時になっている。

「これじゃ、明日は絶望的ね」

と、韻子は呟いた。

母も姉も、もう家にいなかった。どこへ出かけたのか……。

何か一言、言ってくれたっていいのにと、韻子は内心、愚痴を言った。

自分でコーヒーを淹れ、ダイニングで飲んでいると、玄関でチャイムが鳴った。

「はーい」

この時間は、たいていクリーニングか、でなければセールスマンか銀行員か……。

「どなたですか」

と、玄関のサンダルをつっかけながら訊く。

「南ですが」

この一声で、目が覚めた。もっとも、気持のいい覚め方ではないが。

「——度々すみません」

と、南は韻子へ、申し訳なさそうに言った。

「いいえ。上られますか」

「いや、ここで結構ですよ」

と、南は言って、家の中を覗き込むようにした。「他の方は——」

「母も姉も出かけているんです」

「そうですか」

「私ではいけません？」
「いや、そういうわけでは……」
南は、少しためらっていた。「実は――昨夜、お話した吉田という男のことなんですが……」
「電車にひかれたという人のことですね」
「ええ。実は、突き落とされたらしいのです」
韻子は、ギクリとした。その動揺を、表に出すまいとして、それは何とか成功したらしい。
「じゃ、殺されたということですか？」
「ええ。目撃者が出て来ましてね」
「目撃者……」
「結構ホームは混んでいたんですが、みんな他の人間のことなんか気にもしていないようで、わずかに一人だけ、見たという人がいたんです」
「犯人は分かったんですか」
と、韻子は訊いた。
「若い女だった、というんですが」
若い女。――やはり、姉がやったのだ。そうに違いない、と韻子は思った。
「でも、その人もチラリとしか見ていないんですよ。若い、というのも印象を言っているだけでしてね。はっきりと顔を見ているわけじゃないんですよ」
「そうですか。で――母か姉に、疑いが？　それとも、私ですか」
「いや、そういうわけじゃないのです。ただ一応、昨夜、その時間に、お姉さんとお母さんが、どこにおられたか、知りたいんですよ」
果して、南がどこまで本音を言っているのか、韻子には見当もつかなかった。
しかし、母も姉も、疑われてもおかしくない立場ではあるのだ。
「母と姉が戻りましたら、その件を話して、連絡させますわ」
「そうして下さい」

南刑事は、むしろホッとした様子だった。「別に容疑がどうこうというわけじゃないんです。気楽に考えて下さい」

韻子は、ちょっと苦笑した。

「気楽に、っておっしゃられても……」

「無理でしょうね」

南も、微笑した。「――お宅のお母さんはちょっとおっかないですからね」

「まあ、母にそう伝えますわ」

「いや、やめて下さい！　名誉毀損で訴えられるかもしれない」

南は急いでそう言うと、「じゃ、今日のところは、これで――」

と、頭を下げて帰ってしまった。

韻子はドアを閉め、鍵をかけ、チェーンをかけた。

何もかも、締め出してしまいたかった。何もかも……。

居間に戻り、ぼんやりとソファに座っている内に、時間は過ぎて行った。

姉や母が、逮捕され、刑務所へ入れられるなど、想像することもできない。そんなことが、自分の身に起るとは、考えてもいなかったのである。

誰でも、そんなものだろう。――新聞の社会面を眺めて、

「可哀そうに」

「運が悪いのね」

などと、無責任にしゃべっている。

まさか、自分がそんな立場に置かれることがあるなど、考えてもみないのだ。

だが、今の自分たちは、正に事件の渦中にいる。韻子のことも、警察が、水木との関係を知れば、追及して来ることは分り切っていた。

母はきっと、警察に食ってかかるだろう。

「オーディションが終ってからにしてちょうだい！」

と……。

水木のことがなかったら——彼がもし、この家の生活に割り込んで来なかったら、どうなっていただろうか？

おそらく、音楽一筋で、わき目もふらずに突っ走っていただろう。その意味では、水木と、その死が、この家に現実の風を吹き込んだのだ。

しかし、韻子自身、この家の中から出て行くことは、できない。ここで生れ、育ったというだけでなく、外へ出たら、まるで子供のように、何もできないのだ。

母と姉と三人。——結局、切れることのない絆で、縛り合わされている。

もし、誰かが逮捕されることにでもなれば、三人とも、失われてしまう。三人は、そう生れついているのだ……。

韻子は、立ち上って、庭を眺めた。そこはもう外だ。明るい陽が踊っている。人工の照明の下で生きて来た韻子には、自然の太陽はまぶし過ぎる。

刑務所にも、陽の当る所はあるのだろうか、と韻子は思った。

電話が鳴る。母か。姉か。——受話器を上げると、押し殺したような声がした。

「もしもし。——韻子さんですか」

大塚修子だった。

「大塚さんね」

韻子は言った。「私、韻子よ」

「良かった！」

大塚修子の声は、電話を通しても、どこか張りつめたものを感じさせた。

「どうしたの？」

「実は——お願いがあって。会っていただけるかしら」

普通の声になると、いやに近く聞こえる。

「あなた、どこから電話してるの？」

と韻子は訊いた。
「あの……駅の前の喫茶店。〈マリエル〉という名の……」
「え？　じゃ、うちの近くへ来てるの？　それじゃ、うちへいらっしゃいよ。今、私一人だから」
「道をよく憶えていないの。この前行ったときは夜だったでしょ。感じが全然違うんだもの」
「分ったわ。じゃ、そこにいて。すぐ行くから」
と韻子は言った。

事情はすぐに察しがついた。
大塚修子は、奥の席に座って、疲れたように目を閉じている。その傍に、ボストンバッグが置かれていた。
「――大塚さん」
と韻子が声をかける。
「あ、ごめんなさい。つい、ウトウトして――」
大塚修子は目をこすった。
「疲れてるのね。――ちょっと、コーヒー下さい！」
よく来る喫茶店である。
「明日、オーディションなんでしょ」
と、大塚修子は言った。「こんなときに邪魔してごめんなさい」
「別にいいのよ」
と、韻子は首を振った。「ゆうべ、眠ってないんじゃないの？」
大塚修子はちょっとためらってから、肯いた。
「お家を出て来たのね」
大塚修子は目を伏せた。――コーヒーが来た。韻子はミルクをたっぷり入れた。
「分っちゃったの、お家の人に？」
「ええ……。母はもう気が狂ったようになって。とっても堪えられなかった」
「子供を堕せって？」
「もちろんよ。それに、父が帰ってから、また大変だ

ったの。私のことを心配するんじゃなくて『世間に顔向けが』とか、『体面というものがある』とか……。要するに、世間態しか気にしていないのよ」

娘のことを案じていないのではあるまいが、その年代の大人たちにとっては、見っともなくない生活こそが、一番大切なのかもしれない。

そういう親と比べれば、うちの母は、ずいぶんユニークだろう、と韻子は思った。

大塚修子は、テーブルに両手をついた。

「私、行く所がないの。お願い！　今夜だけでもいいわ。あなたの所に置いてちょうだい！」

「そんな……。手をついたりしないでよ」

と、韻子は急いで言った。

「私……何としてもこの子を産むわ。どうしても産みたいの」

そう言う大塚修子の目は、燃えるような光を帯びていた。

果たして、それが彼女にとっていいことなのかどうか、韻子には何とも言えなかった。しかし、ともかく今、大塚修子を突き放してしまうことは、最悪の結果しか生まないことだけは確かである。

落ち着いて考えれば、また彼女の考えも変って来るかもしれない。

「分ったわ」

と、韻子は言った。「ともかく家へ行きましょう」

「ありがとう！」

と、大塚修子は、涙を流さんばかりにして言うと、ボストンバッグを手に取った。

「待って。コーヒーだけは飲ませてよ」

韻子の言葉に、大塚修子は、やっと頬を緩めて、笑顔を見せた。

韻子が、大塚修子を連れて帰ったときは、まだ母も姉も戻って来ていなかった。

居間のソファに座らせて、お茶でも出そうと台所へ立ち、妊娠中だから、コーヒーや紅茶は避けた方がいいのかしら、と思い付く。居間へ戻ってみると、修子は、ソファに横になって眠っていた。

よほど疲れていたと見える。——韻子は、自分の部屋から毛布を取って来ると、上にかけてやった。

玄関に物音がする。出てみると、澄音が帰って来たところだった。

「どこに行ってたの？」

「買物よ。——あら、誰かお客？」

澄音は、玄関の靴に目を止めて、言った。

「ちょっと、ね……」

韻子は、曖昧に言った。

「誰なの？……まあ」

居間へ入って、澄音は、ソファに寝ている大塚修子を見ると、目を見開いた。

「この子よ。あの——」

「知ってるわ。写真を見たことがあるの」

澄音は、ボストンバッグを見ると、察した様子で、

「可哀そうに」

と呟いた。

「今夜だけでも、置いてくれって」

「構わないじゃない。——まだ、堕していないの？」

「産む気らしいわよ」

「そう」

澄音は、静かに寝息をたてている修子を、じっと見下ろすと、「やめとけばいいのに」

と、首を振った。

「——私、部屋で練習してるわ」

「ああ、そうか。忘れてたわ。明日だったっけね」

「家族がそういう態度じゃね」

と、韻子がわざとふくれて見せると、澄音は軽く笑って、それから、

「起こしちゃあ可哀そうだわ。行きましょう」

と、韻子を促した。

3

韻子は軽く息をついて、手を休めた。
ヴァイオリンをおろして、ハンカチで額の汗を拭った。
明日がオーディションである。いわば「秒読み」に入っているわけだ。
しかし、何となく妙な気持だった。いやにのんびりしているのだ。
「――失礼」
ドアが開いて、澄音が顔を出した。「入っていいの？」
「何よ、お姉さんらしくもない。いつもは、だめ、と言っても入って来るくせに」
「私だって、いつもそんな風じゃないわ」
澄音は、肩でドアを押して開けると、「はい、紅茶を淹れて来てあげたわよ」
と、盆を持ち上げて見せた。
「ええ？　どうしたの、気持悪い！」
「何よ、その言い草は」
と澄音は笑いながら言った。「大丈夫。紅茶にはちゃんと青酸カリが入ってるから」
韻子は笑って、盆の紅茶を取った。
「――どういう風の吹き回し？」
「暇なのよ。退屈だから、ちょっと思い立って」
何となく姉は変った、と韻子は思った。どこ、と言える変化ではないが、確かに変った。
「どうなの、調子は？」
「うん。――変なのよ、何だか」
「色々あったものね」
「いえ、そうじゃないの」
と、韻子は首を振った。「いつもなら、明日が本番

っていう日は、カリカリしてるでしょ。いくら慣れても、人と口をききたくない、とかね。でも、今度は違うの。凄く気が楽なのよ。何だかこう——圧迫感が、まるでないの」

「ふーん」

澄音は肯いて、「あんた、成長したのよ、きっと」と言った。

「成長？」

「恋もしたし、家出もしたし、あれこれあったものね。人生が音楽ばかりじゃないってことが分ったんでしょ」

「そうかな」

そうかもしれない、と韻子は思った。

人生はドレミファだけで、成り立ってはいない。

——といって、音楽がつまらないものに思えたわけではなかった。

むしろ、奏くことが楽しかった。明日のオーディションが、楽しみに思えた。

「あんたの方が、ずっと音楽家に向いてるのかもしれないわ」

と、澄音が言った。

「どうして？」

「私は——もう、やる気がなくなっちゃったわ」

澄音は、投げ出すように言った。韻子は、姉を見つめた。

「疲れてるのよ、お姉さん」

「そうね、もう何だか中年になったみたい」

澄音は、韻子を見た。「私ね——」

「ん？」

「結婚しようと思ってるの」

韻子は、唖然として、澄音を見つめた。

「何よ、その目つき」

と、澄音が、ちょっと照れくさそうに言った。

「結婚？——お姉さんが？」

「いけない？」
「そうじゃなくて……。でも、急にそんなこと言い出すなんて」
「大体こういったことって急に決るもんじゃない？」
「だけど――誰と？　相手はいるんでしょうね」
「当り前でしょ、馬鹿ね」
澄音は笑いながら、「あんたの知らない人よ」
と言った。
「誰？」
「大学の同窓で、山本君っていうの。――さんざん振ってやったんだけど、こりずに求婚して来るのよね」
「いつ決めたの？」
「入院してるとき。どこで聞いて来たのか、見舞いに来てね。何だか、あっちの方がよっぽど病人みたいだったわ、青くなってて」
「その人は、お姉さんが入院したのを――」
「話してやったのよ。流産したんだって。それを聞けば諦めると思ってね。ところが……」
「そうじゃなかったの？」
「何だか雨に降られた小犬みたいな哀しい目をしてね。『そんなことなら、僕の子供だってことにしてくれても良かったのに』ですって！」
澄音は頭を振って、「まあ、何てお人良しなんだろう、と思ったわ」
韻子は肯いた。
「で、お姉さん、その優しさに打たれた、ってわけね」
「詩的に言えばそうかな。散文的に言えば、『あ、こいつと結婚しとけば、少々勝手なことをしても大丈夫だ』って思ったわけ」
韻子は笑い出した。――やっと、姉の言葉を信じる気持になった。
「おめでとう、お姉さん！」
「やめてよ、照れるじゃないの」

と澄音は肩をすくめた。
「お母さんは知ってるの？」
「知ってりゃ、こんなに家の中が静かなわけ、ないでしょ」
「そうか。きっと大変よ」
「いいわ、別に許可の必要な年齢でもないし」
「こっちに八つ当りされるの、やあよ」
「姉のために辛抱しなさい」
「ずっと辛抱しっ放しよ」
「言ったな、こいつ！」
と、澄音は拳で軽く韻子の頭をコツン、とやった。
二人は大笑いした。——何だか、ずっと昔の、子供の頃に戻ったようだった。
「音楽の方は？」
と韻子は訊いた。
「やめるわ。まあ、亭主の稼ぎが悪くて、遊ぶ金に困るようなら、近所のガキどもにピアノでも教えるわよ」
と澄音は言った。
「そんなこと——もったいないじゃない」
と、韻子は言った。「お姉さんの方が、ずっと才能があるのに」
「才能ね」
澄音は首を振った。「ただ指が回るのを才能と呼んでるだけよ。私には情熱がないわ。音楽への愛情もね。もう、これが自分の限界だと悟ったの」
姉の心はもう決まっている。
韻子は、少し寂しい気持がしたが、そう認めざるを得なかった。
ヒョイとドアが開いて母が顔を出す。
「あ、お帰りなさい」
「ただいま」
と、貞子は言って、「下の居間で寝てるのは誰？」
と訊いた。

「あ、そうだ、忘れてた」
韻子は立ち上って、「まだ寝てるの、彼女？」
と言った。
「困るのよ、明日は大切な日なんですからね！」
と、貞子はしかめっつらをした。
「すみません」
と、大塚修子は頭を下げる。
「いいじゃないの」
と、澄音が取りなすように、「私だって、別に構わないし、韻子もいいって言ってるんだもの」
「だけど――」
「お願い、お母さん」
と、韻子は言った。「今夜は泊めてあげて。もう夜なんだし、今さら――」
「ホテルは開いてるわよ」
「どうせお父さんの部屋がそのままだし」
と澄音は言った。「いいじゃない、お互い、水木君と縁がないわけじゃないんだから」
貞子は、渋い顔で、
「じゃ――今夜だけですよ」と言った。
「ありがとうございます」と、修子は頭を下げた。
「夕食は、何か取りましょうね」
と貞子は立って行ってしまった。
「気にしないで」
と、澄音が言った。「じゃ、何か出前でも。お寿司でいいかしら？」
「あの――」
と修子はためらって「あまり辛いものは、ちょっと」
と低い声で言った。
「あ、そうか」
澄音が肯いて、「じゃ、おそばか何か？――韻子、あんたは？」

「私が、電話するわ」
と、韻子は立ち上った。
澄音は、じっと修子を見つめていた。
「あなた——産むつもり？」
修子は肯いて、
「ええ」
「そう。——じゃ、しっかりやってね」
と、澄音は言った。

その日……

1

「韻子、仕度は？」
と、貞子が顔を出す。
「見れば分るでしょ」
韻子は、白いドレスを着ながら、答えた。
「呑気なこと言って！——早くしないと、オーディションに遅れるわよ」
「私の出はずっと後の方よ」
「最初から聞かなきゃ。同じ曲の解釈だって、似たような人がいたら、考え直さなくちゃいけないし——」
「分ってるわよ」
「早くしてよ！」
——貞子一人が忙しがっている、という様子だった。
髪をとかし、仕度を終えると、韻子はヴァイオリンを取り上げた。調弦して、鳴らしてみる。
良く鳴る、と思った。珍しいことだ。
たいてい、コンクールの本選の日とか、本番の日には、まるで鳴ってくれないものである。神経のせいかもしれない。
しかし、今日は違っていた。のんびりしている。投げている、というわけではなかった。気が楽だったのだ。
あの少女の方が、腕は上だ。たぶん、自分はその次あたりか。
後は、やってみるしかない。
「——やあ、どう？」
と、澄音が顔を出す。

「まあまあ」
「あんた、きっと合格するわよ」
「そう？」
「いい顔してるもの」
韻子は、ちょっと笑って、
「顔で決めてくれりゃ、楽なんだけどね」
と言った。「お母さんには？」
「まだよ」
「そうね、今日、終ってからの方が、いいわね」
「あんたが合格してくれると、こっちの話がしやすくなるんだけどね」
「そう巧く行かないわ」
「ともかく頑張って」
「うん」
韻子は、ヴァイオリンをケースへしまった。——居間へ降りて行くと、貞子が、もう今にも飛び出そうという格好。
「もうとっくに車が来てるわよ」
と、韻子をせかして、「さ、早く出かけるのよ」
「コーヒーの一杯ぐらい、飲ませてよ」
「あっちで飲みなさい！　じゃ、澄音、頼んだわよ」
「はいはい、行ってらっしゃい」
と、澄音も玄関まで出て来る。
韻子は靴をはきながら、ふと見慣れない靴に目を止めた。
そうか、大塚修子が、ゆうべ泊ったんだ。すっかり忘れていた。
「さ、行くわよ」
貞子の方も、招かれざる客のことは、ケロリと忘れているらしい。
「落ち着くのよ。落ち着いてね」
と、貞子はタクシーの中で言った。
「私は落ち着いてるわよ」
と、韻子が苦笑した。「お母さんの方が、よっぽど

あがってるじゃないの」
「ヴァイオリンは？」
「ここにあるじゃない」
と、韻子は膝の上のケースを叩いた。
「中に入ってる？　空じゃない？」
「持てば分るわよ、それぐらい。何年やってると思ってるの？」
「そうね」
貞子は肩をすくめた。「あなた、いやに落ち着いてるじゃないの」
「もう馴れっこだもの」
「それにしたって……」
と貞子は、何だか改めて韻子を見直したように、「何かあったの？　ちょっと変ったわね」
母の方が変らないのだ、と韻子は思った。あれだけ色々なことがあって、変らない人なんて、うちのお母さんぐらいのものじゃないかしら。
母は母なりに大した人だ。
「それより、お姉さんが、変ったと思わない？」
と、韻子は言ってみた。
「澄音が？　そうかしら」
貞子は、呑気なものである。「あの子はいつもマイペースだからね。私があれこれ言ったって仕方ないわよ」
あれこれ言いたくなるわよ、きっと、韻子は思った。結婚すると知ったらね。
「――これであんたが杉本カルテットに入ったら、母さんも腰を据えて、澄音の方にかかれるんだけどね」
残念でした。お姉さんはもう家庭に入っちゃうのよ、と韻子は心の中で呟いた。
母を失望させるのは、可哀そうな気がした。しかし、人生は、たとえ自分の人生でも設計図の通りにはいかないものだ。ましてや、自分の子供の人生が、百パーセント思い通りに行くなんて、期待する方が虫が良す

ぎるというものだろう。

大体、人生なんて、夢の半分——いや、三分の一だって、実現するのはむずかしい。今日、もし私が合格したら——と韻子は思った——それだけでも、母は幸運なんだと言えるだろう。たとえ姉が期待を裏切ったとしても。

もっとも、当人はそうは思わないで、我が身の不幸を嘆くかもしれないが。

——韻子は、勝ちたい、と思った。

こんなことは初めてだ。勝ちたい。こんな気持になったことはない。

自分のためでなく、母のためでもなく姉のために勝ちたかった。今日、勝てば姉の結婚に母はそう落胆することはあるまい。姉も、心おきなく、結婚することができるだろう。

どうして、こんなに姉のことを気にするのだろう、と韻子は思った。

姉には、ずいぶんひどい目に遭わされて来たはずなのに、今、そんな過去は、ずっと昔のことになってしまっている。

「お母さん」

と、韻子は言った。

「なあに？」

貞子は心配そうに、「気分でも悪いの？」

と訊いた。

「違うわよ」

と韻子は首を振る。「お願いがあるの」

「言ってごらんなさい」

「あるお願いを聞いてほしいの」

「どういうお願いなの？」

「今は言えないわ。でも、そのお願いを叶えてくれるって、約束して」

「そんな無茶な話がありますか」

「だから、もし私が今日、合格したら、よ」

貞子が、ちょっとびっくりしたように韻子を見た。
「あなた、自信がないようなこと、言ってたじゃないの」
「でも、やるわ。勝てるように頑張る。だから約束して」
貞子は不安げに娘を見つめた。
「まさか、あなた、もうヴァイオリンをやめます、なんて言い出すんじゃないでしょうね」
「違うわよ」
それを聞いて、貞子は安心したようだった。まさか、韻子が澄音のことを言い出すとは思っていないのだろう。
「――いいわ。約束しましょう」
「ありがとう！」
韻子は貞子の腕をつかんだ。
「痛いじゃないの！　そんなに力を入れたら、後で手が震えますよ」
「はいはい」
ここは素直になることにした。
これでいい。――お姉さん、きっと私、勝つからね。
「修子さん、もう起きたかな」
と、韻子は言った。
「あら、起きたの」
と澄音はコーヒーカップを置いて言った。
ダイニングキッチンの入口に、大塚修子が立っていた。
「一杯飲む？」
と、澄音は訊いて、「ああ、そうか。コーヒーはやめておいた方がいいわね」
と言った。
「お世話になって、すみません」
と、修子が、無表情な声で言った。
「いいのよ。別に何もしてあげたわけじゃなし。――

何か食べる？　卵でも？」
「いいえ、私……」
「座ってなさい。栄養取らないと」
澄音は、立って、ガスの火を点けた。フライパンをのせ、うすく油をひく。器用に卵を片手で割って、落とした。
その間に、修子は、ゆっくりと入って来ると、椅子の一つを引いて、腰をおろした。
「よく眠れた？」
「ええ、とても」
「良かったわ。——眠れないのは、体にこたえるものね」
フライエッグを、皿へ移して、澄音は修子の前に置いた。それから、冷たいミルクをコップに注いだ。
大塚修子は、黙々と、卵を食べた。
澄音は、その様子をしばらく眺めていたが、その間、フラリと居間へ行って、新聞を広げた。
ほとんどソファに寝そべるような格好で、新聞を見ていると、いつの間にか、修子が入って来て立っている。澄音が気付いて、顔を見ると、修子は、
「ごちそうさまでした」
と頭を下げた。
「あんなもの別に——」
と、澄音は手を振った。「片付けは、後でのんびりやるから、放っといて」
「すみません」
修子は、両手を後ろに組んで、立ったまま動かなかった。
澄音は、起き上った。
「何か話でもあるの？」
修子は、ちょっと上目づかいに澄音を見た。
「あの人を——愛してたんですか」
澄音は、修子を見つめながら、
「水木君のこと？」

と訊き返した。「もう、どうでもいいじゃない。あの人は死んだのよ」
「でも……」
「悪いことは言わないわ」
と、澄音は、首を振った。「子供は産まない方がいい。苦労するだけよ」
修子は黙って目を伏せた。
「まあ、あなたの決めることだけど」
と、澄音は言った。「――どこか、行く所はあるの？」
「分りません。どこかで働いて……何とかします」
「そんなことができると思うの？　これから段々、体の方だってきつくなるっていうのに。余計なお世話と思うかもしれないけど」
修子は、ゆっくりと歩いて来た。
「あの人は、あなたを愛してました」
と、修子は言った。
「誰がそう言ったの？」
「彼が、自分で」
「信じてるの？――あんなプレイボーイ、やきもちをやかせるためになら、いくらでもでたらめを口にするわ」
「本当だと思います。あの人は、あなたが好きだったんだわ」
「だったらどうなの？　死んでしまった人を生き返らせることはできないのよ」
「ええ、分ってます。――どうしてできないのかしら？　生き返らせることができたら！」
修子の声が、震えた。
澄音は、少し目を見開いて、言った。
「あなたが殺したのね、彼を」
修子は、ハッとしたように、二、三歩後ずさった。
澄音は、ゆっくりと立ち上った。
「それなら、なおさらだわ。あなたがもし捕まったら、

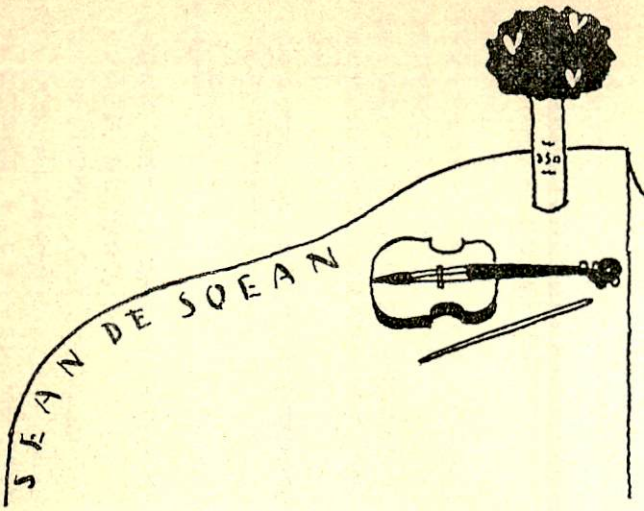
お腹の子はどうなるの？」
「警察へ知らせるの？」
修子は、怯えたように言った。
「まさか。――あの人は、あなたに殺されたわけじゃないわ。自分で自分の首を絞めたのよ。あなただって、逃げられたら逃げ切ればいいわ」
と、澄音は、修子の肩に手を置いた。

2

会場のホールへ入って行くと、もうロビーは、参加者たちとその友人たちで、方々に輪ができていた。
こんなときには、韻子も、ちょっと孤独を感じる。母を除けば、家族や親類も応援に来ないし、
「頑張ってね」
と肩を叩きに来てくれる友人もいない。
もっとも、母に言わせると、演奏家は孤独なものなのだそうだが。
「私、上尾先生にご挨拶して来るからね」
と、貞子は、いそいそと行ってしまう。
韻子は、受付へ行って、チェックを済ませた。ほとんどの参加者が、もう到着している。
やはり、普通のコンクールとは違って、これに合格すれば、すぐに、国際的な活動が待っているので、それだけ、参加者の意気込みも違うのだろう。
「水城さん！」
と声をかけてやって来たのは、あの天才少女、宮内好美だった。
「あら、早いのね」
「電車がもっとかかると思ったんです。そしたら、意外に早く着いちゃって」
「電車で来たの？」
韻子はちょっとびっくりした。普通、こんなときには車で来るものだ。



「だって、誰も送ってくれないんですもの」
と、好美は、すねて見せた。「ボーイフレンドの一人でもいればいいのにね」
「ご家族の方は？」
「来ないんです。私、一人。みんな冷たいんですよねえ」
これには驚いた。——負けるなあ、と韻子は思った。
「その辺でお茶でも飲みましょうか」
と、韻子が誘うと、好美は喜んでついて来た。
ホールの地下に、パッとしない喫茶コーナーがあった。
「空いてるわね。みんな上で待ってるのかしら。まだ一時間もあるのに」
「そうですね。——水城さん、何にします？　私、チョコレートパフェ」
韻子は、笑い出しそうになった。十七歳にしても、少々幼ない感じである。しかし、だからこそハッとす



るほど美しい音楽を作り出すのかもしれない。
「――あなた、勝つわよ」
と、韻子は言った。
「どうかしら。でも、いやなんですよね、それも」
「どうして？」
「あっちこっち行かなくちゃいけないんでしょ？　そんなの、私には早過ぎるんです。まだ高校生なんですもの」
「それはそうね」
「もっともっと楽しみたいし。仕事となったら、いやなときでも奏かなきゃいけないでしょ」
「これを受けたのは、お母様のご意向？」
「いえ、先生が勝手に申し込んじゃったんです。本人に相談もしないでですよ」
好美のふくれっつらに、韻子は笑い出した。
「あなたって本当に愉快ね」
「そうですかあ」

と、宮内好美は、チョコレートパフェと取っ組みながら、「ああ、太っちゃう！」

などとやっている。

呑気なのだ、気負いがない。

「水城さん、合格したら、杉本カルテットに入るんでしょ」

と、好美は言った。

「そうね。もし合格したら、のことよ」

「そうなったら、もうプロですね。まだ学校あるんでしょ？」

そうだった。そんなことは考えてもみなかったが。

「学生時代って、いいですね。何だかんだ言っても」

「何だかんだ？」

「テストがあるとか、色々いやなこともあるけど、ってことです」

「ああ、そうね。——学校、楽しい？」

「あんまり友だちがいないんです。ヴァイオリンに時間取られるでしょ。そんなに練習しないんだけど」

それはどこの子供も同じだ。——音楽が友だちになれば、言うことはないのだが。

「お姉さんもコンクール荒しなんですよね」

と、好美が言った。

「コンクール荒しね」

韻子は笑った。「まあそうね。でも——もう結婚するの」

「へえ、おめでとうございます。でも音楽の方は？」

「やめちゃうみたいよ」

「そうですか」

好美はフーン、という感じで肯いた。

別に、「もったいない」とか「私なら、そんなことしない」という表情を、全く見せないのだ。——それが、韻子には快かった。

「私はずっとヴァイオリン奏いてるだろうな」

と好美は言った。「ものになってもならなくても。

ずっとおばあさんになっても、孫に聞かせるんじゃないかしら。ほら、よくあるでしょ、子供をつかまえて、浪曲聞かせるとか、あんな感じで」

ユニークな子だ。韻子は吹き出しそうになった。

気が付くと、母の貞子が入って来る。

「お母さん、ここよ」

「何をしてるの！　どこへ行っちゃったのかと思ったわ」

「子供じゃあるまいし。——あ、お母さん、宮内好美さんよ」

「こんにちは」

好美はピョコンと頭を下げた。貞子の方は複雑な顔で、

「どうも……」

と言った。「——もう準備しなくていいの？　他の人は仕度してるわよ」

「心配性なんだから」

と、韻子は言った。「何ならお母さん、自分で出る？」

どうやら、好美の呑気なところが、少しうつったようである。

3

時間がきた。

ホールは静かだった。——別に演奏会というわけではないので、もちろん客席はがら空きだった。参加者と、その家族や先生たちだけが、聞いているのである。

一番前の列に、杉本カルテットの三人と、それに上尾が座っていた。——審査員というわけだ。

「では一番の方から」

とアナウンスがあった。

最初の参加者が、ピアノの伴奏者を伴ってステージ

へ出て来る。かなりあがっている様子。
ぎこちなく頭を下げ、すぐにヴァイオリンを構える。
ピアノの音に、弦を合わせて、奏き始めた。
ピン、と緊張がホールの中に張りつめる。——始まったのだ。

「私……分らない」
と、大塚修子は、椅子に腰を落とした。
「もう彼は死んだのよ。それはどうしようもない事実だわ」
と澄音は言った。
「彼は——私の中にいるわ」
と、修子は下腹に手を当てた。
「ロマンチックなことね。でも、現実はそれじゃ済まないのよ」
と、澄音は言って、ふっと息をついた。
「あの脅迫してた男を殺したのも、あなたなの？」
と澄音は訊いた。
「ええ」
修子は肯いた。「あの男は、あなたたちをゆすってたんでしょう」
「ただゆすられてただけじゃ、殺しまではしないものね。——私、あなたを見たわ」
「え？」
と修子が顔を上げる。
「ホームでね。あなた、あそこで待ち合せてたの？」
「あの駅の前で……」
「そう。私も、あの男が来るっていうんで行く途中だったんだけど。——あなたを見かけて、あれ、と思ったわ。あなたのこと、良くは知らなかったけど、顔ぐらいは見かけていたものね」
「私は全然……」
「そうでしょう。凄く思いつめてるようだったわ」
澄音は、タバコを一本取って、火を点けたが、すぐ

に思い直したように、押し潰した。「――あなたが、飛び込む気じゃないかと思ったのよね。それで見ていたら……」

「じゃ、見たんですね、本当に」

「ええ。あの男を突き飛ばすのをね」

修子は、床へ目を落とした。

「――殺すつもりじゃなかった。ただ、私の子供を守りたかったの」

「あなたは二人の男を殺したわ。もちろん、どっちも死んでもともとのような男たちだけど、あなた自身、そう思って納得できる？」

と澄音は訊いた。

大塚修子は、何も答えなかった。

澄音は、肩をすくめた。

「いいわ。好きにすれば。もし、何か手伝えることがあれば、やるわ」

修子は首を振った。

「そう。――じゃ、私はちょっと出かけるわ。あなた、もしここにいたければいてもいいのよ」

澄音はそう言って、歩き出した。

二階へ上り、自分の部屋で、着替えをしていると、ドアが鳴った。振り向くと、修子が立っている。

「どうしたの？」

スリップ姿の澄音は、ワンピースを手に取りながら、訊いた。

「あの人……」

「え？」

「あの人……あなたを愛してるって言ったわ！　あのときホテルで、私を抱いて、その最中に――あなたの名を呼んだ！」

修子は、声を震わせた。

澄音は、修子が、両手に肉切り包丁をつかんでいるのを見た。そして真直ぐ、自分の方へと向って来るのを――。

宮内好美の演奏が終った。
会場にざわめきが走った。
「――十五分間、休憩にします」
とアナウンスが入る。
席を立って、ロビーへ出た人々は、ほとんど例外なく、好美のことを話していた。
韻子は、楽屋の方へ行ってみた。好美が出て来る。
「凄かったわよ！」
と、韻子が言うと、
「どうも」
と、好美がちょっと照れくさそうに舌を出す。
「うまく奏けたでしょ」
「ちょっと途中でリズムが狂っちゃって。でも、まあまあかしら」
「まあまあでそれじゃね」
と韻子は、好美の肩を抱いた。
ロビーへ出ると、みんなの視線が好美の方へ集まった。
「あ、先生だわ。ちょっと挨拶して来ます」
「どうぞ」
韻子は、小走りに走って行く好美の後ろ姿を見送って、時計を見た。まだ十分ある。
「――こんにちは」
と、声がかけられた。
「まあ、来てたの？」
と、韻子が嬉しそうに言った。
武田百合だった。
「聞き逃してなるもんか、ってね。――もう済んだの？」
「これからよ」
「良かった！　頑張ってね」
「ありがとう」
「お姉さん、具合どう？」

「もうすっかりいいわ。元の調子よ」
「立派ね。——私も見習わなきゃ。でも、もてないしなあ、私」
百合がため息をついて首を振ったので、韻子は笑い出した。
「じゃ、仕度があるんでしょ」
と、百合は言った。「客席に行ってるわ」
「終ったら会いましょうよ。母が一緒だけど、うまく別れるから」
「いいわ。お祝いができるといいわね！」
「ありがとう」
と韻子は言った。
百合が客席の方へ姿を消すと、好美が戻って来た。
——何だか、浮かない顔だ。
「どうしたの？」
「いえ、別に……」
「先生に何か言われた？」
「そうじゃないんです。先生は賞めてくれたんですけど……」
「じゃ、どうしたの？」
好美は、少しためらっていたが、
「今、話してた人、お友だちですか？」
と訊いた。
「百合さん？　ええ、そう。——どうして？」
好美は、困ったような額を伏せた。
「どうしたの？　何か……」
と韻子がくり返して訊くと、好美は、ゆっくり顔を上げた。
「こんなこと——お話ししちゃいけないのかしら」
「言ってみて。誰にも言わないわ」
「怒りません？」
「怒らないわよ」
「私の友達でピアノを専攻してる子がいて……。あの武田百合って人と、あるコンクールで一緒になったん

です。予選はどっちも通って——でも、私の友達の方が有力候補だったんです。そしたら、あの武田って人……。私の友達の家へ、そのコンクールの本選の三日前から、いやがらせの電話をかけたんです」

「百合さんが？」

「夜中も構わず。——誰かにお金をやって、かけさせたらしいんです。鳴らして、家の人が出ると切る。そのくり返しが、夜通し……。で、私の友達、結局寝不足になって、前の日は母親と二人でホテルに泊って休んだんです。——そのときは誰がやったか分らなかったんですけど、後になって、電話をかけた子がしゃべって、武田百合って人だと分ったんです」

「信じられないわ……」

韻子は首を振って呟いた。

「ごめんなさい。こんなこと、言っちゃいけなかったわ」

「いいえ、いいのよ」

と、韻子は言ったが、それ以上、何を言っていいのか分らなかった。

あの百合が？　まさか、と思ったが、好美には嘘をつく理由がない。

「韻子！」

と貞子が走って来る。「早く仕度して！」

「はい。——じゃ、後でね」

と好美に言って、韻子は、楽屋の方へ歩き出した。

出場者は、自分の番があと三人というところで楽屋へ入ることになっている。——韻子は、この休憩の後、三番目だった。

4

貞子は、席について、手もとの名簿を見ていた。

今のところ、韻子より腕が上というのは、あの宮内好美という子だけだ。他の参加者たちは、明らかに韻

子より落ちる。

今、ステージに出ているのは、韻子の前の奏者だった。——奏き始めて、聞いている貞子はホッとした。これなら韻子にはかなわない。

韻子の後に出る何人かは、貞子もこれまで、何度か聞いて、腕は分っていた。韻子よりずっと落ちる。

やはり、強敵は宮内好美だけだった。

ただ技術を取れば、宮内好美の方が強い。それくらいは、貞子にも分っていた。

しかし、ともかく宮内好美は若い。高校生である。カルテットの一員として、活動できるかどうか、それに、派手な演奏をするタイプなので、ソロに向いている。

それに、上尾の点が加われば……。まだ充分に韻子にも希望はあった。

「頑張ってね……」

と貞子は呟いた。

前の奏者が終った。さて、韻子である。

「——失礼します」

と、誰やら、女の子が声をかけて来た。

「はい？」

「水城さんのお母様ですね」

「そうです」

「お電話が入っています」

「電話？——誰かしら、いやだわ」

「急用だとか」

「分りました」

貞子は、仕方なく席を立った。韻子がステージへ出て来るのを、チラリと見て、ロビーへ出る。

「こちらです」

受付の女の子が、受話器を示した。

「——水城でございますが」

「あ、水城さん。良かった！——前にお伺いした南といいます」

一瞬、思い出せなかった。
「あぁ、刑事さんですね。今、とても大切な演奏会の最中なんですよ」
と、貞子は、迷惑そうな様子を隠さずに言った。
「実は、お嬢さんがけがをされて――」
「何ですって？」
「今、お宅へうかがってるんですよ。入ってみると、上のお嬢さんが、倒れていて」
「澄音が？」
「刺されたようなんです。今、救急車を待っています」
――貞子は、一瞬、めまいを感じた。
「それで――あの――様子はどうなんでしょうか？」
「大丈夫です。わき腹を刺されて、でも当人はしっかりしておられるんで、ちゃんと自分で血を止めましてね。一一九番へかけようとして這って来たところへ、私が来合せまして」
「そうですか……」
貞子は息をついた。「あの――申し訳ありません、ご迷惑をかけて……」
「いや、そんなことは構わないんですが」
と、南刑事は言った。「すぐにこっちへ来ていただけますね」
「はい」
と言ってしまって、貞子はためらった。
「救急車が来たら、すぐ近くの病院へ運びます。やはりご家族の方がおいででないと――」
貞子は、今、韻子が演奏しているホールの方を振り返った。――今、ここを出て行くことはできない。とてもそんなことは……。
「――ちょっと待って下さい」
と南の方が言った。「今、お嬢さんと替ります」
「澄音。――もしもし？　澄音？」
「お母さん、そっちはどう？」

澄音の声がした。多少力が入っていないが、いつもの声だ。
「それより、一体どうしたっていうの？」
「いいのよ」
「良くないよ。刺されたって、一体――」
と言いかけて、貞子はハッとした。「あの子だね、昨日うちに泊めた――」
「お母さん」
澄音は遮った。「もういいのよ。彼女は飛び出して行って――車にはねられたわ」
「それじゃ……」
「自分から、車の前に飛び出したのよ。たぶん助からないだろうってことだったわ」
「そうなの……」
「あの子のことを恨んだり、なじったりする権利は私たちにはないわ。そうでしょう？」
「澄音……」
「水木君を韻子から引き離すために、私に彼を誘惑しろと言ったのはお母さんよ」
貞子は何も言わなかった。受話器を持つ手が震えた。
「大塚修子が水木君を殺したのも、もとはといえば、私とお母さんのせいなんだわ。殺されたって、文句は言えないわよ」
貞子は、目を閉じて、息をついた。
「澄音――」
「聞いて。私は悪運が強いから、死にはしないわ。でも、傷が治って退院したら、家を出るの」
「出る、って……」
「結婚するのよ。もう、コンクールともレッスンとも関係のない世界に入るの」
「お前、そんな……」
「もう決めたことよ。――韻子がどうするかは、私には分らない。でも、私の二の舞にはさせないで」
「澄音、ともかく今はけがを――」

「心配しないで」
と、澄音は、冷ややかに言った。「そこで結果を見届けてちょうだい」
「今、そっちへ行くからね。元気を出して」
「充分元気よ」
と澄音の声は笑っていた。
泣いているような、笑い声だった。
「――救急車が来ました」
と南が受話器に出た。「病院から、そこにまた電話を入れることにします。そこでお待ちになっていて下さい」
貞子は電話を終えると、ちょっとふらつくような足取りで、ホールの方へ戻って行った。
拍手が聞こえた。――韻子の演奏が終ったのだ。
貞子は、扉から入ってすぐ近くの空席に腰をおろした。
何も分らなかった。混乱が、貞子の中で渦巻いている。
いつしか、全部の参加者の演奏が終っていた。
ホールの中がざわついた。――審査の結果は、すぐに発表になるはずだった。
「――ここにいたの」
韻子が、貞子を捜しにやって来た。「どこへ行ったのかと思ったわ」
「ご苦労様」
「どうだった、演奏？」
「そうね。――とても良かったわ」
と、貞子は言った。
「何だか気がないのね。怒ってるの？」
「いいえ、そんなことないわ」
「そう。ならいいけど。――発表、すぐかしら？　待ってるのっていやなものね」
韻子はふと思い出して、「ねえ、約束、忘れないでね」

「約束？」
「ほら、もう忘れてる。私が合格したら、何でもお願いを聞いてくれる、って――」
「ああ、あれね……」
「憶えといてね。私、前の方の席に戻ってる」
「そうしなさい。私はここにいるから」
「じゃ、後はお祈りでもしててよ」
韻子はそう言って、通路を歩いて行った。
貞子は、頭を垂れ、目を閉じた。――一体自分は何をして来たのか。娘たちのために――いや、自分自身のために？
そうではない！　娘たちのためだ！　何もかも、澄音と韻子のために捧げて来たのだ……。
韻子は、席へ戻りかけ、途中で、肩に誰かの手が触れたのを感じた。
「あら」
武田百合だった。
「おめでとう」
と百合は言った。
「まだ早いわ」
と答えながら、韻子の笑顔は、こわばっていた。
「いいえ、きっとあなたが勝つわ」
と、百合は言った。
百合の表情は重苦しかった。
「ロビーへ出ましょう」
――ロビーは、閑散としていた。みんな中で、発表を待っているのだ。
「私の負けだわ」
と、百合は言った。
「何のこと？」
「聞いたんでしょう、宮内って子から」
と百合は言った。「私、あなたの姉さんに言われたひと言が忘れられなかったのよ」

「姉の？」
「ピアノをやっても時間のむだだと言われたことよ。――あなた方姉妹を、めちゃくちゃにしてやりたかった！」
「百合さん……」
韻子は唖然とした。
「あなたと上尾との仲を言いふらしたのも私よ。あなたの恋人が殺されたとき、写真を撮ったのは、私の親類の男の人なの。あなたのお母さんのことは、噂で聞いてたからね。お母さんを見張らせていたら、あの殺人に出くわしたのよ。あなた方を脅迫させたのも私よ。もともとぐれた人だったからね。あんな死に方しちゃったけど、同情するほどのこともないわ」
百合は、低い声で笑った。「――でも、結局、あなたは本物だったのね。何もかも乗り切って、とうとうここまで来てしまったんだもの」
韻子は、何も言わなかった。怒りも湧かない。ただ、哀しかった。
「じゃ、頑張ってね」
と百合は言った。「もう会うこともないでしょうね」
百合が足早に会場を出て行く。韻子は、ホールの中へ戻った。
妙に中がざわついている。誰かが走って来て、韻子の手をつかんだ。
「どこに行ってたの！」
宮内好美だった。「合格したんですよ！　早くステージに上らなきゃ」
韻子はポカンとしていた。
「私が……？」
「そうですよ！　早く、早く！」
知らない内に、舞台に上っている感じだった。拍手が湧き上る。
杉本カルテットの、他の三人が、待っていた。韻子が歩いて行くと、第一ヴァイオリンの杉本京子が、花

束を渡してくれる。拍手が高まった。

やっと、勝ったのだ、という実感が湧いて来た。お母さんはどこかしら？——韻子は、客席へ目をやった。しかし、強いライトが当たっているので、客席は見えない。

そのとき、貞子は客席にはいなかった。また電話で呼び出されたのである。

貞子は、受付の電話を取った。

「あ、南さんですか。どうも申し訳ありません。今終りましたので、すぐに参ります。病院は——」

貞子は手帳に病院の名と場所をメモした。「では、これからすぐに——え？」

「実は……」

南が、重苦しい声で言った。「救急車の中で、突然ひどく出血しまして……。病院へ運び込んで、緊急手術をしたのですが」

「あの……澄音は……」

冷え冷えとした間があった。

「亡くなりました。つい、今しがたです。お電話する間もなくて……」

——貞子は、震える足を踏みしめながら、ホールに戻った。

「——母と姉のおかげです」

突然、韻子の声が耳に飛び込んで来る。「これからが勉強です。早く、カルテットとしてのまとまりができるように、努力します」

韻子が、人前でこんなに力強く話すのを聞いたのは、初めてだった。拍手が起る。

韻子は、深く頭を下げ、それから、杉本京子の手を握った。

貞子の頬を、涙が伝って行く。

手が、いつしか動いて拍手をしていたが、その音は、舞台の上の韻子の耳には、もう届かなかった……。

〈本篇は「東京タイムズ」紙上に昭和五八年五月六日より九月七日まで掲載された作品です〉



TOKUMA NOVELS

赤川次郎
昼と夜の殺意

発行者　荒井　修
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二

Jirō Akagawa ©1983
落丁・乱丁はおとりかえいたします
Printed in Japan

〈編集担当　松岡妙子〉

83L27g

ISBN4-19-152823-8

書下し長篇推理
「萩原朔太郎」の亡霊
内田 康夫
¥六八〇

書下し長篇官能サスペンス
尼僧殺人巡礼
赤松 光夫
¥六八〇

長篇ミステリー
偽装特急殺人旅行
斎藤 栄
¥六八〇

書下し長篇本格推理
国会議事堂殺人事件
斎藤 栄
¥六八〇

長篇本格推理
悪魔を見た家族
斎藤 栄
¥六八〇

長篇本格ミステリー
箱根高原殺人事件
斎藤 栄
¥六八〇

坊主探偵シリーズ
横浜殺人街図
斎藤 栄
¥六八〇

書下し長篇ミステリー
横須賀殺人港
斎藤 栄
¥六八〇

長篇推理
女か虎か
高木 彬光
¥六五〇

長篇本格推理
狐の密室
高木 彬光
¥六八〇

長篇歴史SF
魔天忍法帖
山田風太郎
¥六八〇

長篇歴史SF
忍法八犬伝
山田風太郎
¥六八〇

最後の忍法帖
剣鬼喇嘛仏
山田風太郎
¥六八〇

傑作ハードボイルド
地獄への直行便
海渡 英祐
¥六五〇

吉田警部補苦虫捕物帖①
おかしな死体ども
海渡 英祐
¥六〇〇

加藤刑事夢想捜査録
ふざけた死体ども
海渡 英祐
¥六五〇

＊
殺人ファンタジア
海渡 英祐
¥六〇〇

早瀬邦彦ずっこけ探偵録
美女が八人死体が七つ
海渡 英祐
¥六五〇

長篇歴史ミステリー
黎明に吼える
海渡 英祐
¥七八〇

長篇サスペンス
華麗なる誘拐
西村京太郎
¥六五〇

長篇サスペンス
ゼロ計画を阻止せよ
西村京太郎
¥六八〇

書下し長篇サスペンス
盗まれた都市
西村京太郎
¥六八〇

書下し長篇サスペンス
黄金番組殺人事件
西村京太郎
¥六八〇

長篇サスペンス
けものたちの祝宴
西村京太郎
¥六八〇

書下し長篇推理
聖夜に死を
西村京太郎
¥六三〇

＊
書下し長篇推理
消えた巨人軍
ジャイアンツ
西村京太郎
¥六五〇

長篇サスペンス
魔家族
笹沢 左保
¥六八〇

長篇推理
霧に溶ける
笹沢 左保
¥六八〇

長篇本格推理
死人狩り
笹沢 左保
¥六八〇

長篇推理
明日まで待てない
笹沢 左保
¥六八〇

長篇サスペンス
暴行
笹沢 左保
¥六八〇

書下し長篇ヒューマン・サスペンス
その朝お前は何を見たか
笹沢 左保
¥六八〇

長篇サスペンス
殺人ネットワーク
小林 久三
¥六八〇

連作ミステリー
女は帯も謎もとく
小泉喜美子
¥六八〇

書下し長篇本格推理
支笏湖殺人事件
草野 唯雄
¥六八〇

書下し長篇怨霊ミステリー
私が殺した女
草野 唯雄
¥六五〇

書下し長篇クライム・ミステリー
黒十字架連続殺人事件
草野 唯雄
¥六八〇

書下し長篇サスペンス
パリ殺人事件
加納 一朗
¥六八〇

書下し長篇推理
殺人フィルムへの招待
加納 一朗
¥六八〇

書下し長篇警官小説
捜査—北九州病院長バラバラ殺人事件 中村 光至 ¥六八〇

書下し長篇推理
虹の悲劇 皆川 博子 ¥六八〇

書下し長篇推理
霧の悲劇 皆川 博子 ¥六八〇

書下し長篇本格推理 いっちょうロンドン
一丁倫敦殺人事件 日影 丈吉 ¥六八〇

国際謀略小説
六人目の裏切者 伴野 朗 ¥六八〇

ハードマグドンの嵐II
地球の光と影 田中 光二 ¥六八〇

長篇未来パニック ジャック・ブラン
大氷結 邦光 史郎 ¥六五〇

長篇企業推理
巨悪商社 邦光 史郎 ¥六八〇

書下し長篇ミステリィ
魔の視聴率 福本 和也 ¥六五〇

書下し長篇航空ミステリィ ジャック・ブラン
日本乗取り計画 福本 和也 ¥六八〇

ハードサスペンス
愚か者の戯れ 福本 和也 ¥六八〇

書下し長篇航空ミステリィ
傷痕の翼 * 福本 和也 ¥六五〇

長篇サスペンス
空白迷路 福本 和也 ¥六八〇

連作推理
盗みは人のためならず 赤川 次郎 ¥六八〇

書下し長篇推理
死者は空中を歩く 赤川 次郎 ¥六八〇

書下し長篇推理
死体置場で夕食を 赤川 次郎 ¥六八〇

ユーモア・ハードボイルド
マザコン刑事の事件簿 赤川 次郎 ¥六八〇

ユーモア・ピカレスク
待てばカイロの盗みあり 赤川 次郎 ¥六八〇

長篇青春ミステリー
昼と夜の殺意 赤川 次郎 ¥六八〇

小説日本核武装
獅子は闇にて涙を流す 南里 征典 ¥六八〇

書下し長篇サスペンス
獅子は怒りて荒野を走る 南里 征典 ¥六八〇

書下し長篇サスペンス
蒼き湖の叛乱 南里 征典 ¥六八〇

書下し長篇
雪原逃亡十三年 生田 直親 ¥六八〇

書下し長篇パニック小説
東京大地震M8 生田 直親 ¥七〇〇

書下し長篇パニック・ノベル
ソ連侵略198X年(上)(下) 生田 直親 各¥六八〇

書下し長篇航空ミステリィ
コンサート殺人事件 大谷羊太郎 ¥六八〇

長篇ハードボイルド
賭けるものなし 生島 治郎 ¥六五〇

賭けるものなしPART II
暗黒指令 生島 治郎 ¥六八〇

賭けるものなしPART III
抹殺指令 生島 治郎 ¥六八〇

長篇ハードボイルド 第一部謀略
ダイヤモンドはわが墓石 生島 治郎 ¥六八〇

長篇ハードボイルド 第二部逆転
ダイヤモンドはわが墓石 生島 治郎 ¥六八〇

書下し長篇推理
善人たちの夜 天藤 真 ¥六八〇

書下し長篇本格推理
散歩する死者 中町 信 ¥六八〇

書下し長篇本格推理
高校野球殺人事件 中町 信 ¥六八〇

書下し長篇本格推理
自動車教習所殺人事件 中町 信 ¥六八〇

書下し長篇本格推理
黒の環状線 山村 美紗 ¥六八〇

女検視官 江夏冬子
京都殺人地図 山村 美紗 ¥六八〇

長篇ハード・サスペンス
影の弔鐘 勝目 梓 ¥六八〇

長篇官能サスペンス
獣たちの熱い眠り 勝目梓 ¥六八〇

書下し長篇官能サスペンス
処刑台の昏き祭り 勝目梓 ¥六八〇

官能サスペンス
墓碑銘は炎で刻め 勝目梓 ¥六八〇

官能サスペンス
赦されざる者の挽歌 勝目梓 ¥六八〇

長篇ハード・サスペンス
地獄の十点鐘 勝目梓 ¥六八〇

書下し長篇ハード・サスペンス
逃亡原野 勝目梓 ¥六八〇

ハード・サスペンス
その傷口を刃で飾れ 勝目梓 ¥六八〇

長篇ハード・サスペンス
けもの道に罠を張れ 勝目梓 ¥六八〇

長篇ハード・サスペンス
暗黒天使 勝目梓 ¥六八〇

ハード・サスペンス
火刑の朝 勝目梓 ¥六八〇

長篇ハード・サスペンス
黒の饗宴 勝目梓 ¥六八〇

長篇ハード・サスペンス
闇に光る肌 勝目梓 ¥六八〇

書下し長篇ミステリー
連続殺人 枯木灘 梶龍雄 ¥六八〇

長篇官能サスペンス
破戒の海 中堂利夫 ¥六八〇

書下し長篇伝奇ミステリー・シー・レーン
首狩りの海上路 志茂田景樹 ¥六八〇

書下し長篇伝奇推理
新黙示録北辰の秘宝 志茂田景樹 ¥六八〇

書下し長篇伝奇推理
新黙示録飛龍の秘図 志茂田景樹 ¥六八〇

書下し長篇伝奇推理
新黙示録銅鐸の秘曲 志茂田景樹 ¥六八〇

長篇伝奇サスペンス
熱き魂の復活 志茂田景樹 ¥六八〇

長篇伝奇サスペンス
復活の盟約 志茂田景樹 ¥六八〇

長篇アドベンチャー・ロマン
さらばアフリカの女王 森詠 ¥六五〇

小説第三次世界大戦
日本封鎖 森詠 ¥六九〇

アドベンチャー・ロマン
戦場から帰ってきた男 森詠 ¥六八〇

書下し長篇サスペンス・パサルガダ・メッセージ
帝王の遺言書 森詠 ¥六八〇

ドキュメンタリー・ミステリィ
アイヒマンの遺産 檜山良昭 ¥六五〇

長篇本格推理
山之内家の惨劇 檜山良昭 ¥六五〇

書下し長篇鉄道ミステリー
ローカル線に紅い血が散る 辻真先 ¥六八〇

長篇本部推理
ライン河の白い霧笛 高柳芳夫 ¥六八〇

書下し長篇スパイ・アクション
死の太陽を射て 赤羽堯 ¥六八〇

書下し長篇スパイ・アクション
謀略の黒い海 赤羽堯 ¥六八〇

長篇政治サスペンス
赤い絨毯 清水一行 ¥六八〇

長篇企業内幕小説
一億円の死角 清水一行 ¥六八〇

長篇エロチカル・サスペンス
裸体家族 阿部牧郎 ¥六八〇

長篇エロチカル・サスペンス
熱い夜の旋律 阿部牧郎 ¥六八〇

長篇エロチカル・サスペンス
情事の脅迫者 阿部牧郎 ¥六八〇

長篇スポーツ・エロチカル
虹の野望 阿部牧郎 ¥六八〇

女性弁護士 朝吹里矢子
星の証言 夏樹静子 ¥六八〇

女性弁護士 朝吹里矢子
花の証言 夏樹静子 ¥六八〇

書下し長篇アドベンチャー・ロマン
白夜の弔鐘 李家豊 ¥六八〇

＊印は現在品切中です。また、定価は変更される場合があります。